
神話21世紀

風月莢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話21世紀

【Zコード】

N7283C

【作者名】

風月莢

【あらすじ】

死神『詩月』と、人間の『ハル』。「在るべき運命」と、「誤つて進んだ現実」。誰もがより良い未来を求めているけれど、相容れない。
バトルあり。別れあり。

手紙（前書き）

掲載中の小説「彼女の言葉は真実か」、「彼女の言葉の裏側に」「彼女の彼女の彼女の」、「果てない夜、主題は銀の月」続編です。宜しければ先に前四編（一読下さい。

手紙

君へ

永遠を望むべく
愚者の行進
歩みは遅い
先導者は創造主
行き着く先は廃の森

そここここの道しるべ

「その灯を信じて良いものか」

なんと疑い深い

賢者は語る

「左に倣え」

もはや神の手に余る

ばらばらと散つた愚者と賢者
高層ビル 空虚のタワー
ここは木々が死んだ街
アスファルト 化学汚染
そして灰の闇

傷付く理由が欲しい
貴方に届く声が欲しい
綺麗な右手
汚れた左手

意味がまるで無いとしても
覚悟を準備を用意を祈りを
愛しい人を逃がす為に

一、始まりは

千秋は一年前に死んだ。私達「彼岸の使い」の一方的な過失によつて。生涯は十年と一ヶ月。実際の運命の八分の一だった。

彼岸の使い。それは人間界で悪魔や天使や死神などに分類され、いわゆる存在の曖昧な個体。アイデンティティーは人類の運命の管理。人類が絶えればこちらの存在価値も消失され兼ねないので、せいぜい滅ばない程度に気を配る。表裏一体の異世界を陰ながら視野に入れて来た我々のエゴは、知らず自らの目を濁らせた。

我々は優れている。

異なる世界を比べる事の愚かを口にする者はなく、私達はそんな怠慢から彼を死なせたに違いなかつた。

萩原千秋は母と姉と彼の三人で暮らしていた。父は千秋が物心つく前に愛人の元へ走つたらしいが、その辺りの詳細は私の知るところでは無い。恐らくさほど重要ではないのだろう。片親だが母と姉は心有る人間だつたため彼は真つ本当に育つた。素直で礼儀正しい、モラル重視の大人に受けの良い子供に。

そんな魅力的な子育てをした母親も、夫を人間界で一番ドロドロした愛憎の諍いで失い、手塩にかけた息子に先立たれて心を壊したらしい。今はどこか知れない病院で療養中で、「前管理者」代打の私に分かつてているのは姉の春の所在だけだつた。

ぼんやりと人間界を思いながら、代打要請の旨が書かれた用紙を広げる。それはハガキ程度の大きさで、コピー紙程度の薄さの紙切れ。

萩原千秋及び春の運命管理者代替について

105地区G-008所属、詩月に引き継ぎを命じる。これより先「萩原春」と回帰の契約を執り行い、在るべき運命に帰す事を最

優先事項とすべし。以下履歴。

1985-03-12 萩原春／日本、静岡に生まれる。

88-09-24 萩原千秋／同上。

89-12-01 両親離婚。以後春、千秋共に父親

と再会する事無し。

98-10-25 自宅で火災発生。本来春はここで死ぬべき運命。

前管理者が弟千秋と取り違え誤つて生き残る。

その後の詳細は別紙確認の事。

田眩がした。通常を装つたさり気なさで渡された紙切れは、余りにも異常だった。

本来春はここで死ぬべき運命。

誤つて生き残る。

在るべき運命に帰す事を。

ぐしゃっと紙切れが音を立てた。手に力が入つたらしい。自分の脳は一体何を拒絶しているのだろう。ピンとこないままに、紙のついでに心まで潰れたようだ。

「詩月」

心境に不釣り合いな穏やかな呼び声が聞こえて振り返る。「つい」う時決まって私の名前を呼ぶのはたった一人。同期の里雪。

「…余計な事考えるな」

里雪は端折れる部分すべてを端折つて核心に触れた。その気遣いが逆に私の神経を逆撫でする。

「余計な事つて」

突き放す言葉を返す。大人げないとよぎるが抑圧出来る程の余裕がない。普段そういう顔をしない里雪が一瞬困った表情を見せ口を開いたが、何も言わず、代わりに私が続けた。

「はつきり言えばいいじやない。ハルに入れ込んだって私の立場が悪くなるだけだって」

里雪は無言を守っているが、視線は逸らない。何を言つても私が噛み付くと悟つたらしく、僅かに目を細めただけだった。

「そもそも関係ないでしょ。口出ししないで」

彼が私の身を案じて声をかけたのは明白で、さすがにこの言い方はマズイと思う。それでも暴言は柔らかなクッションに吸収されたようで、里雪は不快そうな顔もせず、数秒の間の後静かに分かつたと呟いた。

二、沈黙の森

「……うれ。本当に寝したくないんだナビ」
濡め息混じりに里霧がくしゃくしゃに丸められた紙を差し出した。
「あくつとある。

聞くまでもないのだが動搖を氣取られたくないのでつい無愛想に答える。

「その後の詳細は別紙確認の事。お前が捨てたんだろ」
そうだ。萩原春のその後。シナリオのない人生の経過が淡々と記された用紙。読んでいるうちに頭に来て、丸めて捨てたのだった。
里雪がそれを丁寧に広げていく。

「……いらない」

「一説用」

そんなもの必要ない。

私はハルを死なせるつもりなんてない。

里雪が顔を伏せる。私に対する

里雪が顔を伏せる。私に対する文句は言い尽くせないほどあるだ
ら。でも彼がそれを言つ事はない。私が反論する事が分かつてい
るから。その反論の中に禁句が混じると分かつてゐるから。だから
彼は何も言わない。

「じうじうの、不用意に捨てるな」

何も言わない筈の彼がそう言つて、少しだけ良心が痛んだ。

紙切れといえ、重要書類なのだ。彼岸の使い同士で見られても問題はないが、捨てたと広まればそれ相応の処分が下る。

「別にいいじゃない。いつかばれるわ」

例え良心が痛んでも、私はこんな台詞しか出でこない。

「もう行くわ。ハルに会わなくちゃ」

くしゃくしゃに丸めて捨てたとは言え、内容はインプットされてしまっている。うんざりしながらも記憶は勝手に蘇る。ハルは現在母方の祖母と二人、見るからに不便そうな安アパートに住んでいる。二人と言つても会話は少なく、傍目には他人同士と見えなくもない。それは父の愛人関係、離婚、千秋の死、母・祖母にとつては娘だがが心を病んだ事が影響している。祖母はその一連の話題を嫌つているらしく、ハルはそれを本能的に感じてしまっている。加え母は父と結婚する時駆け落ち同然だったと聞く。自分の存在そのものも、もしかしたら認められていないかもしれない。その懸念がハルを律する。

ハルと回帰の契約をしろだなんて。

ハルではなく元の運命通り千秋が生きていたらこんな不幸はなかつた。少なくとも「有るべき」だつた元のシナリオには母親が心的障害で床に伏す記述はない。母親は千秋を溺愛していたのだ。ハルにも千秋にも意識して同じように接していたが、実際は千秋のウエイトが大きく、千秋が生きていたのなら生きる希望をここまで失いはしなかつたのだろう。

無理だ。

用紙の空いたスペースに走り書きされた文字を思い出す。

ハルの祖母、2000.09.01死亡。

明後日。

ハル。あなたが悪いんじゃない。私はあなたの為に必死になるから、だから惑わされないで。

あなたが今どこにいるか知つてる。あなたが傷付いてるつて知つてる。だから信じて。償わせて欲しい。回帰の契約の事、本当の運命の事、言わなければいけない。あなたに聞いてもらわなければいけない。だけど私達が正しいんじゃない。なにか一つだけが正しいなんて事は有利得ない。あなたが生きているのは、間違いなんかじゃない。

人間界。薄暗がりの森に入る。都心の隅の小さな森。少し肌寒く、これが人間には心地よいのだろう。それともこの視界の悪い景色を恐れる者もいるのだろうか。ひとつそりとした無音が美しく、ハルに会う前に一眠りしたい衝動に駆られる。勿論そうする気はないし、そもそも眠れる心境でもない。ただ少しでも遅らせたい。出来るならこの小さな森で迷つて永遠に会わずにすめばいい。

ハルはこの森の奥にいる。彼女はこの場所を気に入っている。ここは涼しいからだろうか。草木が好きなのだろうか。そうであつて欲しくないのだが、誰もいなかなのだろうか。

森の奥は入り口よりもずっと密やかで、何者の侵入も無言の内に拒んでいるようだ。この深い藍色のセキュリティをかい潜れるハルは、やはり生と死の境界線を乗り越えているのかもしれない。不用意に踏み出した一歩ががさつと音を立てた。闇の中に立つて姿勢良く星を見上げていたハルがびくりとこちらを向く。齧かすつもりはなかつたのに。

「……だれ……」

淡い茶色の目が私を見ている。それは不審者に向ける目だ。不審者、あながち間違いでもないけれど。

「こんばんは、ハル」

がさつ。ハルが反射的に後ろに下がる。

「……私の名前……」

私に対する不審の度合いが増す。

「あなたのこと、知つているわ」

「だれなの」

「死神つて言つて信じてくれる?」

一步ずつハルに近付く。踏み付けた土が柔らかく沈む。

「なに言つてるの……」

「千秋の事も知つてているわ」

「……アキ……」

ハルの動搖が伝わってくる。

許して。

「彼、あなたの代わりに死んだの」

「……え

「本当はあなたが死ぬはずだった。手違いがあつたのよ」

「なに……」

「だから私は

許して。

「あなたと回帰の契約を交わしに来たの」

三、彼岸の水際*回帰の契約

「良い子ね、詩月。ちゃんと仕事出来るじゃない」
彼岸の川に映る闇。ハルと詩月が見られている。

「里雪くん。そう思うでしょ」

「今俺が考へてるのは、お前をこの川に落とすかどうかだ」
独特の妖婉さで、女は視線を水面に落としたまま笑う。

「ふふ。それも一興。でも貴方には無理」

「代打に詩月を押したのはお前だろ。…詩月に一番向かない仕事
だ」

「そうよ。でも上手くやつてるじゃない。このまま何も起こらない
かもね」

「かもな。それならそれでいいさ」

女の指が闇をすくつた。ハルと詩月が波に揺れる。落ちる雲の音
が微かに響いた。

「…下克上を覚悟しつけ」

女は変わらぬ笑みを里雪に向けた。

「出来るなら止めはしないわ」

「ああそれから」

里雪の背中を女が止める。

「私には桜つていう名前があるの。忘れないで」

里雪は桜を一瞥する。

暫しの沈黙を穏やかな声が繋いだ。

「お前も忘れるな。桜の天下は儂い」

* * *

ハルの揺らいだ茶色の目が痛々しくてまともに見られない。私に後ろめたさがあるからだ。馬鹿な相談だつて分かってる。だからい

つそ否定してくれていい。私の存在を。

「千秋が死んだあの火事の日。本当はあなたが千秋を庇つて死ぬ筈だつた。それが動けなかつたでしよう。あなたは庇わなかつた」

そう。ハルに千秋を庇う余裕はあつた。「千秋を庇つて死ぬ筈だつた」より「あなたは庇わなかつた」の台詞に、目の前の彼女は反応する。今まで何度も自問して來たのだろう。なぜ助けなかつたのかと。

「時間を巻き戻す事は出来ないけど、あなたの命と交換で千秋の魂をここへ呼び戻す事は可能よ。肉体は私達が用意するし、過去は不自然じやない程度に書き換えるから千秋が生きるのに問題はないわ。あなたが後悔しているのなら考える価値はあるでしょ」

考える価値。余りの白々しさに吐き気がする。ハルが助けなかつたのではない、私達が千秋を選んだのだ。命を奪う事を目的として。

「アキを生き返らせたい」

ハルがきつぱりと言つた。初めから決まつていたような答え。考える素振りはなかつた。

「そうね。私もよ。でもあなたの死が必要だわ」

「…構いません。ずっと償いたかつた」

違う。

「ハル。もう少し考えてからでもいいわ。また来るからその時に答えを…」

ハルの即答から逃げたくて踵を返す。

「いいえ」

強いハルの声が飛んだ。

「考えると答えられなくなります。今でいいです」

反射的に振り返る。

「私を疑つた方がいいわ、ハル。死神なんて嘘かもしれない。あなたが死んでも何も起こらないかもしれないでしょ」

目が合つてしまふ。

「私は信じます！」

あつさりと言い放たれてしまった。

「信じます。だから」

縋れるなら何でもいい。そう聞こえる。

「だから私を」

殺して。アキを生き返らせて。その言葉がハルの口の中で拡散していく。

ああ。私は本当に死神なんだ。

「あなたが望むなら、…私には都合が良いわ」

がさつ。

一步。ハルが後ずさつた距離が、私との見えない壁を物語る。遠い。

「今この瞬間を持つて回帰の契約成立としましょう」

私の正面、ハルの背後。月明かりの静寂を二つの柔らかな羽音が乱した。闇に塗られた葉と葉が触れ合う程度の囁かな音。ひとつは藍。ひとつは紅。控えめな白い明りを羽に宿して、それは現れる。「私があなたに直接手を下す事はないわ。死神はもつと残酷なの」「この鳥は…。私は誰に殺されるの」「

「藍がホタル。紅がシユリ。これを手なずけるのが回帰の契約」「

「どうして。私はいつ死ぬの」

「いつかしら。私にはわからないわ

「…どういうこと…」

「あなたがあなたに手を下すのよ。シユリとホタルを手中にしたら、あなたは痛みも何もなく自然と消滅する。葬儀はない。死も消滅も当事者に取つては同じだけど、残される側には違う。死は悼まれるけど消滅はそうじやない。誰の心にも残らないからあなたを思う人はいない。回帰の契約はそれを受け入れるつて事よ。」「

「痛みはない…」

「そうよ」

痛みすらない。誰にも。

四、心の内

でも。あなたには。

「ハル、ねえ…」

本当に良いの。そう聞きたい。

「シユリがあなたに懐かないってことは

それはつまり。

ねえ。

「あなたに生きる力が」

あるって、ハル。

「あなたの魂が『生』を願つているって」

そういうこと。

だってシユリは、あなたの精神の一部なのだから。

ホタルは理性。シユリは本能。ハルの精神を反映している。
理性なんて、強い程辛いだけなのに。

人を優先して、自分が押し潰されて、どんな言い訳を重ねねばあなたは救われるって言うの。

本当は嫌だと。

そう言つてくれさえすれば。

死にたくない。

千秋から目を逸らせて。

このまま、あなたを生かして千秋を黙殺する事を正義だと主張出来たなら。

「詩月さん。シユリを懐かせる方法を」

教えて下さい。

ハルあなたは違う。

放つておけばきっとシユリを手なずけて、私達の失態さえ赦して死を受け入れてしまう。

理不尽だと声を荒げる事もなく、それが世界のシステムだと割り切つて。

「未練を、消しなさい」

それでもどうして私はこんなに汚い言葉を口に出来るのだろう。

「この世界の心残りを捨てなさい」

「捨てるつて…」

「あなたが死ねない一番の理由を消化するのよ」

ハルが腑に落ちた、という顔をした。

ああ。そうか、そう続くように小さく声を漏らした。

彼女が現世に残したいもの。それは余りに明確で、

「それじゃあ、まだ私が死ぬのはずっと先ですね」

安堵と絶望を織りませて、微笑した。私はこんな微笑をこれまで、恐らくこの先も一度と見る事はない。ハルの瞳は、そこに存在する景色の断片の一つも映していなかつた。全く別の色をその目に宿して、幻を追いかけて。

美しい。

そう思った。

虐殺だ、略奪だ、その一方でこうやって凛と微笑む人間がいる。だから。

私達「彼岸」が優れている、なんて下らない。

こんなに、危険なくらいに美しいものを「管理」の一言で括るなんて、そんな事。

ねえハル。やっぱり私はあなたを死なせるなんて出来そうもない。

五、キャンバス

たつた一日前に「明後日」と呼んだ日が訪れて、ハルの祖母は息を引取つた。

簡素な葬儀があっけなく終わつて、涙ひとつ零さないハルが隣に立つた私にこれも運命かと訪ねる。そうだと答えた私には、本当は何一つ確信がない。

「分からぬ今までした。結局、最期まで」

消え入りそうなハルの声を、私は救うことが出来ない。

「祖母が私をどう思つていたのか」

静かな部屋に、ぽつぽつとハルの声が流れる。それがどうしようもなく遠く聞こえて、思わず口を開いた。

「…知りたかった？」

不躾な質問にハルは微笑んで、そのまま愛おしそうに棺を見つめる。

「いいえ、いいんです。……

もう、終わつたんですね」

自分に言い聞かせるような静かさに、苦しくなる。空氣さえ重い。

「ハル、あなたは、」

ひとりじゃないのに。

説明できない感情を、伝える術が無い。やりきれないもどかしさが募る、今逆説的に感じる生を、あなたは分かっていない。

生きているのに、あなたは。確かにここにいるのに。

「私も急がないと

何を急いでいるの。願わないことばかり。

ハルが筆を取る。部屋の壁に立てかけられたのは大きなキャンバス。それを覆う柔らかな布を引き剥がせば、現れるのはどこまでも淡い

淡い色彩。

「描き上げたいんです」

これが未練。残しては死にきれないもの。そうではないと気が付いて欲しい。

没頭するハルに聴きたい。描き上げたらもういいのかと。

そんなにも暖かく柔らかな、それは一体何を描いているのかと。全てを捨て去つてしまえるような人間が、欲しくもない光をそんなにも必死に描けるなんて茶番。あなたは生きる力を持っているのに、これに全てを注いで終わらせてしまおうとしている。

死にたくないと言つて。

シユリもホタルもどうでもいいと言つて。

ハル。これは、それだけで反故になる契約だったのに。

六、宣戦布告* 叶わぬ願い

黒髪の青年が立ち止まる。彼の正面に里雪。

「なんだ、華夜」

『カヤ』と呼ばれた青年が不敵に笑う。面白そうに口を開く。

「お前は詩月につくだろ、当然」

「……、何の話だ」

「ん、死神のクーデター、ね。やつてくれるぜ、あいつ」

くくつと笑つた華夜が続ける。

「戦おうぜ里雪。俺は桜につく」

「ふざけるな」

「いつまで大人しくしてゐつもりだ？もつ始まつてんだぜ、選べよ。

戦うか、それとも、」

答を知りながら試すような視線。

「詩月を見殺しにするかだ」

「詩月を？」

「ハル、ではなく。

しかし華夜は意味ありげな笑みを浮かべただけだった。

* * *

ハルの肩にホタルがとまる。深い青の鳥。けれどそれは、幸福を運んでは来ない。

『ハル』

名を呼ぼうとして、声にならない。ずっとこんなことを繰り返している。筆を動かし続けるハルはホタルの存在にも気付いていないのかもしない。何かに浸かれたようにキャンバスに向かう姿は、既に俗世界から離れてしまっている。

その場に居るのに耐えられなくなつて踵を返す。彼岸の世界に帰つ

ても、助かる訳ではないけれど。

ハルから逃げるように、晴れ渡る空を飛ぶ赤い鳥。それは運命に抗うハル自身の想いなのに。

「逃げて、」

眩いた瞬間に涙が零れた。

振仰ぐ空が眩しい。

暖かな日差しと、その空に伸びてゆく縁。
見えるものは、平和そのもののような景色。

今世界が動いていること。それがすじぐく、虚しい。

七、見えない歯車

ハルから離れたシユリは、人恋しように低空飛行する。そこに留まつていたいと、名残惜しそうに赤い羽根を閃かせて。だからその手に捕われたのは、あながち不注意でもなく、どこかで。

望んでいたのかもしれない。残酷なくらいに、この世界に引き繋いでくれる他者の手を。

「うお俺マジスゲエ！ 飛んでる鳥捕まえたぜ！」

粗野な高校生に囲まれて乱雑に掴まれた羽をばたつかせるシユリ。

「なに」口イツマジウケる！ つーかそれイン口？

けれど足搔くのは何から？

「変な色だなー、真っ赤」

「おーもしかして売れるんじゃね？ 羽抜いてみる？」

「うーわ残酷！」

「つ、ゲッマジで抜くの？」

「たりめーだろ」

そしてそれを冷ややかに見つめる小さな目。

「やめなよ。可哀想じやん」

居合わせた幼い少年から余りにも当たり前に漏れたその一言。高校生の動きが止まる。

「ギヤーガキに注意されたぜ！ ！」

「お前のペットかあ？ 大事ならカゴに入れとけよ」

そこに辿り着いた、

「……ちょっと……」

今。私が守りたい唯一の。

「ちょっとちょっと、シユリッ！見つけたっ」

綺麗なまま消えてしまいそうな彼女。

幼い彼も高校生も突然割り込んだハルに場を崩されて、反応が遅れる。ハルの柔らかな髪が軽やかに揺れている。

「ああ、捕まえて下さったのね。どうもありがとうございます！ 何とお礼を申せばよいやら、」

「え…あ、イヤ…」

置み掛けるハルにたじろぐ高校生。

「全くシユリってば入なつこくて、構ってくれる人のところにすぐ行つてしまつんです」

嘘。

「本当にもう手がかかつて！」

「あー俺ら急いでるんで……。……な？」

「お、おう…」

「じゃ俺ら行くんで…」

そそくさと背を向ける高校生たち。

「…あら。行つてしまつたわ」

それは独り言なの？

「ねえ、その鳥」

そしてハルと。ハルに声をかける残された少年。

未来なんて、もしかしたらもうとっくの昔に決まつていて、要するに「歯車が動き出した」なんて表現はただの喻えでしかない。

それとも歯車が存在するとして、それならば誰か、そこに引っかかっているネジを一本でも奪い去つて、ああだけどそれに何の意味があつた？

何もかも。 全てについて。

「遊ばれてたけど」

少年がはつきりと告げる。

「知ってる」

微笑むハル。

「君が助けてくれたね。ありがとう」

「なつ、なんで怒らなかつたんだよ！羽抜かれるとこだつたんだぞ

！」

真つ直ぐに反論する少年。

「軽率な行いを諫めるのは大事なことよ」

そう囁いたハルの、呼吸する程度の微かな間が優しい。
穏やかに、緩く撫でるよつた風が過ぎてゆく。

「でも時には、」

ハルと少年の視線が行き交う。

「笑わなくてはね」

薄情するならば、見えなかつたのだ。描かれた未来の一欠片さえ、
私には。

八、君はヒーローかエキストラ

見上げれば上空を飛行する紅の鳥。

高く自由を求めて、どこまで言つても満たされない。完璧な自由などありはしない。それでも遠く、遠くへ。ほんの一マリでもいい。生きている分だけ、可能なだけ。

「シユリは、いつもどこかへ行つちゃうの」

「…ふうん」

「まるで懐いてないみたい。ホタルは賢いから目の届く範囲についてくれるんだけど」

ハルと少年はなんとなく近くの河原に落ち着いて、ぼんやりとした空気の中で、取り留めなく座り込む。別に会話が溢れているだとか、まして一緒にいる理由は何もない。ただ淡々とした不思議な距離感を二人で共有している。少年は妙に物静かで、子供らしくない冷めた目で地面の一点だけを見つめていた。

ハルの言葉に、彼はその年嵩に不釣り合いな思案するような間を置いてそつと振り向く。

「…違うと思うけど」

ハルが反射的に合わせようとした視線を避けて、再び下げられた瞳。「追いかけて来て欲しいから、逃げるんだよ」

言葉だけ、呴かれた音量に反してはつきりとしていた。

「え…っ、そうなのかな」

「うん」

「そうかな、そうだと嬉しいな」

笑ったハルを、彼は一瞬だけ眩しそうに見た。ハルはそれに気付かない。

「…またいない！シユリ！！」

がばつと立ち上がったハルにつられて少年も空を仰ぐ。先程までそこについた赤い鳥がいない。

「探さなきや！じゃあまたね、ヒーローくん」

去り際にそう言い残してハルが走っていく。遠くなる後ろ姿。追いかける視線。二人を隔てるような風。

「いいなあ、シユリ……」

少年が残された河原で座り込んだまま、誰にも届かないくらい小さく呟いた。

九、いなのはだれ

探してくれる人がいて。

「、……ダセー……、あれ鳥じゅん」

はつと我に返つた少年が呟く。何比べてんだよ、俺は。

「くそつ

彼はそのまま地面に寝そべつて、吐き出せない不満を持て余したまま空を見上げる。

「わかつてゐよ、俺じゅ黙日だつて」

そうして、暫くだるそうに雲を眺めていた少年は一呼吸ついて、何か思い直すように起き上がつた。

迷いの無い足取りで行き着いたのは彼の自宅。

「……ただいま」

「おかえリスバル！ 遅かつたじやない。心配したのよ」

間違いなく愛情のこもつた声で少年の母親が少しだけ慌ただしく出迎える。けれど。

「うん。ちょっとね」

そつけない少年の返事に母親は不信感を抱かない。遠い目で母を見る、その少年の愛情に彼の母は気付かない。

言いたいことは、山ほどあるのに。

母にそつと微笑んで自分の部屋に向かった少年は、薄暗がりの部屋に電気も付けず、閉じたばかりの扉に背をつけて進もうとも戻ろうともしない。酷くゆつくりと深呼吸をして、彼は自分を宥める。

「だから、いないんだって」

静かに目を閉じれば、部屋の照明など何だつて構わない。

遮断出来ないことを遮断したいだなんて、どうすればいいかわからない。

『ナツメ』って呼んでよ。

少年の兄は死んだのに。

「スバル、ちょっと来てー」

スバルという名の人間は、もうこの世にいないのに。

「スバル聞こえてるの？」

台所から呼び声。既にいない人の名を。それとも、

「ちょっとスバル、手伝ってくれない？」

存在しないのは、スバルか、ナツメか？

閉じた瞳を逸らすように開ける少年。

「わかったよ！」

母に応えた声が痛々しい。

十、そして絡みあい

ペイ。

少年がドアノブに手をかけたと同時に微かな高音が聞こえた。
ペイ。

窓の外から。ノブから手を離し、少年は窓へ近付く。カーテンを開けるとそこに赤い鳥がいた。

「シユリ！ なんで…」

少年が気付いたことにはしゃぐように、シユリが羽ばたく。

「スバル、早く来てくれない？」

「わかつてる！ すぐ行く！」

反射的に母に応え、彼はシユリに向き直る。

「早く帰れよ、あのネーチャンが心配すんだろ」「ペイ？」

なんだと言わんばかりにシユリは主張する。

「いいな、早く帰れよ。俺もう行くから」「ペイ、ペイ。

シユリは確実に、「ナツメ」を選んで来た。否定しながら予感を捨てられない自分にナツメは苦笑する。

彼は「帰れよ」と、もう一度小さく残して部屋を後にした。
そして一通り夕食まで済ませて部屋に戻ったナツメは、窓ガラスごしに再び赤い塊を見つける。

「何でいんだよ、シユリ…」

「シユリは、自分の運命に抗ってるのかな。ねえ、ホタル」
見つからないシユリを一日保留にして自宅に戻ったハルは相変わらず、浸かれたように筆を持っている。ただいつものように綺麗な色はない。描こうとしては、諦める。その繰り返し。欲しい色が、

見つからない。

「『ごめんね……でもこれが、私が生きる為の、……』

生きる為の。死ぬ為の。

「契約なの……」

ハルはそう言って、筆を置いて一息ついた。

「……シリを探しに行かなくてはね」

* * *

「ハルは、律儀ね。賢人は言つじやない。正直者ほど馬鹿を見るつて」

「……詩月、」

「私なら、忘れるわ。あんな理不尽な契約

「おい、詩月」

月と星を眩ませる都会の灯り。私は高いビルの屋上から、散らかったイルミネーションを見下ろす。

「聞こえてるわ。ちやんと

「後ろ向きでか」

だから当然、屋上の中程に立った里雪には背を向けることになる。

「おい」

里雪の言いたいことなら、分かっている。充分過ぐるほど。それと同じくらい、里雪がそれを言わないことも知っている。私は、するい。

「聞くわよ、顔を見てね。でも他の皆と同じことを言つつもりなら、さつさと立ち去つてけよつだい」
振り返りながらそう告げる。

「邪魔だわ」

「お前に警告しておる奴らはお前のことを見配して、
規則の前に崩れる情なら結構よ。私は、
里雪。手を貸そとしないで。」

「薄っぺらい馴れ合いよりも自分の信念が大事なの
私は一人で戦える。」

「待てよ！」

「分かつてもらえないのは悲しいことだわ」
それだけ言い残して、里雪の返事は聞かなかつた。

十一、誰もがそれぞれに

詩月の去つた屋上に一人、佇む里雪の元に、ぱさりと蠍蟲の羽を持つ獸が現れる。

「悪いな、リュース

獸は里雪の声に反応してその肩に額を寄せる。絶対服従を誓つよつに。

「詩月を見張つてくれ。許容出来る範囲を越えたら俺に知らせろ。他の誰にも気付かせるなよ」

獸はピュイ、と一声上げ羽ばたいた。街の上空に小さくなつてゆく使い魔を見送つて、里雪は呟く。

「たく、手のかかる女」

* * *

「詩月ちゃん、また里雪くんと喧嘩したんでしょう？」
煩い。

「そんな時くらいね。あなたがここに来るのつて」

確かに私は滅多に書簡室には寄り付かない。ここにあるのは、下らない本ばかりだ。

「どうせ最後は里雪くんに助けてもらひでしょ？少しあは穩やかにしたら？」

分かつてる。この女は、私を試している。

「ハルなんて、どうでもいいじゃない。もう」

「桜、あなたの人選ミスだわ。私をハルの担当にしたのは」
試されなくたつて私は変わらない。私は桜と駆け引きしてゐんじやない。ただ自分に従つていいだけだ。

「里雪がいなくても私の力は変わらない。ハルの時間は私が責任を持つて取り戻す。私がね」

相容れないなら、つまつ、そういうことだ。

* * *

導かれるまま夜の街を歩いて、結局辿り着いたのは。

「あの……さ、ショリを届けに来たんだけど」

ショリを探し歩いて疲れたのだろう、一度は家に帰つて、ベッドに

寄りかかるように瞳を閉じた那人。

寝てるん……だよな……死んでるみたいだ……

ナツメはぼんやりと思う。

「ショリ、お前の『主人は綺麗だな』

ペイ。

「起しちゃ悪いかな。でも鍵かけないなんて不用心じゃねえ？」

ショリに囁きかける声は柔らかで、暖かい。

「どうしよ……もう明るくなるし……いいかな」

ハルは心地よいぐらいに優しい声を夢うつつに聞く。
だれ……。

「ねえ……、朝だよ」

アキ。

「アキちゃん……」

無意識に抱きしめたのは、さつと後悔の中心に頬の存在に重なった
から。

「え、」

緩く囁まれた中でナツメが小さく声を上げた。

一気に現実に引きずり出される。

「『めんなさい』…ちょっと違う子かと……思つて」

千秋かと。

ナツメを認めて瞳を逸らす。

「アキは、…弟なの。いろいろあって…もう会えないんだけど」

「……」

静かにハルを見つめたナツメは、濃い色の皿を僅かに揺らしただけ
だった。

「シユリを届けに来ててくれたのね」

「うん」

「ありがとう、お茶を入れるわ。ちょっと待つて
ハルはそう言い残して立ち上がる。

十一、真意はどこ

彼岸の世界では。

「因果ねえ。やつぱり呼び合ひのかしら、同じ境遇同士、
ハルとナツメは」

「女」を主張するような口調は里雪の背後から。天井の高い彼岸の建築物の中では、落とした声でもよく通る。

「性格悪いな。気配を消して近付くな桜。今の発言も取り消せ」
振り向きやま、里雪の冷えきった声に、桜がふつと微かな息をつく。白を基調とした背景に、その息はそれよりも白く色付くようだつた。

「同期でも里雪くんより階級は上よ。言葉に気を付けたらどう」
金髪が影を作つて、里雪の紅茶色の瞳がぐつと濃くなる。
「俺は階級に興味はねえし、もつとつこの昔に出世コースからは外れた身なんだよ。

「無駄な牽制」に苦笑なこつたな

「無駄じやないわ。階級と能力は比例してゐる。あなたのペットを私の追尾機が捉えた。詩月の動向は私の手中」

「手を出すな。詩月の好きにやらせろ」

そう言って捨て歩き去る里雪。

白く広い建造物の中心。一人佇む桜。

「冗談、」

桜が呟く。

そこには桜を知る誰もが見慣れた、余裕をちらつかせるような笑顔はない。

「せいぜい楽しませてもらうわ」

「深く深く、全てを沈めた深海の色。それが桜の瞳だ。その青は沈黙したまま波打つこともなく、里雪の後ろ姿を見据えていた。

「随分シケた面だな」

「どこからか現れた華夜がくつと低く笑う。なあ?と言いたげに軽く口角を上げ、桜を挑発的に誘つ。

「あなたは相変わらず楽しそうね」

無表情に返す桜。

「『最期の祭り』だぜ? 暴れた奴が勝ちだ」

無表情の隙間に、僅か万華鏡のように影が落ちる。鮮烈な彩りに溢れたその瞬間に、名前がないことを華夜は好ましく思う。

「そうね……」

桜は小さく零して、それ以上の言葉は紡がなかつた。

* * *

そして人間界。

「そんな訳でね、ハル。私人間界に降りることにしたわ」

お茶を入れようとキッチンに立つたハルの真後ろに、桜がふわりと現れる。

「初めてまして。私は桜。……詩月に会つてゐなら察しがつくかしら?」

「 桜、余計なことを。

「……『彼岸の使い』……」

不安そうな表情を取り繕いもせずハルが答える。

「上出来。完結で明確な答」

スズ、行け。

リン、

鈴の音を残して桜の肩を抉つたのは猫に似た、けれどもつと獰猛

な彼岸の使い魔。宙に散る鮮血の華。

「……きや……ちょつ……、」

青ざめたハルの口から漏れるのは動搖の声。

「つ、詩月の使い魔！」

スズを振り捨てた桜は肩の傷に怯みもしない。

「ハル！大丈夫！？」

「あ、はい、それよりこの方が……、詩月さんの使い魔つて……」

「桜、あなたには触らせない。

「油断したわ」

傷口を押さえ込んだ桜がさして痛みも感じさせない口調で言つ。

「桜が？」

「なんて、温いわ。詩月」

回り込まれた背後から、首筋を鋭利な刃物が撫でて行く感触。続

いて、そつちはダミーよと囁く桜の声。

「ダミーなんて、別に珍しくもないでしょ。ハルに気を取られるのも良いけど、冷静さを欠いてるわ」

たとえ冷静だつて、今の私と桜には歴然とした差がある。彼岸の使いの目にはどう見ても明らかに差がある。

「さて。墮ちて貰おうかしら」

切先が肌を突く感覚が強くなる。すと身を引いたと同時に桜の手に何かが投げ付けられた。

「え、……スリッパ……」

ハルが軌道線の始まりを見る。そして私と、桜も。

「何やつてんだよ、あなたたち」

「ナツメ。

「伏兵か……」

溜め息混じりに見つめる桜。

「……見えてるの？なんで……」

死に直面していない人間に、彼岸の使いは見えない。ハルに教えたことだ。

だから私は、返事が出来ない。

十三、深みに落ちて

「彼岸の使い」を視認出来る人間とは、通常彼岸の側から接触した者に限られる。ハルもその一人。

「彼岸の使い」は、相対した人間に死をもたらすために接触する。どれだけ回りくどいにしても、ハルもその点では決して例外ではない。だからこそ「彼岸の使い」は「死神」と言い変えることが出来る。実際私は「死神」という呼び名の方が明け透けで分かりやすくて、どれだけか気に入っている。

その論理で言つて、今ナツメが私たちを見ているのは異常といえる。普通に生きている普通の少年、ナツメには、『見えない』ことが正しいのだから。

「自分が、何を食べて生きているのかも知らないせに」
桜が、ナツメに向かつて敵意と取れるほどに冷たく言い放つ。私はほとんど無意識に空間を選び分けた。

「黙れ。彼の知ったことじやない」

空間を選び分けるとは、何も無いように見える場所で、何かを見つけることだ。密度の濃い部分と薄い部分を緻密に合わせれば、どこにでも気流が生まれる。荒れる乱気流で、他者を負傷させることも可能だ。これが人間から見れば、風を操つているように見えるらしい。それに憧れることもあるだろう。だけどこれは、魔法だなんて夢のあるものじやない。

「このまま魂」と封じてやる」

桜の周辺をぐるりと覆つて空気を歪ませ、そこだけ真空率を上げていく。ただし「ちらにダメージがない訳じやない。『自然な空間』を、自分を媒体にして「不自然」に変換するのだから当然私も消耗していく。それを確認して、風に縛られた桜の唇が綻んだ。

「やだ…息が上がつてるわ、詩月」

受けている攻撃を歯牙にもかけない緩やかな声音。

「うるさい。あんたに何が分かる」

上がつていく息の中で雑に応える。私が苦しくて、他の誰が困る。たとえ息が止まつたとして、それが何だつて言ひ？

「……何も

私の放つた風を宥めるように桜の腕がすつと伸びて、その手はそのまま真っ直ぐに私の首元を掴んだ。

「詩月の不幸を分かち合つ義理は無い。彼岸の使いが一時の感情に流されるなんて、」

回らない酸素で風が止まる。

酸素が消えても風だけ残るならそれでもいいのに。

「論外。互角以上になつたらかかつてらつしゃい」

攻撃が消失して、完全に桜が自由になつたと同時に気道を圧迫していた腕は離れた。

「その時は相手になるわ、いくらでも

咳き込んで息を整える私の耳に、暫く聞こえていなかつた「音」が戻つてくる。

「ちょっと、大丈夫！？しつかりして、ねえ！—

一刻を争うようなハルの声。

「詩月さん！—この子目を開けない！—」

「ナツメ！—」

ハルの言葉に振り返り、ぐつたりと瞳を閉じた少年の名を思わず叫ぶ。

名を知つていたということは、彼の存在を把握していたということで。関わるかもしれない予想はあつた。けれど出来過ぎている。

「桜は術を使わなかつたのに……どうして…」

桜は私の攻撃を粉碎こそれ、自ら仕掛ける真似はしなかつた。

「そりや桜一人じやねえつてことだろ？」

聞き覚えのある低音が鼓膜に触れる。

「謎でもなんでもねえ。どうしてもクソもあるか」

振り向けば、腕を組んで壁に凭れ掛かった黒髪の青年。

「華夜……、どうして……」

彼は面倒臭そうに髪を搔きあげる。

「こっちサイドの方が面白そ�だつたからな。つか、ビーフしてどうしてうつせーし」

「面白そ�……そんな理由で？」

声にならない声で聞き返した私を見て、華夜が小さく笑みを浮かべる。

「ふざけないで」

どうして誰もかれも。

「そんな下らない理由でハルやナツメがどれだけ傷付くかあなた考えたことあるの！？私たちの存在がどれだけエゴ的なものかあなたは」

「かわいい」

掴み掛かった私に、華夜はそう言った。

「無神論者は辛いね。自分の存在を認められない」

語る内容がそれでなければ、華夜の笑みは見とれるくらいに綺麗なのに。

「俺たちは神だよ。人間の生死を管理するのは当然だろ」

「……違う……つ」

死神だとして。それで権利があるなんて。

「そんなの……幻想だ……都合良く解釈するな……つ」

悔しくて落とした視界が震む。それでも華夜は穏やかに言った。

「それが真実なんだ」

その、幻想こそが。

十四、異常事態

例外が、ある。確率が低すぎて、言わなかつたけれど。

彼岸の体制は、人間で言つ会社組織や軍事組織に似てゐる。上層部の決定がその一階級下に伝わり、またそれがその下の階級に伝わる。それを繰り返して末端に情報が伝わる頃には、決定を覆すなど夢物語だ。

私たち末端はそれにカバーする地域を振り分けられて、その中で実務をこなす。私が担うのは105地区と呼ばれる、日本の一片。ちなみにハルの住んでいる場所はこの中には当たらない。ハルは、彼岸のリストでは103地区に該当する。今はハルの前管理者の『取り違い』の処分の結果として、地区の近い私がイレギュラーに管理を引き継ぐ形となつてゐるのだ。私より近隣の102地区や104地区的管理者に代打要請がいかなかつたのは、私の直属の上司である桜の思惑が大きい。

桜は同期のエリートで、野心家だつた。頭の回転が速い彼女はあつさりと階級を上げ、私に指示を出す側に回つた。私が異端な行動を取れば彼女の監督責任が問われる訳だから、桜にとつて私は煙たい存在だらう。

だけどその憂さ晴らしにハルを押し付けたつもりでいるなら、それは間違つた。桜は、私が彼岸の決定をいつも投げ出したい衝動に駆られながら実行していたことを知つてゐる。私が彼岸の存在について懷疑的であることを知つてゐる。だから通常の何倍も理不尽なハルとの契約が、取りかえせない痛手になるとも容易に想像がつくだろう。確かにその通りかもしれない。けれどその深手を私が甘んじて受けるとして、覚悟さえしてしまえば怖いものなど何もない。争いたくないなんてキレイゴトだ。私はもう、納得出来ないまま上層部の決定に従つつもりはない。

「ハル、死期が迫つていなくても彼岸の使いが見えることがあるの」
それは例外中の例外。

「詩月さん…」

「ハルとチアキの取り違いがあつてから、彼岸の方ではあなたの管理者の入れ替わりがあつた。前者から、私にね。あなたの場合は引き継ぎがすぐに済んだから問題はなかつた。でも、後任がすぐに決まらない時もある。まず管理者が入れ替わること事態が想定外だから」

ハルの表情が、訝しげに曇る。

「管理の担当がいらない空白の期間。この時は見えることがある」つまりナツメも管理者が入れ替わる事態が起こつてゐる。それは。

「詩月さん…この子も…、私と同じ…」

「そうよ」

ナツメにもハルと同じように、取り違いがあつた。そういう事だ。

十五、遠離る人近しい人

「賢いハルの担当で羨ましいわ。詩月」
桜が囁くように言った。

ハルは、直接的な発言をしなくてもナツメに取り違いがあったと悟っている。彼女の伏せた目が数秒苦しげに閉じられ、ナツメを抱えた腕にぎゅっと守るような力がこもったのが分かつた。

「この調子ならハルが消滅するのも時間の問題ね」

煽るような桜の言葉。聞きたくもない。

「その前に桜が消えるんだ」

真っ直ぐに言い捨てて睨んでも、桜はゆつたりと構えたまま。

「私は消えない。あなたの力じゃね」

「…面倒クセ」

成り行きを傍観していた華夜がつまらなそうに呟いた。

「桜、俺はもう行く」

華夜はいつも協調性に欠けて、他者と慣れ合つなんてことはしなかつた。飄々として自分本意で、誰にも属さないかわり、誰の敵でもなかつた。

「ええ、私も行くわ」

その華夜が桜と共にいる。

「華夜！」

あなたは『敵』なの？

『面白そだだから』、あなたは私と反対の立場にいるっていうの？

これはそんなに簡単な話なの？

「じゃあね。105地区の詩月」

その台詞を置いて二人は消えた。一人の気配が無くなつた瞬間、遠くから華やかな叫び声が聞こえた。その声に聞き覚えがあつて、咄嗟にハルに呼びかける。

「ハル！ 避け…」

「センパイ！……」

途端、激突して来たのは彼岸105地区の後輩。

「……アレ？ 大丈夫ですか？」

強烈な一撃を風のように忘れ、私の上に乗り上げたままその人物がぽかんと言つ。

「朝凪つつ！」

アサナギ。長い金髪を一つに束ね、夏空のよつたなライトブルーの瞳を持つ彼女は、とても手のかかる後輩だ。

「まあいいか。会いたかったです！！」

「はあそりやどうも……」

ぎゅうぎゅうと抱きついてくる朝凪には悪意の欠片も無い。

「そつそつ、はい、なぜかここに来る途中でナツメくんの魂拾つて。あやうくみーちゃんが食べちゃつところでしたよ」

そう捲し立てながら素手で掴んだナツメの魂を目の前に突き出した。

「みーちゃん？ ああ、あの何の役にも立たない使い魔……」

記憶を頼りに確認する。

「役には立たないけど癒してくれますよ」

「……癒されるのはあんただけ」

『みーちゃん』は生々しい大蛇だ。漢字にするなら『巳ーちゃん』。

……センスが無さ過ぎる。

「それにしても……」

偶然とはいえたナツメの魂の無事が確保できたのは奇跡だ。

「大手柄。朝凪最高」

「…………」

うつかり褒めた後の間に嫌な予感が過つた。

「つ、やつぱりセンパイ大好きです！……」

がばーっ！…とこう効果音付きで再び激突され予感が的中したこと

を知る。こと朝凪の奇行に関して的確な表現があるとすれば、抱きつくなんて可愛らしいのもじゃない。文字通りの『激突』だ。

「いちいち全身で表現しなくていいから！」

押しのけながらハルに向き直つた。

「ハル、紹介するわ。朝凪。見ての通りかなり暑苦しいけど別に害はないから」

「朝凪です。初めましてハルさん」

辛辣な紹介を意に介する素振りもなく朝凪はハルに笑いかける。

「ハルさん、心配しなくてセンパイがいれば万事上手くいきますから！バツチリです！私もいます！」

「…朝凪、余計なこと言うんじゃない。保証出来ない」

不確かな気休めで紛らわそうとするなら、それは無駄なことだ。

「保証は私がします。大丈夫です」

それでも朝凪は雑誌モデルのような完璧な笑顔で笑つて、そう言った。

十六、正義と呼べない

「じゃあ、……安心ですね」

暫くきよとんとしていたハルが、微笑んで応える。

「はい、お任せを」

「朝凪！無責任にも程がある！ハルも素直に受け答えなくていいのよ、もつと疑つて」

焦つて畳み掛ける先で、ハルは柔らかく笑っていた。…私を見て。

「詩月さんが笑つたの、初めて見ました」

ハルの不意打ちのような予想外のコメントに固まる。

笑つた？私が…？

ああ朝凪を褒めた時か。

だけどそれでどうして、ハルがそんなに安心したように笑うのかは分からぬ。

「…とにかく…、とりあえずナツメの魂を戻さなきや…」

ナツメの胸に手を当てる。けれど戻るはずの魂は宙に浮いたまま。

「朝凪、魂を保管する箱、持つてる？」

「え、あ…ハイ」

「ナツメの魂を保管する。貸して」

「体には戻さないんですか？」

戻したいけど。

「出来ない。ナツメ自身が嫌がってる」

戻りたくない。そう主張している。戻つてもナツメでいられない世界。

「生きることを拒絶してる…」

ハルが目を伏せた。何を思つたのか問いただすつもりはない。

「この状態の魂を戻すのは私じゃ無理だわ。『ランカ』に会いに行

く

「センパイ、私も行きます」

「駄目だ、朝凪は関わるな」「
思いのほか強い口調になつた。
傷付けたくない。」

命を奪うことの糧とする狂つた彼岸の世界で一人戦おうと決めてから今まで、笑つた記憶なんかない。そんな余裕はなかつた。

「行きます」

「来なくていい」

人間に肩入れし過ぎた私は、危ない。

「いいえ行きます。絶対です」

勝算のない戦争を仕掛けようとしている。自分が生まれた慈しむべき世界で。

「朝凪、私は彼岸全部を敵に回してゐる」

「知つてます」

私に付いて来るということは、確実に死に晒される。大切だからこそ、離れたいのに。

「私の側に付いたら、あんたも反逆者と見なされるわ……」

一人きりで墮ちていきたい。

まだ生きている心の奥で、悲しい願いが燐つた。

十七、既に始まっている

時の止まつたような彼岸の世界で、白い背景に馴染む色素の薄い金色の髪と、紅茶色の目を持った彼。彼の正面に艶やかに佇む、挑発めいた笑みをたたえた黒髪の彼。ここに存在するのは対立する色彩と、それを引き立てる不穏な空気。

「よお」

黒髪の青年が親しげな軽い調子で声をかける。

「華夜、お前…」

「ん。なんだよ、裏切つた、とか言つなよ？」

里雪の纏う空気が一瞬で敵意へと変わつた。直後に天井から落ちたのは、白い美しい欠片。

そして、爆音と、白煙が舞い上がる。それは作り物のようにきらびやかな光景。

「うん…腕は落ちてないね。心配が一つ減つた」

白煙の中心で身を屈めた華夜が満足気に呟いた。煙が晴れて全てが晒されれば、直撃にも関わらず服すら乱れていないことが分かる。

「ふざけんな」

詩月の前で揺れた暖かそうな紅茶の目が、冷酷な色を持つ。短く吐き捨てられた言葉が真つ直ぐに華夜に届いた。

「心外だな。俺は真剣だよ」

挑発。
爆音。

ばらばらと天井が落ちる。

彼岸が壊れていっても、構わない。

里雪の攻撃を真正面から受けて面白そうに目を細めた華夜は、身じろぎ一つしない。

「シールドに頼り過ぎると後悔するぞ」

「俺が防御に徹するとでも思つてんのかよ」

すつと華夜が構えた刹那、どこからか《ストップ》と声が聞こえた。瞬間、舞つていた煙が消え去る。残つたのは六の空いた床と折れた柱、碎けた天井、その残骸。

「……出た。無力化女。面白いとこだつたのに」

声の主を見とがめた華夜がぼやく。

「喧嘩なら他でして下さい」

『無力化女』と呼ばれた彼女が事務的にたしなめる。

「音波……」

音波。里雪が彼女の名を呼ぶと彼女はそちらに視線を移し、知的な眼鏡の奥で瞳を細めた。

「もういいや、冷めた。またな里雪」

溜め息混じりに華夜が言い残し、あまりにあつせりと背を向ける。

「おい待てよ……！」

「里雪さん……！」

音波が華夜を追おうとした里雪を引き止める。

「らしくないですよ。攻撃をしかけるなんて……なぜです
そして問い合わせて、思い当たる。

「……また詩月絡みですか」

「つるせえ」

里雪がバツが悪そうに零した。

「ああ。そうなんですか……」

やれやれと首を振る音波は呆れながらも続ける。

「それもいいですけど、もう少し考えて行動して下さいよ。ただでさえ素行不良で目立つてゐるんですから。一体いくつ揉み消したと思つてるんです。あなたと詩月の勝手な行動を

「……悪い」

「……こつちも本職があるんですから、私だっていつもいつも書類を書き換えられる訳じゃないんですよ?」

音波が豆粒ほどに小さな欠片を放る。それが損傷した床に接したと

同時に元通りに復元された。同じように、柱も、最期に特に大げさな素振りも無く弾いたそれが高い天井に当たつて、何もかもが元通り。

「下手をしたらランカの一の舞いに…」

里雪の顔を見ず音波は言つ。

「それは私も本意じゃないのでしつかりして下さい」

「…………」了解

充分過ぎるほど間を置いて、里雪が居心地悪そうに答えた。

十八、過去の言葉

そこは都会の片隅でうつかり荒れ果ててしまつたビルで、密やかに屋上に立てば地上の喧騒などじりでもこゝに思える。

廃墟が心地良いなんて、口クなやつじゃない。

ビルの屋上からぼんやりと地上を見下ろす彼の中で、ふいにそんな感想が持ち上がり、銜えた煙草の隙間から苦笑する息が漏れた。不良めいた人工的な明るすぎるほどの茶髪が、都会特有の乾いた風に乗つてさらさらと揺れる。

彼はまだ長いままの煙草を唇から抜き取つて、肺に入つた煙を吐き出した。

「…彼岸も地上もたいして変わんねえ…」

やる気のない呟きも都会の上空に溶けていく。それは誰に聽かせるでもない、けれど言わずにいれない言葉。

「『たいして変わんない』って？言つてくれるね、不良少年」

聽かせる予定の無かつた言葉に反応が返る。『不良少年』は、聞き覚えのある声に自然と口角が上がり、振り向きもせず答えた。

「少年に見えるかよ。そりやラツキーだな」

この世界に換算したら、何年生きてるんだか知れたもんじゃない。

少し沈黙した背後の声が、冷めたトーンで言い放つた。

「ただのガキだろ。世界が変わること待つてる。テーマは何にもしねーで」

こいつは。

今度こそ振り向いて声の主を視界に收める。そこにいるのはアイド

ルと言つて通りそうな整つた容姿の青年。柔らかな栗色の長めの髪と、瞳を縁取る長い睫毛が中性的なパートを引き立てて、『綺麗』という言葉が完璧に嵌る顔立ちをしていた。

「…お前、黙つてりや美人なのに。薔薇には棘があるつて自然の攝理な」

「薔薇だつてテメーの為に咲いてんじゃねえ。勘違いすんな」「…すいません」

下手をすれば同性まで手玉に取れそうな青年だが、本人はその容姿もどこ吹く風で微かな愛想すら浮かべない。

その原因が彼岸か……。

やりきれない。

「人間に…いるんだな、お前みたいのが。正直ビビつた」
それはいまだに嘘であればと考えてしまうようなこと。

「この世の何も一方通行じや成立しねえ。…自然の攝理だろ」
最期に視線を外した仕草が、綺麗だからこそ余計に痛々しく映る。

「フユ、」

「乱火^{ランカ}、テメーに客が来てる。今朝から目障りなんだ。何とかしろよ」

呼ばれた名前を遮つて、『フユ』は吐き捨てる。

「…客?」

乱火がフユの更に背後を伺つた。

フユが客と呼んだのは、 私。

「ん?あー…珍しい客だな…詩月」

乱火が私を見て言つた。

「ごめん。田立たないようになつたつもりだつたんだけど」「そつちじやねえ、後ろ」

うんざりしたようにフユが吐き出す。

後ろ……閉めた筈のドアが10センチほど開いて、身を隠しながら

も隠れきつていはないのは、一つ結びの長い金髪の片側。

朝凪。

「…………田立たないようになつたつもりだつたんですけど……

そろそろと顔を出した朝凪は、黒いキャミソールに十字架のチョーカー、マイクロミニの黒いスカートの上に白い二重ベルトを重ねて、ガーターで吊つた網タイツをすらりと覗かせている。

「うん間違つてるわね。ティストとか」

ただでさえ日本には『ブロンド・ブルーアイズ』は居ないつていうのに。

「うわーんセンパイすいません何かよくわからんんですけどこか間違つてるみたいでごめんなさいわーんでもセンパイ大好きですうわーん」

バタバタと更に騒々しい…朝凪。

「フユ…………目障りつて……」

念のために乱火が伺う。

「あれ。すっげー目障り」

もはや『あれ』呼ばわり。

「…………返す言葉もございません」

乱火は『彼岸の使い』で、フユは『人間』で。意味が分からぬ。

「乱火、今日はもう帰つてくれんな。つか一生帰つてくれんな。お前たちとは関わりたくないねえ」

そう言つて身を翻したフユは、そこに本当に存在しているのか疑つてしまふくらいに洗練されていた。去り際に『目障り』だと言いきつた朝凪に向かつて自分の着ていたパークーを投げる。

「着とけ。そんなカツコしてる季節じゃねえ」

行動と裏腹にドアを閉める音だけが酷く大きい。もう閉まっているドアに向かつて朝凪がキラキラした目を向けた。

「はい！！彼岸の使いは人間界の温度つて感じないんですけど御借りします！！ありがとうございます素敵な方！！」

「朝凪、可能性のない恋は止めときなさい」

暴走する朝凪に出来る限りの助言をして、乱火に向き直る。

「乱火、一緒に住んでるの？人間と？」

今日はもう帰つてくんな。そんな口振りだった。

「うん？俺こっちの身分証明書とか無いからな。世話になつてると普通どこの誰とも知れない人間を家に入れるだろうか。違う、『彼岸』を知つているような素振りだつた。

「まあ、今となつちや彼岸の証明書も無いけどな。で、用件は何聞きたいことばかり増える。

「その彼岸のことで手を貸して欲しいの」

「無理。他には」

即答される。

「他はない。一度きりでいいの、お願い」

乱火が慣れた手付きで煙草を取り出し火を付ける。その一連の動作に焦躁感を覚えた。

「お願いされてもなあ。貸せる手なら貸してやりたいけど、あいにく俺は無力でね」

「私の知つてる中であなた以上に力のある人はいないわ

吐き出された煙さえ様になる。

「いつの話してんだよ」

彼岸に煙草は存在しない。けれどどこか懐かしい気がした。景色が全て色褪せてしまつたように。

「それは、過去だろ」

遠い。

「詩月、俺は必死になるのに嫌気がさしたんだ。

知つてるかよ？人間界では、それをルーザーって呼ぶんだぜ

ああ、もう。そんな言葉は聞きたくない。

十九、愛のかたち

「ルーザーつて、もう戦えない人が使う言葉でしょ。あなたのは挫折じゃなくて妥協でしょ、心が死んでないならまだ闘える」

私の知っている中で彼岸の世界に最初に楯突いたのが乱火だ。彼は当たり前な顔をして「くだらない」と言い、当たり前な顔をして上層部の決定を無視した。保身などには揺らがない、自分の羅針盤を持った強い男だつた。

「相変わらずグッサリくる言い方だな」

言葉と同時に白い煙が吐き出される。そのまま紡がれた言葉は、

「… 何してほしいわけ」

ルーザーじゃない。彼は死んでない。

「体に戻るのを拒絶してゐる魂を戻したい。その為の力を借りたい」

「あー、それ俺の一存じゃ無理」

苦い顔で答えが返つてくる。

「彼岸の力は封じかけられてつから。他当たれよ。それか…」

言い淀む先に選択肢があることを臭わせる。

「それか？」

地面に落とされた煙草。それを揉み消す足下。ジーンズに、スニー
カー。褪せた色彩が眩しい。

「あいつ関わりたくないつつてたけど…、」

「あいつつて、さつきの彼？」

「ああ。フユがOK出したら、多分何とかなるぜ?」

フコ。

「フユ…さつきの方……。でしたらそれは私が責任を持つて…!」

朝凪が今にもフユを追いかけて行きそうな勢いで反応する。

「あなたは何もしなくていいから」

乱火に間借を許しているとは言え、フユは彼岸に好意的ではなさそ

うだつた。

「彼、何者なの？」

地面に落ちた煙草の灰が、風でちらちらと散る。乱火の視線がそれを追つていた。

「あいつは…、『力』を持つてる。ただの人間だけ生まれた時から『彼岸の使い』が、つまり俺たちのことが見えたらしい」

「見えた…？それって…？」

「ああ」

そんな可能性は、考えたくもない。

「俺たちが人間を狩つてんのも、あいつには見えてた」

フユには見えていた。そんな優しい話じやない。『フユにだけ』、見えていた。

「…うそ…そんなことって」

「彼岸の綻びが人間界に影響を出してんだぜ。どう考へても異常だ」そう言つた後の乱火の深い溜め息は、彼岸で見たことのない種類のものだつた。

「参戦したくなーけど、フユを絶望させとくのはちょっと気分ワリイ」

ひとりきりで誰にも理解されない光景を見てきた。フユの触れたから切れそうな美しさには、いみじくも彼岸の存在が一役かつているということだ。

「詩月、今彼岸はどうなつてる？お前は本当は何をしようとしてる

？」

「『本当は』？」

意図せずに口角が上がつた。乱火の直接的な核心への触れ方が心地良い。

「やることは決まつてる」

躊躇う期間はとうに過ぎた。

こんな風にしか償えない。ハルにもチアキにもナツメにも、フユにも。

「戦争よ」

彼岸同士で争い合うこと。私は主義主張の為に。それ以外は彼岸そのものの存在価値を守る為に。

最大のエゴでハルたちを救えたとして、全く同一のエゴで里雪や朝凧を傷付ける。

大切なに、争つ」とによつて。

自分で引寄せられていく気持ちを繋ぎ止める術を、私は持たない。

二十一、矛盾

「せ、戦争……」

朝凪が息を呑んだ。

さすがに、言えないでしょう。私についてくるなんて。

「スペクタクルロマン!! 燃えます!!」

大声でそう言い放った後輩を、初めて心の底から馬鹿だと思った。勝ち目がないって知ってるくせに。

その戦争は、どれだけ息巻いても、どれだけ時間を稼いでも、所詮は鎮圧される規模の抵抗に過ぎない。

倒れることを前提にして、それでも留まることが出来ないのは、私が本能より精神に殉じたいと考えるからだ。朝凪は恐らくそういう性質ではないし、戦闘マニアでもない。だとしたら参戦するのは命の無駄遣い。

言つて聞かないなら、どこか安全なところで置き去りにするしかない。

「取りあえず彼岸で何が起こったんのか、分かる範囲で説明してください。」

乱火が言つた。順序立てて把握しようとするのは、自分の未来に自分で責任を取るためだ。この男は私と似ている。誰かと慣れ合う振りをしたところで、結局最後には自らの意志を優先する。私の味方につくことにはなく、彼岸の世界で戦うことに意味を見出せる。そういう乱火だから、手を借りたかった。

「これ」

乱火に手渡したのは、ハルの管理者代打要請の紙切れ。

萩原千秋及び春の運命管理者代替について

105地区G-008所属、詩月に引き継ぎを命じる。これより先「萩原春」と回帰の契約を執り行い、在るべき運命に帰す事を最優先事項とすべし。以下履歴。

1985-03-12 萩原春／日本、静岡に生まれる。
88-09-24 萩原千秋／同上。
89-12-01 両親離婚。以後春、千秋共に父

親と再会する事無し。

98-10-25 白宅で火災発生。本来春はここで死ぬべき運命。

前管理者が弟千秋と取り違え誤って生き残る。その後の詳細は別紙確認の事。

「取り違い？」

乱火がその単語を低く読む。

「ええ。ハルを殺して弟を生き返らせようと命じられた。納得出来ないからハルを庇つた」

「庇つたって、この任を無効には、」

そこまで言いかけて、彼は信じられないとでも言つ風に私を見つめた。

「シユリと、ホタルか？」

「そうよ」

実はシユリとホタルを使った契約方法は、主流なものではない。

「バカかお前は、アレは管理者の力を食つて実体化すんだぞ！行動が人間の精神を主体にしても、個体としてはお前の力を糧にしてる。それで戦争なんて口クに戦えもしねーだろーが！」

そんなこと知つていい。今の私は弱い。だけど何だつて打開策はある。

「私の力は彼岸の水で補えるわ」

一瞬、乱火と朝凪が言葉を失った。

「……っ、イヤです！――」

責めた朝凪が叫ぶ。

その水は、飲むと彼岸の力を一時的に回復させる。

「あの彼岸の水を飲むなんてセンパイが良くても私がイヤです！――」

副作用は、回復の効果が切れると同時に生命体としての活動が停止すること。彼岸ではそれが『百年の眠りにつく』と表現されることしばしばだが、時の概念がない彼岸で『百年』と言つ期限を一体どの程度当てにして良いのか。

「センパイ！――」

「桜を完全に敵に回してるの。もう退けないのよ」「喚いたって、なんだって。勿論退くつもりもない。」

「桜か。お前の直属の上司だろ？無茶すんなよ」

「無茶する覚悟がなつたら、シユリとホタルなんて引っ張り出してこないわよ。大体……」

「センパイ？」

「どうした？詩月」

何だこの違和感。

「二人とも、伏せ……」

「下がれお前ら！――」

背後からそんな台詞が聞こえた。

目の前のコンクリートに急激な速さで何かが落ちて、ドガツと床が

砕ける音がした。同じタイミングで視界を粉塵に塞がれる。

「フユ…」

乱火が喰いた。『下がれ』と呼びかけたあの声は、確かにフユに似ていた。

似ていたけど、どうして。

粉塵が晴れてやつと、確かにフユが目の前に立っているのが見える。そんな必要などどにもないのに、まるで私たちを庇うように。

「ぼけつとしてんな。気付けよ狙われてんの」
冷たくこちらを一瞥した彼が告げる。そして。
「クソ、…お前ら面倒くさい」

顔を背けて零された言葉は、独り言のよつだった。

一一一、何が出来る

「ラツキイ。乱火とフユが同時に釣れちつた」

声に吊られて顔を上げれば、屋上のフェンスにピンクの髪をしたドールフェイスが腰掛けている。私と面識はないが、今の攻撃から見て間違いなく彼岸の使いの一人だろう。しかも厄介にも、人間界での戦いを厭わないタイプらしい。

「なんだ…俺にも用があるのか。乱火の客だと思ってた」

特に動じる様子も無くフユが応える。感情の伺えない声音だった。

「んー。どつちかつてとキミへの用事がメインかなつ」

ドールフェイスが無邪気に笑う。

「かつ…、

かわいいです！！！」

朝凪が思つたままを叫んだ横で、乱火が白けた目を向けた。

「あれ、オトコ？」

「！！」

「おい詩月！朝凪がショックで倒れた！！」

「うそ、なんで気絶すんのよ！？」

騒いでいるこちらを後日に、ドールフェイスがフユに向つ。

「話進めていいつかなー？」

「ああ、気にするな」

「じゃ、お言葉に甘えて。フユ、キミを、」

「抹殺しに来た」

「な…、」

驚いた乱火が小さく声をあげる。対照的にフユは冷静で、試すよくな笑みを浮かべた。

「ふうん。案外暇なんだな、オマエ」

「フユ、挑発……、してるの？」

「そうでもないよ、他にも仕事はある」

「だつて、抹殺、つて。」

「待つて、フユは……『人間』でしょ、関係ない……」

つい口を挟んだ。

たとえ彼岸が見えたとしても。取り違いがあつた訳でも、寿命が近い訳でもない。なのに、どうして。

「関係あるよ」

言葉と同時にフユ目掛けて何かが投げられた。ドガツとコンクリートが抉れて、直撃したら確実にフユの命を奪えるだけの威力があることを物語る。

けれど、それよりも驚いたのは、フユの軽い身のこなし。

ふわりと風のようにかわし、その着地に音一つ立てない。

「派手な奴。……品のねえ攻撃」

それはわざわざ自分を狙えと言つているような台詞。

「なんとでも言つてなよ」

破壊音と飛び散るコンクリートの欠片が、平和を遮断する。カシャンとフェンスに飛び乗ったフユが真っ直ぐに相手の目を見て言った。

「邪魔だな。焼いてやるつか」

フユが翳した手の平に、青い炎が現れる。

それ、は。

「乱火の術……、どうして」

あれは確かに、彼岸の火で、昔乱火がよく手の上で転がしていた。何か持て余すように。丁度やつさの、煙草のよつこ。

「人間の三文呪術なんてタカが知ってるよ。バカじやん、そんなん
で何とかなると思ってんの？」

挑発に挑発で返されて、フユが青い炎を翳したまま綺麗に微笑んだ。
「オマエ化學反応って知らねえ？小学校で習う」
彼がそう言つて、炎を持たないもう一方の手で羽織つたシャツの胸
ポケットから小さなボトルを取り出す。コルクの栓を銜えて外す様
はまるで、計算しつくされたよつ繪のように艶やかで、現実味がな
い。

「フユさん！――」

むぐりと起きた朝凪が立ち上がる。

「フユさんがピンチです！――」

朝凪の言葉にはつとすると。「助けよつ」と思考が固まるより速く、
フユに目を奪われていたと気付く。

「フユ、止める！――」

乱火が叫んだ。

その声も無視してフユが穏やかに続ける。

「火氣に反応する物質なら腐るほどある。威力は絶大」

「フユさん！――」

朝凪がフユの前に飛び出したのは、フユの持つたボトルの中身と、
彼岸の炎が混じり合つた瞬間だった。

途端、火種が倍以上に燃え上がって、ドールフェイスと朝凪と、一
瞬朝凪に気を取られたフユもろともを包み込む。

「フユ！――」

「朝凪！――」

爆発のように拡大した炎はすぐに消え、紫煙が後に残る。彼岸の炎
が人間界で継続的に存在することは出来ないらしい。晴れていく煙

の中心で、フユが朝凧を庇うように抱え込んでいた。

「……邪魔すんなバカ女。アイツは俺に用があるんだ」

ふらりと立ち上がりて吐き捨てたフユが正面を睨む。
対峙するドールフェイスは今の爆破でダメージは受けても、戦う気は失つていないうだつた。

彼岸の方がフユに用があつたにしろ、それは彼岸の都合であつて、
フユが真正面から受け止める必要はどこにも無い。
まして攻撃だとか抹殺だとか、どうしてフユは、否定しない?
声を荒げて「ふざけるな」の一言でもいい。

どうして分かつたような顔をして、甘んじて受け入れる、なんて。
痛い。

「乱火、：今、朝凧を庇つて彼自分のガード遅れなかつた？」
そう見えた。

フユ、あなたは今まで散々人間の命を奪つてきた彼岸を見ていて、
それでも朝凧を庇つて傷付くのか。

「ああ…」

悔しそうに答えた乱火も、多分私と同じことを考えている。

いつだつて、ただただ傷付くことで他者を救つていく人間がいる。
それは苦しいくらいに綺麗だと、私は思う。
だけど少なくとも、それが私が関わる場所にあるなら、

傷を埋めたい。

一一一、命ある言葉

フコが音も無く一步を踏み出し、ドールフェイスが後ずさる隙も与えず、その首を掴んで乗り上げるように押し倒した。

「つ！」

私の立ち位置からは、フコの表情は栗色の髪に隠されて見えない。唇だけ小さく動くのが、辛うじて分かった。

「言え。生きたいのか、死にたいのか」

殺伐とした台詞が低音で静かに紡がれる。下敷きになつた相手の首にかけたフコの手に、ゆっくりと力が入つていく。それなのになぜか、微かな殺意も感じない。まるで答を促すような、待つているような柔らかな沈黙だけが辺りを埋める。

「……く……死にたく……ない……」

弱々しく零れた声に、ぴくっとフコの手が緩む。揺れた髪の隙間から、ドールフェイスを見つめる瞳が露になる。

『分かつてゐる』

そういう目をしていた。漣一つ立たない、諦めとも優しさとも取れない瞳。

「それでも俺を抹殺するのは、オマエの正義なのか」

感情を殺しているのか、何も感じないのか、事実確認のためだけの質問のようだつた。抹殺されることで、目の前の相手の正義が貫かれる。そんな理不尽な回答を、フコはあの不思議な目をして待つている。

「……君は、……危険…………だ、から」

フコはそう聞いた瞬間にぱっと手を離し、地面に窓いだ様子で腰を下ろした。もうどうでもいいといつよつに苦笑する。

「危険なものは排除せよ。……賢者の教えは馬鹿の一つ覚えだな」

「ぱつ、フコ！そいつを自由にするなーー！」

乱火が怒鳴った。

けれど攻撃しようと腕を振り上げたドールフェイスを、フコはただじっと見つめただけ。

それも、有りか。

フコがそう思つてゐる氣がした。

もう抗ひのも疲れた。

だつてその日が。

ここで殺されとくのも、手間が省けていい。そいつ言つてゐる氣がした。

「フコさんは！危険なんかじゃないですーー！」
「 朝凪！」

朝凪が必死でドールフェイスの腕を掴んだ。

「キレイで強くて、ちゃんと！あなたを助けようとしてるーー！」
ドールフェイスに向かつて叫んでいる。フコが『えたのは、死ではなくて、逃げ道。

「あなたは気付いてるくせに、まだ攻撃しようとするーー」

フコが少し驚いた顔をして朝凪を見ている。

「あなたのやつてることはおかしいです！ フコさんのことは何にも知らないくせに……」

「…………… オイ」

フコが朝凪に声をかける。

「ハイ」

「テメーだつて知らねーだろ、俺のこと」

溜め息混じりにくしゃりと髪を搔き揚げたフコは、面倒そひにぼやいた。

「アンタ朝凪つつたつけ」

「！ハイ！！」

朝凪が頬を微かに染めたのを見て、「女の子」だな…と場違いな感想を抱く。でもだからこそ、朝凪を連れて行きたくはない。朝凪は現状の先にある未来に、充分に幸せを見つけることが出来る。戦つてでもエゴを押し通したい私とは、根本的に違う。

「黒髪、あなたは」

「…………… 詩月」

フコが理解したと言つ風にそれと氣付かないほど小さく頷ぐ。

「で、オマエは。お人形」

フコがドールフェイスにかけた声は、「抹殺」なんてなかつたように静かで優しい。

「名前。なに」

「…………… 砂都」

躊躇いがちに答えたドールフェイスは、フコがすつと立ち上がつて空気のように近付いて来てももう攻撃する気はないようだつた。

「砂都、プレステ3あんだけどゲームしねえ？」

「えつ……」

「！？」

フコの誘い文句に全員が息を呑む。

「おい、フコ…」

「んだよ」

止めかける乱火に涼しい顔を向けるフコ自身は、自分の言動に疑問を抱いてはいないらしい。

「そいつはお前を殺しに来たんだぞ！」

「…はあ？だから何だよ？」

だから、何、つて。

「まだその気があんのか、砂都」

フコが砂都に直接聞くが、「今は違う」なら許せるとでも言うのか。

「…」

返答に詰まる砂都を見つめるフコは、無表情でいながら、どんな答えも否定しないと思わせるような安心感を抱かせる。答えられないことすら、受け入れてもらえると錯覚しそうになるほどだ。

「まあイヤイや。ほら行くぞ」

そう言つて砂都の頭を搔き混ぜたフコは、大人びていて、痛みなど僅かも見せない。

「フコ、待てよ！分かつてんのか！！」

呼び止めた乱火を振り返りもせず、フコが呟く。

「俺、刃向かつてくる奴つて、好き。

……それで文句ねーだろ。めんどくせーよ、イチイチイチイチ

好きの一言で、こんなに簡単に片付けてしまつ人間を、私は知らない。

「おいで、砂都」

戸惑いながら付いて行く砂都が伺うように言つ。

「ぼく、テトリスやりたい」

「あー… もつと現代的なゲームやんね？」

その光景は仲の良い兄弟にさえ見える。

後ろ姿を見送つて、一人の声が聞こえないほど離れてから乱火に話しかける。

「さっきの、ガード間に合つてたのかしら…。朝凪を庇つて自分を守りきれてなかつたように見えたけど……」

「ああ、……」

乱火は深く語らず曖昧に濁した。

「とにかく、砂都に話を聞こう。あいつはなんか知ってるだろ」

「砂都さんつて、何者なんですか？」

朝凪が尋ねる。

「ピンクの髪のドールフェイスな…。あれは風姫かぎひめの側近だ」

「風姫…？」

「これは思つたより、根が深い戦いらしいな」
乱火が独り言のように言った。

一一三、テトリス

落ちていくＬ字形の赤いピースが美しい。テトリスはシンプルで完成されたゲームだ。結局フユは、古いゲーム機を引っ張り出してきて、砂都の要望に付き合っている。

「砂都、どうしてフユを抹殺しようとしたんだ」

画面を見つめる一人の背後から乱火が問えば、フユが不機嫌に吐き捨てる。

「まだその話かよ。うぜえ」

まるで下らないと言いたげな台詞に乱火が反論する。

「お前は気にならねーのかよ、フユ。うやむやにする気か…」

「『危険だから』だろ。それだけ分かれば充分だ」

フユは冷めた目をしていた。

「俺は、お前たち『彼岸の使い』の存在を知ってる。……ずっと見てきた。お前たちが人間の命奪つてる時も、奪う命探してる時も。ただ黙つてただけだ。正直…お前たちを『消したい』とどれだけ思つたかなんて、もう、……覚えてない」

淡淡と語られる言葉は、憎しみより諦めの方が大きく聞こえた。

「俺は何の力も持つてなかつた。『見える』以外は、普通の人間と変わらない。勝ち目もないのに抗うほど馬鹿でもない。けどある日状況が変わつた」

乱火をちらと掠めたフユの視線は、縋るような、責めるような、けれどそのどちらでもない色で伏せられる。

「俺は『乱火の力』を手に入れたし…、今はその気になれば彼岸に喧嘩吹つかけることも出来る」

乱火は、彼岸でも持て余されるくらい強い力を持つていた。
けれど彼は、彼岸の仕事にただ一つの価値すら見出すことはなかつた。

そうしてどの人間の運命にも関わらずに上層部の怒りを買つて、彼岸に居る権限を剥奪された。

彼岸の力を封じられ、人間界に落とされ、決して人間ではなく、彼岸の使いとも呼べない。

封じられた力が、どこへ流れるのか。存在したものを完全に消すことが出来ないのだとしたら、受け入れるだけの容量のあるところへ行き着くのが自然だ。

それが、フユで。

力が無いから視野に入れなかつた『復讐』を、実現出来るだけの状況が訪れたら。

「フユ、でもお前は、」

「彼岸を否定はしねえ。今ここでテメーらと戦おうとも思わねえ」

フユにそのつもりが無いとしても、彼岸にとつて「危険」と判断するだけの材料が揃つたら。

抹殺……、全て彼岸が撒いた種なのに……。

危険が積もる前に消去せよ。

まるで、テトリス。

一十四、君に手紙を

彼岸の世界は、人間界を顧みない。

私たちはエ「に染まつた死神だ。

「全消し。砂都、オマエも一ちつと修行が必要だな」
フユはそう言って、砂都に躊躇いもなく笑顔を見せる。

田の前でいとも容易く命を奪われる人間を、彼は何人見ただろう。

他の人間に『見えない』彼岸を話題に出来るはずもなく、何もかも
心の中に閉じ込めて、一人きりで傷付いて。
それでもフユは砂都を傷付ける手を止めた。
あまりにもあつさりと。

私は？

「フユ……」

砂都が消え入りそうに咳く。

「ん？」

「あの……」めんなさい……

時が止まつたかと思った。誰も何も言わず、呼吸すら聞こえない。
そんな一言でキャンセル出来るなり、過去「」と全て無くなればいい。

「なにが？」

背後にいたせいで、フコがどんな表情をして言ったか分からない。抑揚のない口調だった。

「何の事だか分かんねえよ、だからお前も忘れる。……それともこう言えれば満足か？『ああ俺も悪かつたな。痛くなかったか』、全部嘘だぜ」

落ちていくテトリスのピースだけが、変わらない時間を刻む。

「なあ砂都。お前が期待するような言葉は、俺の中からは出でこねえ。だから下らない謝り方すんな」

「ごめん。いいよ。それで終わってゆく」とばかりなら、こんなにも悲しくはないのだろ？

「許すとか許さないとか、そういう話じやねえ。どうしたって記憶は消せない。いつそ、今まで通りでいいじゃないか。お前らは好きに奪えばいい。別に何も感じちゃいねえよ。文句もねえ。好きにしろよ」

「ごめん。ああ、そんなことどうだつていい。

もう、期待なんてしていないから。

分かり合おう、なんて、夢物語。一体何が駄目で、こんなふうになつてしまつたんだろう。

「乱火、代われ」

立ち上がって乱火にコントローラーを手渡したフコは、誰の目も見

よつとしない。

「まあ……お前もあんま深く考えんなつてことだ」
砂都にそつ言い残して、部屋を出よつとする。

「フコ、どこ行くんだよ?」

関わることを、避けよう。

「お前らが出てかねーなら俺が出てぐ。部屋は好きに使え」

フコはドアに手をかけて降り返ることもない。
こんなにも簡単に明け渡して、自分の居場所に執着もない。居場所に、この世界そのものに。

「おい、待てよ」

乱火が咄嗟にフコの左腕を掴んだ。

「っ!」

掴まれた左腕をぐつと底つよつに身を屈めたフコに苛む。伏せた横顔が苦しそうに歪んでいた。

「お前……やつぱぱつつきの攻撃で……」

「つるせえ」

乱火の手を振払う仕草が、拒絶を誇張する。

「……何でもねえ。触んな……、一人にさせうよ。……」
居たくな
いんだ

フコは押し殺すよつに咳いて出て行つた。
私は金縛りのように動けない。

彼を引き止める確かな言葉を、誰か口に出来る人がいたとしても。

その孤独に侵入して、この世界に繋ぎ止めるだけ、彼を支配する人が現れたとしても。

きっとフコは、真っ直ぐに視界を上げることはない。

ハルやナツメやフコが、諦めているのを見たくない。その為に私一人で事足りるなら、全て投げ出したって構わない。

「フコさん……」

朝凧の心配そうな声が痛い。

人間に肩入れするのは、彼岸を否定するのと変わらない。生死を管理するという存在意義を存続するために、彼岸は躍起になつてている。

死神のアイデンティティーなんて、誰が決めたんだ。

殺すことを放棄したら、私たちは用無しで、だけどそんなこと誰が望んだのか。

私が自分のエゴを振翳して人間を保護するためにクーデターを起すなら、当然それは彼岸に取つては危険因子で、摘み取るべき芽だ。もしも私が勝つてしまつたら、彼岸の世界は恐らく現状維持なんて出来ない。きっと新しい意味を見出す前に崩壊していくだろう。そのくらい彼岸は『生死の管理』に固執している。

鎮圧されて抹消されるか、破壊神となつて彼岸の終わりを眺めるのか。どちらにせよ結局、未来はない。

それを知りながら尚戦おつとしている私はやはり異端だ。

朝凪も、里雪も、好きだ。

敵対するだらう桜や華夜も、本当は彼岸を守らうとしているだけだ。

私は永遠に墮落していく連鎖を断ち切りたいだけで、彼岸の誰かを憎んでいるんじゃない。

けれどそれはキレイゴト。言葉を飾つたところで結果残るのは、殺戮なのだから。

ああだけど、ハル、ナツメ、フユ。

朝凪、里雪。

どうして愛すべき存在を、同じだけ大切に出来ないのだろう。

「…ダ…ツ、ダメだよ…一人にしちゃ…」

青ざめた砂都がはつとにして叫ぶ。

「砂都？けど今は、」

乱火が嗜める口調で遮る。

今は、一人にしてやれ。どのみち彼岸の使いである自分達では、何も出来ない。

「違う！連れ戻さなきゃまた狙われる…！」

「『狙われる』？」

狙われるって、どここまで悪化しているのか。それとも元から存在していた酷い事実を、単に私たちが急速に理解しつつあるだけなのか。

事実、
眞実…

一番肝心な事を知らないのか？

誰も彼も、眞実の断片しか知らずに、他者を傷付ける。悪なのか、正義なのか。

「そう、風姫が『先見の書』を読んだから…」

良くない事が書かれてる、危ないよフユ、あんな体で…」

息付く間もなく捲し立てる砂都。

墮ちて、墮ちて、墮ちて…、制御の利かない未来が向こうからやつてくる。抗つているつもりで、絡み取られているのだろうか、私たちは？

「落ち着け、砂都。先見の書には何て書いてある、風姫は何て言った？」

「乱火が硬く先を促す。乱火も焦っている。私も。

「先見の書、風姫……、センパイ、それって……？」

朝凪がおずおずと窺ってくる。

先見の書。そんなものが関わってくるなんて。

「彼岸の予言書よ。彼岸の未来が記されている。風姫はその聖書の番人」

「予言書……そんなものが……？」

非公開のその書物を、私もこの田で確認した事はない。風の噂に聞く程度だ。

「彼岸を統治する上では重要な参考文献よ。彼岸の歴史であれ以上信頼性のある書物はない。だけどあれは彼岸内部の指針でしかないはず……。それに風姫がその内容を公に知らせるなんて、ずっと内密に扱っていたのに、……ましてそのせいでフコが危険だなんてどうして」

砂都が俯く。

「……彼岸が、人間の存在によつて滅びる。その名は、ハル、ナツメ、……フコ」

「それが、

『予言の言葉』か。

「センパイ、それって……」

「それが風姫の言葉か……どうこうことだ……！？」

わからない。ただひとつ、はつきりしたもの以外は。

ハル、ナツメ、フコ。

彼岸は彼等を殺すために動いている。

最悪だ。彼岸という世界は、信じるに値しない。

「朝凪」

「ごめん。

「はいっ」

「あなたは彼岸に帰りなさい」

「…え」

「何も知らないフリをして、出来るだけじつとしてなさい」

そしていざれ私が敗者になれば、あなたは助かる。
私を止めないで。あなたは生きて。身勝手。

「イヤです」

「朝凪、」

我僕を聞いて。身勝手だって、分かっている。だけど言ひつ事を聞いて。

「絶対に嫌です」

死なせたくないんだ。

朝凪がいつになく大人びた顔で私を見る。

「私は確かに術もヘタクソだし、単純だから先を読んだりも出来ないけど、でもセンパイと一緒に戦いたいんです。

ずっと憧れでました。四面楚歌でもいつもセンパイだけ凜としてて。
それがすごく格好良くて。

センパイがセンパイの意志で戦うように、私も私の意志でここにい

ます。私を心配しないでください。もしも傷付いたとしても…自分の責任は自分で取ります」

「死ぬかもしれないのよ」

「分かつてます！」

分かつてる？私が何より分かつて欲しいことも、朝凪、あなたは分かつてる？

「…私はハルのところに戻る。朝凪、あなたはフコを探して」

「！」

弾かれたように朝凪が笑う。

「はい！お任せ下さい！…！」

違う。

「乱火と砂都も危ない。朝凪がフコを見つけたら4人で出来るだけ安全なところへ。居場所が決まつたら朝凪は一旦私のところへ戻つて知らせて」

静かに聞いていた乱火が目だけで了解を示す。

乱火は、大丈夫。

「はいわかりました！！他にはありますか、何でも言って下さい！…私はいつでも戦えます！！敵の気を引くとか…オトリでも何でも…」

朝凪。

「何でも？」

朝凪の言葉を繰り返す。

「ハイ！命懸けで頑張ります！…！」

やつぱり分かつてない、あんたは。

朝凪の襟元を掴んで思っきり引き寄せた。

「さや、ひ

分からせなきや、分からない。

「ひとつ覚えときなさい。あんたを困らすのはいいが、私は自分の命を投げ出すわ」

朝凪が動作を止める。

覚悟決めなきや、こんな事言えないわ。

「私についてきて。絶対死なせないから」

一十六、何色を映す

「やつぱりセンパイ大好きですっつー！」

朝凪に抱きつかれる。それを引き剥がしながら思うのだ。戦いが白日に晒される頃には、今この瞬間に『平穏』といつ名前を付けることになるのだろう、きっと。そして思い出すのだ。戦火の中で、あたたかな光を。

彼岸は信じるに値しない。

でも朝凪や里雪の存在を信じたい。

「鬱陶しい…」

そつ言つて引き剥がしても笑つてくれる朝凪。

信じてくれるから、全部守れるような気がする。

全く馬鹿げているのかもしない。

二兎を追つてみるのも、悪くないアイデアだ、なんて。

だけど出来るなら、彼岸と人を。その相容れぬ二兎を両方。

フユが狙われた同じ時刻に、ハルが無事だつたとどうやつて保証出来るだろう。詩月が不用意に乱火の元を訪れてハルから目を離した間、余りに無防備なハルと、そこに置き去られたナツメの、魂の抜けた体。

闇が深まる地上に、裏腹に強い光を放つ満月。狂い咲いた白い花の輪郭を、冷たい明かりが縁取つてゐる。それはハルの家の裏庭に、祖母が唯一残した見事な百合。気が違いつてなるほど美しく、その光景はどんな絵よりも白々しい。

随分物わかりの良い花だ。

ちらりと視線を注いだ里雪はそんな事を思つて、自分の感想に舌打ちした。

異常な事態に異常な景色。どこかの台本に書いてありそうな胡散臭さじやないか。謀られたように都会から外れたこの場所は、実際お伽話なんかととても相性が良さそうだ。とはいえ、そういう類の面倒な思考は里雪の好むところではない。考えずとも充分に山積みであるし、そもそも里雪はその面倒を一つ処理しにここへ来たのだ。五万とある問題のたかだか一つ。まるでお笑い草だが、詩月にとつて価値があるならそれもい。

「あんたが、ハルか」

里雪は無断で家に入つたが、ハルはもつ彼岸の使いに驚いたりはしなかつた。

「…あなたも彼岸の？」

「ああ」

ハルのベッドにナツメが寝かされている。

「…天使みたい、」

ふいにハルが発した言葉に、里雪¹が目線をハルに戻す。

「なにが」

怪訝そうに聞く里雪にハルは柔らかに答える。

「金髪が、すごくきれい」

里雪の容姿は絵画に描かれる事しばしばの、天使そのものだ。纏う服も、白い。

「…そんなことに意味があるのか？」

返答に迷う里雪に、ハルが穏やかに言つ。

「いいえ。だけどきれいです」

詩月が必死になる理由は、こつうことなのかな……？

里雪の中で、明確な言葉にならない感情が疼いた。

しかし答を探ろうとするより早く、処理すべき事態が近付いてきたと悟る。

チャリ、と、付ける必要も無いウォレットチョーンが重なる音。左に二つ、右に二つのピアス。黒に赤くメッシュを入れた髪。度のない、薄くブルーに透ける眼鏡。それらのアイテムは彼岸には存在しないものだが、状況を見て取れば対峙する相手が彼岸の使いであることは明かだ。なによりも、里雪はその相手に憶えがある。

「人間のオモリは大変だな」

挨拶代わりの軽口を叩くその男。初対面の相手にも昔からの知り合いのような態度を取るタイプで、里雪は彼岸で何度か絡まれた記憶がある。記憶があるからと言つて再会して喜ばしい相手ではないのは確かだ。100歩譲つて『絡まれた』という若干乱暴な表現が、実のところ的確でないと認めたにしろ。

「よ。久しぶり、里雪チャン」

「何しに来た」

抑揚に欠ける調子で里雪が問う。問われた男はもう何時間も前からここで寛いでいたと言つのような気安さで口角を上げた。

「んー。ケンカ」

人間に何の愛情も持たないその男は、けれど人間の作り出したアクセサリーを身に付けるのに抵抗がないようだ。果たしてその二つは両立するのかと里雪は考える。作り手を度外視して、個体は個体として認識する……。

どちらでもいいか。疑問を持ったからと言つて解答を探し当てる

義務はない。

「そうかよ。わざわざここまで」「苦労だな」

ケンカしに。

『喧嘩』は『里雪の』目的だ。数秒後に訪れる未来もある。しかし『ケンカをしに来た』と口にした男の『目的』ではない。その男は『彼岸の保護』が目的であるはずなのだから。突き詰めて言い切るなら、『ハルとナツメを抹消しに』来たのだ。こうしてすり変わる。

『正した』が、『どちらでもないもの』に。目的が、争いに。里雪は考える。

なんとか生きてる奴ってのは、戦うのが好きだ。彼岸の使いが生き物のカテーテルに入ればの話だが。

自分は巻き込まれてはいるのか。もしくは望んでここへ来たのか。

昼寝している方がいい。どちらかと言えば。

そんな言葉に自分自身で騙されているのだろうか。結果論なら同じ穴の貉。ついでに付け加えるのなら、今は恐らく過程より結果が大事だろう。

何にしても結果をこいつに譲つてやる気はない。

首に引っ掛けっていたゴーグルを引き上げる。一瞬で里雪の視界がセピア色に変わる。場違いな感想だが里雪はこの瞬間が嫌いじゃない。懐かしくてリアリティが薄れる褪せた色。里雪ただ一人の中で、世界が染まって行く。

セピアのフィルタの向こうで、もうそれと知れないブルーのレンズ越しに男の目が笑った。

「冷静なのは口先だけ、ってね。里雪チャンがゴーグルすんのって本気の時だろ」

対照的に里雪の涼しい目が、思案するように宙に逸れる。

「どうだか」

「強がんなよ。遠隔操作で一人分のシールド張りながらの戦闘なんて、手加減してたら負けるぜ?」

そういうところが面倒だ、と里雪は思う。こちらの都合に添つて何が変わる訳でもない。お互い戦う事に異論がないなら、それで問題ないだろう。勝つ方が『勝者』で充分だ。

「さつさと“ストッパー”を外せ。暴れたいんだろ」

里雪が言い捨てる、セピアの世界で軽薄な笑みを浮かべた男の唇が満足そうに動いた。

「上等」

一十七、死神

気が付けば、ハルの家であつたそこは、床も空もただひたすらに白いだけの空間へと変わっていた。遮るものない果てしない白。その色は雪とも雲ともつかない。

もしハルの考える光の概念を密閉出来る入れ物があつたら、きっと中身はこんな状態になる。それは総ての集合体であり、同時に無。この世のあらゆるものを見認出来ないほど細分化して、神の手で攪拌すれば、恐らく新たな何かが生まれるだろう。

パラドックスなドラマもこの白の中でなら魅力的だ。これはそういう光だ。

ハルが咄嗟に抱き寄せたナツメをぎゅっと抱えて咳く。

「…どこ、ここ…」

生命の根源と末路。源と行末。安堵と恐怖。信仰と疑惑。あらゆるもののが同レベルで存在する。

「彼岸と人間界の挟間だ。安心しろ、すぐに帰れる」

ハルを『敵』から庇つように立つた里雪が振り向きもせず答えた。

「すぐに帰れる？勝利宣言かよ？」

男が嘲る。

「オレを倒さねーとこの空間は消えねーぜ」

瞬間、ハルには男が里雪の背後に立つたように見えた。男の殺意が躊躇いも無く里雪に向かう。

危ないと思うのと、里雪の背中が爆発するのは同時だつた。けれどそれを注視したハルが見たのは無意識に予測したものと違う。

神の戦いか天使の戦いか悪魔の戦いか。

傷を負つたのは、黒に赤が混じる髪の、人工的な加工を自身に施した男。

「ち、どういうことだ！？背後を攻撃する余裕は無かつたはず！…」

男も自分が傷付いた理由が理解出来なかつたようだ。左耳の上から三つ目のピアスが痛みと叫びに合わせて揺れる。

「簡単だ」

里雪の冷静過ぎる声が冷ややかに通る。里雪の背後に殺氣だつた男、の、背後に里雪。

「つまり『それ』は、」

それ、とは。男が攻撃を仕掛けた『里雪』といつ名の何か。それは。

「ダミー」

ガツッ、と鈍く重い音がした。

小型の稻妻のような鋭い光を右手に、里雪が男に斬り掛かる。ダミーではない、後尾にいる里雪が。そして咄嗟に振り返つた男の張つた、薄いガラスの膜のような半球に直前で阻まれる。落ち着き払つた里雪は低く呟つ。

「一度目だ。『ストッパーを外せ』」

ストッパー。

彼岸の戦い方など知らないハルにも里雪と男の差は見て取れた。里雪の持つ鋭利な光は、本能的に危険を感じるものだ。あれには間違いなく殺傷能力がある。それに加えて里雪は今相手を傷付けるつもりで扱つている。

どうして戦うの。

「冗談キツイぜ。それでどうして彼岸の下級レベルに甘んじてんだ」納得出来ないと呟つように男が尋ねる。

「それも簡単だ」

ストッパーが何を意味するかは明かされない。

「『素行不良』、こういうことだ」

里雪の翳した光が爆発した。男をあっけなく巻き込んで。

加減を知らないその爆発に倒れた男を、里雪が感情を持たない瞳で

見下ろす。

「悪いな。シールドを張ると攻撃力のコントロールが上手く出来ない」

シールド。

「本気な訳じゃない。力を操れていないだけだ」

シールド。景色が白く変わつてから、ハルとナツメを包む透明な球体。男が里雪の攻撃を防ぐ為に生み出した半球のガラス膜。「は、ゴーグルは…、自分の攻撃からのガードつてどこか…？ムカつくぜお前…」

最初この男は何と言つた？

遠隔操作で一人分のシールド張りながら

ハルとナツメは里雪に守られている…守られている？

ハルにはその矛盾が呑み込めない。死ぬ予定の人間を守る？死ぬ為に生きている人間を守る？

「目的はなんだ。どうして本気を出さない」

里雪が問えば、男が呻くように立ち上がる。「の二人は同じ彼岸の使いで、言わば仲間ではないのか？
どうしてたたかうの。

「…ストッパーは外せねえ。まだ力が必要だからな」

どうしてたたかうの。

「何のために」

男は分かり切つた事を聞くなと言つよつに唇を歪めた。

「へつ、それこそカンタンだぜ」

どうしてたたかうの。

「まだ守らなきやなんねーもんがあるからだ」

どこから取り出したのか、男が4本の短剣を里雪に向かつて投げ付ける。

当然のように上空にジャンプして ジャンプではないかもしない。地面とそれ以外の境界線が曖昧で、空間的な感覚が薄らぐこの場所では。実際里雪は重力の負荷を考慮していないようだ 躲した里雪

はそのまま短剣の軌道を確認する。

狙いが甘い。勝つ為の戦いじゃないな……。時間稼ぎか。それとも…。

「ぐらえーーー！」

足場の無い里雪に男が再び短剣を投げる。ギリギリで里雪がヒュツと放った強い光が、短剣に当たつてどちらも相殺された。

俺の力を量つている？

里雪の中でふつと疑念が過る。

『時間稼ぎ』ならただこの場だけ戦闘不能にすればいい。だが力を量つているならそれだけでは危険だ。

地面に降りた里雪と対峙の相手は一定の間を取つて、無言で牽制し合つ。

裏に何かある。吐かせるか？

牽制しながら得策はどれかと思考する。

いや、コイツはそれに応じるタイプじゃない。拘束……それも無理だ。場所も人手も足りない。敵がこの男だけだなんて有利得ない。そもそも拘束しても何も吐かないならメリットが無い。彼岸の人質としても機能しないだろう。現時点では彼岸の歴史を覆すほど体裁を無視した暴挙に出ていたのだ、今更犠牲を数えることもしないだろう。

黒髪に赤いライン。ブルーのレンズ。セピアのフィルタ。

再起不能になる程度に負傷させる。

里雪が自分自身で紡いだ選択肢に自嘲する。

そんなコントロールが出来るか？

出来ないと、言つたばかりだ。

どうしてたたかうの。

里雪がほとんど無防備に屈んで地面に掌を付ける。ぼうっと何かが砕ける音がした。

時間稼ぎに付き合つてゐる暇はない。俺のデータが欲しいなら持つて行けよ。誰に報告するつもりか知らないが、報告出来る状態で帰れると思つてゐるのなら。

ぼひつ、ぼひつ。

里雪が手を付けたところから、何かが這い出でくる。

天使のペツトと呼ぶには生々しい。

里雪を背に乗せて、巨大な獣が地獄を思わせる声で咆哮した。天使、天使。一見光の化身を思わせる里雪。けれど天使などではない。今地獄の獣を手懐ける、……。

ああそうだ。ハルは思い出す。

『死神つて言つて信じてくれる?』

詩月の言葉を。

死神。詩月。目の前の彼。

「悪いが片づけさせてもらう。死んだら詫びるぜ」

里雪が何でもない事のように言つた。

ハルは誰に守られている?

「……殺すの……?」

金髪の彼。天使、死神、誰か。

「やつ……、やめて……!」

破壊の音と、濁つた白煙がハルを呑み込んだ。……

一十八、女神へと祈り

朝凪の一いつに結んだ金髪が揺れる。

フユさん。今どこに?

フユの姿を探して息を切らし、乱火の言葉を思い出す。

『フユが行きそなとこ?』

『ゲーセンとか、コンビニとか…、そーいや三丁目の川原も氣に入つてるみたいだつたな』

その辺にも見当たらない。

フユさん…、力になりたいです。傷付けてしまつた分を取り戻せませんか。

朝凪の心を掠める、フユの後姿。

『一人にさせるよ。ここにいたくないんだ』

そう言つてすり抜けていつた。

そこまで孤独にさせてしまつたのは、きっと彼岸の責任で、…それなのに。

『砂都、ゲームしねえ?』

『俺、刃向かつてくる奴つて、好き』

素つ氣ない顔をして、決して砂都を孤独にさせなかつた。

どんな気持ちでしたか。

『それでも俺を抹殺するのは、お前の正義なのか』

正当化される殺人は。

『消すには充分な理由だ』

それはまるで他人事みたいなセリフ。

フユさん。私にはその心を解くお手伝いは出来ませんか。

乱火の言葉が過る。

『そのどこにもいなかつたら教会かもしけねえ』

意外な選択肢に、朝凪の中で戸惑いに似た感情が生まれた。儂げに整つた容姿だから、きっとフユがそこにいる姿は絵になるだろう。

『教会……、ですか？』

『ああ、町外れに寂れたのがなんだ。アイツ宗教嫌いなくせに俺と出合つたのはあそこなんだよ。それから行つてんの見たことねーけど、もしかしたら…』

朝凪は、フユが教会で祈りを捧げる様をとても綺麗だつと想像出来る。けれど神に軽薄な眼差しを向けるフユの方が、ともすれば祈りの姿よりもずっと魅力的だろう。神に媚びない涼しい目は、手の届かない高嶺の花を思わせる。たつた一輪、凜と佇む月下の花。それは孤独を知る人々を惹き付ける、命の意味。

フユさん。そこに居て下さい。

鎧びれた教会にしつとりと差し込む光は、埃に濁んだ空氣にぼやりと滲んでいく。

希望があるはずのその場所は、今はもう希望じと忘れ去られたように冷たい。ここには誰も居ない。フユの他に誰も。

フユは一番前の椅子に雑に腰を降ろし、白い女神の像を見つめた。しんとした薄明かりに、信者を持たない女神の白さが柔らかに映える。教会が作られてから、いづれ取り壊される日まで、同じ微笑を浮かべる女神。

何を祈れと言つのだらう。

幸あれと?

フコは遠くを見るように瞳を微かに揺らす。少なくとも自分はそんなのを望んでいないと知つている。

「……なあ、」

微笑に向かつて呴く。あんたが神だつて言つな。

「もつ、俺を殺してくれよ」

最初に彼岸の使いを見たのは小学生の時だった。

錆びれた教会の中で、フコは色褪せた記憶を辿る。太陽の光を薄く遮る塵と埃が、いっそ自分の体も浸食していけばいいのにと彼は思う。それならば思い出も、これから起ころるやりきれない予感も、少しは霞んで見えるかもしれない。

ほんの少しでいい。全部から田を逸らせなくてもいい。でもたった少し。

母親と買い物の帰り道。

瞳を閉じると、脳に残った断片的な古い映像が甦る。

あらやだ…事故…？ 母の声。
ピー・ポー… 救急車のサイレン。
玉突き事故だって 飲酒運転かしら 怖いねえ… 野次馬のざわめき。

偶然居合わせた交通事故。

状況と位置関係を考えれば、生々しい事故現場を自分は見たはずだ。

けれどフコは覚えていない。血の跡も。そこに転がっていたはずの人の姿も。思い出すことが出来ない。
代わりに母にこいつ尋ねたことを記憶している。

母さん、あの人なにしてるの。
え？

母が自分の質問の意味を量りかねていた。
車の前で、白いふよふよしたもの持つてぼーっと立つてる黒い服の女人。

事故車の前に立つて、かすり傷の一つもない女。左手に何かを持つていた。横顔が笑みを浮かべていた。それが人間の命の消える瞬間だと気付いたのはそれからずっと後の話だ。

その時は誰にでもその女が見えていると思ったから、自らの発言に疑問を抱かなかつた。だが母の顔色がすっと青く引いて、その唇が『そんな人はいない』ときつぱりと言つた。

フユ、そんな人いないわ。気持ち悪いこと言わないで。

母はそれ以上言わなかつた。
俺も黙つていた。

暗黙の内に不思議な隔たりが出来ていつた。意識的に「諦める」事を知つたのは、多分この時だ。

それから半年が経つて、突然クラスメイトが体を壊した。

見舞いに行つたら『アイツ』がいた。

あの時の女だ。ベッドの脇に、少し口角を上げて、何かを待つようにな。

この女人ダレ

喉まで出かかつた言葉を呑み込んだ。気付かれてはいけない気がし

た。

入院しているクラスメイトにも、あの女にも。

次の日クラスメイトは死んだ。

あの女が持つて行つたんだ。

そう思つた。

中学に上がる頃には、『そいつ等』は『死神』みたいなものだと理解するようになつて、『人間』と見分けもつくようになつた。自分以外に見えていないということも心得た。

奴らはなんて無感情に命を奪つて行くのだろう。

立ち向かうにもその術を知らなくて、なにより一人きりだつた。

「フユ、昨日のお笑い見た？」

何も知らない同級生たちの声。

「見てねえ」

自分は素つ気なく返すだけ。

「ええなんで？！ちよーおもしろいのに！…」

「次見ろよ！ぜつてーハマるつて…！」

ああ、もう。どうしてなんだ。

「俺、興味ねーから。そういうの」

そんな風に返したいと思ってる訳じゃない。それでも口を突いて出るのはそんな言葉だ。

「んだよ、いつつも一人でいるから友達になつてやるーとしてんのによ」

「そーだぞ？！何様だよ！」

頼んでねーよ。

いいね。見えない奴は平和で。

苛ついた。

どうしようもないと思い知るほど。

友達つてなんだよ？ 分かり合えないんだぜ。

「俺たちも帰らひづ。 つたくよー、 顔良くてもアレじやなー」

「モテねーよ。 もつたいねー」

彼等は聞こえよがしに言い捨てて行くけれど、 何の価値もない台詞だ。

残念ながら、 この姿はこの世の何にも貢献していない。

もし俺が

人生つて滅茶苦茶あっけなく終わるんだぜ。

つて言つて、

お前等は応えんのかよ。

コンビニやファーストフード店みたいに、 手軽に奪われてく命を見
てんだ。

お笑い見て笑つてる余裕なんかねーんだよ。

消えた命に泣いてる人を見たんだ。

それでも知らないフリをした。

三十、閉鎖する

友達なんかより、この感情を消す方法を教えてくれ。

自分が無力だなんてことは、もう充分過ぎるくらい。

知ってる。

ただ知らないふりをしている。

訳の分からない、人間ではない何者かにあっさりと下される命の終わりも、そうと知りながらただの一度だって足搔こうとしない、他の誰でもない自分という人間の冷めた残酷さも。

フユは他人に期待しない。それと全く同じだけ、自分に期待する事もない。

ヒーローなんて柄じゃない。期待出来る理由もない。

サイティーなヤツ、それでいい。

だから、もう揺さぶられたくない。

見たくないんだ。見たくない。痛みなんて感じたくない。

傷付きたくない。

学校からの帰り道に、出合いたくない、黒服の人の群れ。

葬式だ…

失った誰かを悼む人々。

俺は誰も護れない。

フユは鼻歌混じりに魂を弄ぶ死神の存在を知っている。

護れない。

泣いている、他人。

慰め合っている、他人。

静かに立ち尽くしている、他人。

みんな、彼と何の関わりもない人間なのに。

みんな、みんな、みんな。

他人だ。

関係ない。

アンラッキーだった、俺ならそうやって割り切れている筈なのに。
こんなのは何とも思わない。

関係ない。

だつて、俺が何とか出来る話じゃないだろ。 そ�だろ…。

何とかしたくても、どうしていいのか分からんのだよ…

誰かに答えてほしかった。

その場から物理的に離れても、現実は何からも逃げられない。

俺のせい? 死神を“俺が”“止めないから”か?

どうすればいいんだ。俺が悪いのか? 俺が?

答えが欲しかった。

なんでも良かつた、もつ。

『俺が悪く』て、いいから。

どちらでもないところを彷徨つていられるほど、身軽じゃなかつた。

だけど答えてくれる相手はいない。当たり前だ。彼がここにいることを、誰も知らない。

救いなんてない。俺しか見えていないんだから。

ふとした瞬間に、喪服で泣いていた、名前も知らない誰かの残像が過る。

本当は、何か上手くしたら、それを彼が止められたのかもしない。何様のつもりだ。偽善か？

『正義』なんてさぞやかな幻想に縋りたい思いと、それを否定する酷く冷静な自分が、何の規則性もなく立ち代わる。

田の前で泣かないでくれ。

自分が悪い気がしてくる。目眩がする。

こんな世界信用出来るか。

脈絡なんてない。唐突にクラスメイトの声が耳の奥に甦る。

「フコ、昨日のお笑い見た?」

こんな世界。

所詮叶わない。

「次見ろよー、せつてーハマるつてーーー。」

ああ、どうしてもうと。

「フコ」

普通に。お笑いとか見て、分かち合つて。

信じたいのに、どうして。

普通になれたら。

どうして…。

二十一、教会

そんなこともあつたな。

しんとした教会の薄暗がりの中で、フコはほんやうと記憶の糸を辿る。

クソマジメすぎるぜ、自分。

真剣に向き合おうとしていた。だから、苦しかった。
どうする術も知らない代わりに、どうすることも出来ない自分を責めて、傷付くだけの純粹さがあった。
生きたくて必死だった。

あの時は。

まあ、可愛いっぢや可愛いいか…

確かに「苦しい」と感じていた頃の自分は、今から思えば嫌いじゃない。

少なくとも今のは自分よ。

あーあ、昔の俺に言つてやつてや。

“答えなんか出ねえ。気楽に生きでけ”

それから。

“彼岸の使いには声をかけるな。かけると後悔するぞ”って。

本当のところを躊躇いなく言えれば、今だつてそれなりに傷付いてはいる。

ただもう今は、自分も、他の誰も責める気にはなれない。

全ては無意味な茶番劇。

フコはキャストに命まれている。けれど彼の意志で物語は進まない。

「あークソ、哀しくなってきた…」

何気なくぼやいた台詞が、ぼやいたフコ自身の耳に驚くほど切実に響く。

ヤベー、泣きたがつ。

何やつてんだ、俺。

この世界のあらゆる全てを、遮断したい。

埃の舞うこの教会の、中途半端な明るさ、酸素、過去、未来。乱火の後ろ姿。

いつだつて自分の欲しかったものを理解するのは、手遅れになつてからだ。

もう今は、違つて、止められない。

取り留めない思考が現れて、すぐに消えていく。

言葉の意味を咀嚼する前に、感情は消えてしまつ。

頭が痛い。

なんだろう。

乱火。

やつぱり、俺が悪いんだよ。

もうどうでもいい。

意識が途切れしていく。

もう、いい。

熱い。

知らねえ。

冷たい教会の長椅子が心地よく、フユは重たい眠りに引き込まれていった。

三十一、微睡みの絶対値

ギイ。

乱火に教えられた教会は、およそ祝福とは程遠い佇まいをしていた。壁にはヒビと雨の染みが目立ち、教会を囲む草木は伸び放題。ここには手入れをする人間が一人もいないようだつた。

開けた扉から差した光が、朝凧の影をくすんだ赤の絨毯に落とす。

日の光が微かに届く先で、栗色の柔らかそうな髪が長椅子の端に見えた。

「あ！ 良かつた！ フユさ…」

寝そべつたフユに朝凧が声をかける。

返事はない。

「…」

上から覗き込むと、フユは瞳を閉じていた。

寝て…ます…

「フ…フユさん、すみません、起きてください、…あの、」

肩に手を置いて軽く揺さぶる。

「フユさん、」

「…ん…」

微睡むよつて声を漏らしたフユの仕草は、どこか幼い子どものよつだつた。

「うわあ、カワイイです…！」

「…だれ…乱火…？」

フユさん、寝ぼけてます…

「いえ、あの、」

「オマエ、彼岸に帰るのか…」

夢と現実の間で、フユが「つとつ」と呟く。

「あの…、」

「戦うのか……？」

小さく掠れた声に、不思議と切羽詰まつた空気を感じて朝凪が目を見開く。

「どうして……」

寝ぼけていると片付けるには、それは少し痛々しそうだ。

「なあ……」

押し殺した感情が、行き場無く滲んでしまつたような。

「……嫌だ……」

完全に覚醒していなければ、完全な夢の中でもない。

左手で瞳を隠したフユが泣いていたのかどうか、朝凪には分からない。

「あの……フユさん……すみません、朝凪です」

とにかく連れ戻さなければいけない。朝凪に過つたのはそれだった。なにか……様子が……

余りにも反応が悪いフユに不安を覚える。

肩で息をしているその呼吸のリズムが不規則だ。

「もしかして熱が……？」

彼岸の使いは人間界の温度は分からない。

だから当然、フユの額に触れても熱いのかどうかは判断出来ない。

「……早く、乱火さんたちと合流しましょう！」

一刻も早く連れ戻したいと、朝凪の感情が揺れる。

たとえ連れ戻す先が、彼岸の使いである自分達の元だといふことが、間違いであったとしても。

朝凪の目に、フユが今にも切れそうな頬りない細い糸で、やつとの場所に繋ぎ止められているように映る。

数時間前に見たフユの挑発的な笑みは、張り詰めた雰囲気を纏つてはいたが凜として強かつた。

あの時不快そうに歪めた表情から窺えたのは、苛立であつて孤独で

はなかつた。

その後のポーカーフェイスから読み解けたのは、誰も立ち入れない領域の存在だつた。

不思議と詩月に似た存在感を感じた。
けれどそれはどれも、「弱さ」に結びつくものではなかつた。

それなのに今日の前に俯せたフコは、大切に扱わなければ壊れてしまいそうな心許なさがある。

フコは全てを拒絶しているのではない。

全てを拒絶『しよう』としているのだ。

唐突に何か核心に触れた気がして、朝凪はかける言葉を失う。

「合流は、不可能」

気配を感じる間もなく、出し抜けに沈黙を引き裂く声が聞こえた。

三十三、彼岸にいる

朝凪が上げた視線の先で、教会の入り口を黒い影が塞いでいた。

「誰です！？」

黒い髪、黒い服、暗い眼差し。その女の手には鈍く光る槍のような、
決して新しくはない、剥き出しの凶器が握られている。

「彼岸の最上層衛隊、黄昏たそがれだ」

低く表情のない声が端的に答える。

「彼岸の最上層の決定を伝えるぞ」

ぐつと構えた朝凪を気にする素振りもなく、淡々と続く言葉。

「ハル、ナツメ、フユ、以上三名を直ちに抹殺せよ」

朝凪の視界には、ぐつたりと力無く俯せたフユ。

「朝凪、それを渡せ」

フユの上下する肩で分かる、苦しそうで、不規則な呼吸。

「こんなに傷付いているのに」

「お断りします！フユさんは『それ』じゃない！？」

こんな結果にしてしまったのは、他でもない彼岸自身。

「あなた最低です」

抹殺：

何の解決にもならない。

「ならばお前も反逆者と見なす。“反逆者も消せ”。それも決定の一つだが構わないな?」

「彼岸には始めから、解決しようなんて気すらない。

「全部…、なかつたことに対するつもりですか…」

「お前は私を倒せない。それは理解しているらしいな。

ならばもう一度言つぞ」

何度も聞きたい言葉じゃない。

「それを渡せ」

「この人は絶対に間違つてゐる。

「…お断りします」

「そうか。ならば消すしかないな

戦うまでもない戦いだ。

朝凪は弱い。

相手は彼岸の際上層衛隊。彼岸の上層部を護衛するために組織された一員。

戦闘能力上位ランクの選りすぐり。

公に行動するのを見たことがなかつたから、その存在が本當にあるのかさえ疑問だった。

だけど暗黙の内に。

いままでもこうやつて、彼岸の縋りを無理矢理繕つて、馬鹿げた辻
棲合わせをしてきたのだろうか。

「先手必勝です!」こちらからこきます!…!」

朝凪は勝てない。

結果は知れている。

「えい!」

朝凪の手の動きに合わせて、丸い物体が実体化する。棘に覆われた野球ボールほどの大きさの卵。数えきれない量のそれを次々に黄昏に投げ付ける。

特に避ける様子もなく、黄昏はその卵を見つめる。

これほど殺傷能力のない攻撃もなかなか無い。

黄昏の足下ぎりぎりに落ちたそれにパキッと僅かなビビが入って、白い煙が立ち上がる。

黄昏にその気があれば、やすやすと踏みつぶされそうな位置で孵つたそれは、むくりと確実に生命体であることを主張して立ち上がる。目や口は付いているが、体外器官の境目が余りにも曖昧で、総合的にはアメーバに似ていた。

アメーバが口を開く。

「アホー」

「…」

黄昏の指先がぴくりと動く。

「アホー」

「アホー」

「アホー」

次々と孵つたアメーバが、もれなく黄昏に向かつて合図する。

「アホー」

ちなみに朝凪のこの術は、対戦相手に物理的なダメージは一切与えない。

からうじて『えるものがあるとすれば、若干精神面をイラッとするくらいだ。

言つ間でもないが、朝凪の弱さはこの、術のセレクトの絶望的なセンスの無さにある。

「お前は個人的にも消す……！」

元々戦闘を考慮に入れて来た黄昏のモチベーションをより一層助長させ、より一層不利になつた朝凪に それはもちろん自ら招いた不利だが 容赦ない集中砲火が浴びせられる。

「キヤーーー！逆効果でした！！！」

当然加減などあるはずもなく、彼岸の弾幕が朝凪とフコを襲つた。爆音が一人を包む。

際どいところで最低限の常識力だけは発揮した朝凪がバリアを張るが、力の差が明白なこの戦闘ではそれも大した時間稼ぎにならないだろう。

「どつ……どうしましょう。私のバリアにも限界があります……せめてフコさんだけでも逃が……」

朝凪がそこまで思考したところで、フコの手が朝凪の腕を掴んだ。

「オイ……」

心底うんざりした顔をして、フコが氣怠そうに起き上がる。

「フコさん！！ 気が付いたんですか！？」

「……当たり前だ」

この爆音と振動だ。

「何やつてんだテメーこんなところで。早く逃げろよ

『ぐく自然な調子で、取り立ててたじろぐ風でもなくフコは言つ。

「あ、ハイ逃げましょーー！フコさん歩けますか！？」

くしゃりと自分の髪を搔き混ぜたフコの振る舞いは、この状況の中につつて些細な日常の一コマのようだ。

「あー……」

欠伸を噛殺す程度の無関心でフユは呟く。

「俺はいいや……頭いてーし、動きたくねーから」

「え……」

起き上がったとは言つても、椅子に座つた状態のフユを朝凧は見下ろす形でいたから、俯いたまま言葉を繋がれてはそのフユがどんな表情をしているのか窺い知ることは出来ない。

「もう、いいから」

フユから静かに零れる言葉が、朝凧の鼓膜を打つ。

「だから、もう、戦うなよ」

その響きは強さとも弱さとも違つ次元で放たれた。

「許すから」

三十四、始まつの場所

「許すから……」

代わりに解放してくれ。

「この世界から……

フコに逃げる意志がないと悟った朝凪が叫さめる。
「何……、言つてるんですけど……一緒に来て下せ……」

フコさん。

一緒に どうか、

諦めたりしないで

「戦いましょう……フコさん……」

朝凪がそう叫んだ瞬間、全てを投げ出していたいたよつたフコが突
発的に顔を上げた。

「ダメだ……」

朝凪に確実に焦点を合わせて、その瞳に水の膜が張る。

「やめのよ……、戦つたら、その答えは……！」

戦つ気にすらなれないほど絶望したとか、そんな話じゃない……
そうじゃない。

熱のせいだ……いろんなこと。

「 答え……？」

問い合わせ返す朝凪からフコの手が逸れる。

どうして、いつもいつも言えなことばかり抱えて。

ぐつと奥歯を噛んだフコが小さく頭を振る。

なんでもない。そう言いたげに。

そうだ、いろんなこと、

「 何でもねえ。悪い」

止まない爆音。立ち上がった拍子にフコの視界がくらうと揺れる。

きつと熱のせいだ。

支えよつと出された朝凪の手を静かに払う。

傷付けたくない。傷付きたくもない。

「 逃げよつ」

何か言おうとした朝凪をさうさうして遮る。

何で出合つたんだ。

『死神もキリストに祈るのか

始まりはこの教会。

キリストなんか、これっぽっちも信じないへせ。俺も、アイツも。

『変な話だな』

埃っぽい空気の中で、背徳めいた茶髪と、吐き出された紫煙と、右手に挟まれた煙草。乱火の後ろ姿。全部馬鹿げていた。何もかも全てが。

乱火、偶然じゃなかつたんだよ。

何で俺は声かけたんだ。アイツに。

振り向いた乱火の驚いた表情。
面白い顔をしてた。

なあ、俺は知つてたんだ。訝しげに俺を観察したお前が、ただの一つも悪くないこと。

あの時に許してれば良かつた。

「あ、…フユさん…もうバリアガ…」

朝凪の声がフユを現実に引きもどす。

目眩に気付かないフリをするくらい、訳ない。今は無力じやない。この女一人くらい護れる。

「分かつてゐる。後ろにいろ」

もう、後戻り出来ない。

三十五、絡んだ鎖は解けない

私が考えていたよりも、もつとずっと大きな何かが動いている。ハルの元へ引き返す詩月の胸中に、ざわりとした不快な予感が沸き上がる。

何かが動いている…

それ以上考えない方が良いとも言うように、その先の思考は一向に進まない。

ハル。

ナツメ。

フユ。

走つても全く進んでいる気がしない。

無事でいて…

脳裏に過る、姿勢の良いハルの立ち姿。ナツメの子どもらしくない表情。怜悧なフユの瞳。彼岸の水の映像。

何がが…

里雪の金の髪。華夜の挑発的な笑み。桜の見下ろすような余裕。

動いて…

朝凧の華やかな声。乱火の眩き。

大きな、何かが。

砂都の言葉。

テトリス。

赤いピースがフラッシュバックした瞬間、ぞつとした。

動かされている…

大きな、何かに

取り違い。

くしゃくしゃの紙切れ。

回帰の契約。

シユリ。

ホタル。

戦い。

先見の書。

上手く考えることが出来ない。

『…余計な事考えるな』

いつか聞いた、里雪の嗜殺すよつな一言が鮮明に甦る。傷付かないために、『考えない』という選択肢がある。手を下す自分を傍観して、そもそも始めから罪など存在していないかのように、振舞う。

ハルは死に、チアキは生き返り、運命は元通り。一件落着。

『無神論者は辛いね。自分の存在を認められない』

華夜はそう言った。

神にも悪魔にも忠誠は誓わない。そうやって飄々と生きていた彼の、皮肉めいた台詞。

何かが矛盾しているような気がするのに、どこに間違いがあるのかは分からない。

『私は消えない。あなたの力じゃね』

桜の口調はいつも通りだったはずなのに。

どうして不自然に感じるのだろう。

『思つたより、根が深い戦いらしきな
眉間に皺を寄せた乱火の横顔。』
それから。

『クソ、…お前ら面倒くさい』

文句と裏腹に、微かな迷いも感じさせなかつたフコの、華奢な背中。

急がなきや。

走つて、走つて、走つて。

そうしなければ、答えも何もない。

ハル。

たぶん、私は未来に裏切られる。それでも行くから。

たぶん私は肝心なことを知らない。

走つて。

見えるままが、全てじゃない。

三十六、けれどすべては終着する

金の髪が、ハルの目の前でふわりと揺れる。
無音。

上がる白い煙と、はらはらと落ちる白い破片。
里雪と対峙していた男が血まみれで倒れている。
男を静かに見下ろす里雪には、動搖の一つも無い。
この空間はまだ生きてる。

視界は白の景色のまま、ハルの家に戻る気配はない。
かろうじて上下する胸の動きで、倒れた男の肺がまだ機能している
と知れる。

まだ息があるか。

攻撃をしかけようとした刹那、ハルがそれを否定する声を上げた。
あれに少し気を取られた。

一度手間になっただけだ。

里雪は一步踏み出す。

バチッと光を翳す。どどめを刺すつもりだった。

「待…待つて！」

後方でほとんど放心状態になっていたはずのハルが、思いがけない
強い力で里雪の腕を掴んだ。

「あの…やめてください。もう…、まだきっと助かるから…殺さ
ないで、こんなことしないで」

里雪が振りほどかなかつたのは、ハルの手が震えていたからだ。
小さく息をついて、ゴーグルを外す。

潔癖。

「…仲間なんじゃないんですか…、あなたと…あの人は同じ…」
同じ。

「死神」

振り返り、ぽつりと零れた里雪の単語に、ハルの手がはつと緩む。振りほどく間でもない。

「あんたがもし俺たちに何か期待してるんなら、それは馬鹿げた勘違いだ」

モラルもルールも、同じラインには存在しない。

「……いいえ、」

一度離れた腕を再び掴んだハルの手は、初めより確実に強い意志がこもっていた。

「いいえ！私はそつは思いません！きっと違う……」

真っ直ぐに澄んだ声が、里雪を引き止める。

「あなたも詩月さんも死神じゃない……」

突然の風のよつこ、その言葉は里雪の足を止める。他の、どんな言葉より強く。

動搖するな。

思い出すことを封じていた過去。彼岸と人間界の挟間に、立ちすくんだ詩月の後ろ姿。

気配には気付いていたはずなのに、近付いても振り向かなかつた。

感情を表に出さない女だった。

じつと世界を観察しているような目をしていた。

否定もしない。肯定もしない。周りには染まらない。強さと危うさを合わせ持つていた。

『手を下さない死神は、『ミミ以下かしら』

初めて聞いた酷く頼りない声。

随分昔の話だ。

今迷つたら殺られる。

『殺さない死神は、死神じやねえよ』

かつて他でもない里雪自身が口にした言葉。
詩月の自問自答を、ずっと隣で見てきた。

それを間違いだと聞いたくはなかつた。

『でも』

いちいち傷付いていく誠実さは、結局自分を苦しめるだけだと知つ
ていた。

『だからつて他の何かになれる訳じやないだろ』

ふつと俯いた詩月の苦笑がやたらと印象的だった。

駄目だ。

『それでも殺したくないの。あなたには下らなく見えるかもね』
『こいつはこの先もきっと汚れないんだと、漠然と思つた。

『嫌なら辞めればいいんじやねえ』

もしあの時そう言わなかつたとしても、ずっと変わらずに。

『でもこのチームのリーダーはあなたよ』

『リーダーのメンツとか考えるんだ、詩月』

『意見が聞きたかつただけよ。だけどやつぱり……、そうね、』

思い出すな。

『私もあなたも死神だもの。仕方ないわ』
あの時。

詩月

『今、忘れて。大丈夫よ。ちゃんとやるわ』
ただ純粋に、綺麗だと思った。

ぎりぎりの場所でも、振れないよつと立とじてこむ姿が。

『詩月、そうじやない』

だから、いのまが。

『辞のよし』

そんなに意外だつたかと聞きたくなるほど無防備に驚いた日が、ま
つすぐこちらを見ていた。

思い出さないようにしていた、何か。

浅はかな幻想だったとしても、そのまま。

瞬間、無意識にハルに向かひつとした墨雪の背中に、ドジと鋭い衝撃が走った。

三十七、手紙の導く先へ

何もかもが幻想であつても
春になれば
翻り咲き綻ぶ

桜吹雪

月夜に乱れ舞う
失つた時を追つて

過ぎ去つた映画だった
そうやって
田^{いだ}と思^{おも}い出^だは増^ふえる

泣いてみるのも洒落た一幕

風流に霞むひとひら

情緒に揺れて少し、弱くなり過ぎたかな

春になれば翻り咲き綻ぶ桜吹雪
世界の終わりまでいざなつてくれ
華やかな祭りの如く
何度も酔いしれる
幻想で構わない

ひとひら

月夜に解けていく
失つた記憶

馬鹿げた台本に沿つて踊る

君は美しい

幻を幻と呼べない君は
誰にも聞こえない声で叫ぶ

幻を幻と知つている君は
天の邪鬼

今となつては

己の心の在り処も見えない

幻想を幸福と呼んで一興
儻い命

艶やかに染めたい

沈黙の水面に石を投げ
崩れしていく視界を讚えよ

さあ

終着に向かつて

進め

振り返ることなく
二度と

鮮やかな赤が散る。

ハルの肩にどさつと倒れ込んだ里雪の背中に、細身の長い刀が付き刺さっていた。

「ハツ、…クソ…ツ、しぐじつた…ツ」

里雪が呻いた言葉に反応するように、血が流れ出る。

「つ、…つ…」

どぐどくと溢れる血が、里雪を支えたハルの柔らかな服に滲んでいく。

「隙だらけだ。里雪。貴様らしくもない」

里雪の様子など意に介さない涼しい声が、鋭くハルの耳を打つた。冷ややかに刀を何本も構えた女が、こちらを見ている。

「…全く、うちのアホは遊びすぎだな。このフィールドが生きているから、まだ辛うじて意識はあるようだが」

苛々と零された言葉は、里雪の攻撃に倒された男のことを言つているようだ。

一息ついて女は続ける。

「挨拶が遅れたな、ハル。彼岸の最上層衛隊、平たく言つといふの彼岸の戦闘要員、椿つばきだ」

返す言葉が見つからずハルが見つめる先で、椿が白々と言い放つ。

「名前は覚えなくていい。どの道先のない命だからな」

それを聞いた直後に、ハルの腕の中で、支えた里雪の肩が微かに強張つた。

「こんな事の為に…。里雪も馬鹿な男だ。死神は死神らしくしていれば良いものを」

「…」

俯いた里雪の唇が、自嘲するように弧を描く。

「望めば“彼岸最上層護隊”的“最強”も手に出来る男だったといふのに、惜しい話だ」

自力で自分の体を支えるように身を起こした里雪が笑う。

「ハ…惜しいもんか…、最上層衛隊の“最強”…、は、」

そこで一度息を止めて、里雪はぐつと拳に力を入れた。その瞬間ドガツと地面が砕けて獣が現れ、椿を押ししつぶそうと襲いかかる。ズタズタな状態で攻撃を仕掛ける里雪にハルは声をかけることも出来ない。ただその傷付いた背中と裏腹に、はつとするほど優しい、落ち着いた囁きを聞いた。

「世界のあらゆるもの……破壊するだけだ……」

三十八、正しい事が正解じゃない

「まだ力が使えるのか。この力…完全に宝の持ち腐れだ」
シールドらしきものを張つても、獣の予測できない動きのせいにじ
わじわと切り傷が増えていく椿が吐き捨てる。

「引くも戦法か…里雪を消せないのは腹が立つが…。私の任務はこ
の間抜けの回収だ」

酷い不協和音の鳴き声を撒き散らして荒れ狂う獣。椿を攻撃しよう
としているが、同時に獣自身も何かから逃れようとしているかのよ
うだ。

「…いずれお前の相手は適任者が選ばれるだろう」
椿がそう言い残して倒れていた男」と姿を消した瞬間、獣も消え、
ただ闇雲に白が広がつていた景色はハルの家に戻つた。

「あ…、家が…」

そんな僅かの安堵も、負傷した里雪がどさつと倒れる音で瞬時に飛
散してしまつ。

駆け寄つたハルの足下に血溜まりが留まる事なく広がつていく。

『やめて』

「私が……、あんな」と言つたから

あの言葉で、里雪が一瞬躊躇つたのをハルは確かに見た。そして恐
らく、それがなれば結果はこうではなかつた。

「どうしよう…詩月や……」

「ハル…どう…」

「詩月や…」

駆け込んできた詩月に押しのけられるよつとしてハルは里雪の側を

離れた。

「里雪ー里雪、里雪ー」

返事の無い里雪を下手に揺する事も出来ず、顔面蒼白になって荒げる詩月の声には、どう差し引いても意識があるかどうか確認する以上感情が込められていた。

「里雪ー！」

「ひ…るせこ…、」

「里ゆ…」

「名前……、呼びすがり……、つ…死んでねえよ、バカヤロ…」

微かに意識を浮上させたらしい里雪が億劫そうに答えるが、その間も血は止まる事なく流れ出ていく。

「お前が護りたがつてた人間には…… 一つの…、傷も、付いてねえよ」

ハルの目から涙が零れる。

「早くそいつを連れてけ、詩月」

里雪ははつきりとそう言った。

「ここには場所が割れてる

「行け」

「…り…」

詩月の表情が揺れる。

「なあ…、知らないなんて言うなよ」

ぴしゃりと『行け』と言い放った調子を押し殺して、まるで宥めるように里雪は紡ぐ。

「全でが上手くいく戦いなんて……、」

「これは、仕方のないことだと。」

「どこにもない」

だから早く。

ずっと眠った状態で倒れていたナツメを抱きかかえて、詩月は反対の手でハルの腕を掴む。

「つ、詩月さん！」

進もうとする詩月にハルが声をあげる。

「待つて！ 詩月さん！ …」

あの流血で置き捨てて行つて助かる訳が無い。

「詩月さん！ …嫌だ… …置いてきたくない！ 詩月さん！ ねえ、大切な人なんでしょう！ …？」

詩月だつてそれに気付かない訳じやないだろ？

「詩月さん！ …！」

今進んだら一度と。

「詩月さん！ 離して、しづ…」

「大切だから… …、行くの」

迷つたら、全部嘘になつてしまつから。

「ハル、何も言わないで。マトモじやないことくらい… 私にだつて分かつてる… …」

引かれる手のままに、詩月の後ろ姿を追つて行く。

ハルには、その背中がどうしようもなく哀しく見えた。

「見事な一突き。ずいぶん派手にやられたわね」

里雪の血の池の中に、桜が屈みこむ。

もつ意識の無い里雪に意味ありげな思案の目を向ける。

「詩月も馬鹿だけど…」

ぐつたりと動かない体。

「あなたも相当醜いよ、黒髪へこ

三十九、君の望むままに

この教会に慈愛に満ちた女神はない。
今ここにいるのは死神。

希望も祈りもない。

黒服の女、黄昏が鈍く光る凶器を振り回す。
躊躇いなどない。照準はフユ。

救済はない。

荒い風圧が、微笑する女神像を襲う。

？女神の資格を失った女神だ。

些細な感傷がフユの思考を搔き乱す。

「フユさんーー！」

朝凧の声。

？『死神もキリストに祈るのか。変な話だな』
？『祈つてねーよ。救われたいとも思つてねえ』

乱火と交わした言葉の記憶。

フユは刃を向ける黄昏の襟元をぐつと掴んで、振払う代わりに引き寄せた。

「あの時出会つたのが…乱火じゃなくてあんたみたいな奴だったら

…、

手遅れだと知つているけど。

「今迷うことなんて、無かつたのに…」
言わずにいるれない。

?『世界が壊れりやいいと思つてるんだ』
乱火はそう言つた。とても乾いた口調で。

投げやりな無防備さと氣怠さに、どこか自分と似た空氣を感じた。

認め合える予感なら、多分この時に、もうあつたんだ。

?『一度いいな。俺もだ』

けれど、そう言つて微かな予感を自ら打ち消した。

?『お前達を破滅させたいと思つてた。ずっと』

ただこのやり切れなさを向ける相手を探していた。心中でも良かつた。

どうせ浮き世を謳歌する気持ちなんて残つちゃいない。
抉り取られた心の分、彼岸の世界もズタズタにして…。

?『こつちはお前ら彼岸の使いのせいで、今までずいぶん泣かされたんだぜ。報いろよ』

見開かれた乱火の目が動搖を物語つてた。

『彼岸の使い。誰にも知られてないと思つたか?』

凶星だと顔に書いてある。

『自分達だけが特別だとでも思つてたかよ? じゃあさつきの挨拶は

?』

?『死神』も、キリストに祈るのか。

『タチの悪いジョークだとでも？』

おめでたい。その勝手な思い込みで、気ままに人狩りか。

でも乱火。お前は違つたんだろ。

だからこんな廃墟で氣怠くサボつてた。永遠に彼岸には戻らないつもりで。

『なあお前の力…、俺に渡せよ。もう要らないんだろ』

丁度良い奴に出会つたと思つてた。あの時は。

乱火は彼岸に愛着が無かつたし、俺はそれを壊したかつた。

要らない力なら俺が使う。

拍子抜けするくらいあつさり力の譲渡を承諾した乱火は、おもむろに立ち上がりて手近なステンドグラスを割つた。

『血の魔法陣が必要なんだ』

ガラスの破片で深く切つたのだろう、赤く染まる手から零が落ちた。振り向きもせず説明した声はもう乾いていなかつた。静かで穏やかな声だつた。

力の譲渡はあつけない契約だ。

リスクがあるのは差し出す方だけで、受け取る方は黙つて立つていれば良い。

乱火の血で床に魔法陣が描かれていくのを、突つ立つて見下ろす。促されるままその魔法陣の上に移動しても、消耗していくのは乱火だけ。

ゆっくり、不思議と温かい感覚になる。一方でぐつたりしていく乱火を眺めていた。

？このままコイツが死んでいいたつて。

ふと微かに震える赤い手に触れたのは、何かの氣の迷いだったと思う。

自分よりはるかに低い温度にぎょっとした。

『おい、大丈夫かよ』

咄嗟に呼びかけても反応がない。

『おい、』

まさか死んではいないうちが、焦りを感じて手を取つても、振払う力も残つていらないらしかった。

『おい、死ぬなよ？』

そう言つとぐつたりしていった表情が少し緩んで、唇が微かに弧を描いた。

ガラスで切つた外傷よりも力を失つた不安定さで消耗していくようだ。

『バカだな。そんなにしんどいなら止めときやいいのに』

くれと言つた手前、勝手な言い分だが本心だった。病院に担ぎこまなきやいけない事態ではないが、さすがにこのまま放置することも出来ないので隣に胡座をかけて一人愚痴る。

返事の代わりに弱々しく手を握り返された。その瞬間、何も始まつていないので後悔に似た感情が過つた。

あんな風に出会つたりしなければ良かつた。
今は心から思う。

彼岸の力を無くして、乱火がどうするつもりだつたのか知らない。

『行くと来ないならここにいれば』

多少の罪悪感はあつた。でも、だからだけで、ああ言つた訳じやない。

打算。乱火がいれば、彼岸の奴らは必ず近付いてくる。破壊の取つ掛かりになれば、いい。

？『フユ』

そんな風に思つてたのに。

風の気持ちいい春だつた。乱火が居るのに慣れ切つていた。
あの日ソファで目を閉じていたけれど、眠つていた訳じやなかつた。

？『お前の望みに俺は最後まで付き合つから』

不意打ちだ。

俺が負つた傷に、それで報いたつもりなのかよ。乱火。

余計に抉れていくんだ。
わからんねーのかよ。

ムカツク。

たぶん。

認め合えるけど分かり合えない。

今視界に映るのは黒服の殺意。黄昏といつやの女。あの時出会ったのが乱火じゃなくてコイツだったら、楽だったのに。コイツなら、何の躊躇いも無く…。

ポケットからガラスの小瓶を出す。

乱火から奪つた力と小瓶の液体を反応せめるように黄昏に投げ付ける。

濁つた爆音と共に青白い閃光が走る。その後立ちこめる濃い白の煙。直前に見た黄昏のハツとした顔。

爆音と閃光で聴覚と視覚が馬鹿になつてゐるが今更関係ない。煙が晴れてもそこにはフコと朝凪だけなのだから。

朝凪が青ざめる。

「最上層衛隊を…焼き…尽くした…？」

「何してるんだ。早く行くぞ」

「あ…、はい…！」

フコに気圧される朝凪。

もう、全部が戻れない。

四十、武分の武はる

焼けこげた跡と。廃墟をゆるりと撫でて消えていく煙。朝凪の視界に映るのは、静かに立ち上がるフユの姿だけ。数秒前の爆音と白煙が黒服の女を消し去った。

彼岸の使いが、人間に消された？

それは朝凪にとって、あまりに衝撃的だつた。
いくら今のフユが乱火の力を持つては言え、相手は最上層衛隊、戦闘を主に任務を果たす彼岸屈指の精銳だつた。フユは、それを跡形もなく消したのだ。

フユの戦闘センスの問題か、それとも詩月が頼りうとした乱火の力がそれ程までに強いのか。

「…こっちです」

朝凪はフユと目を合わせるのを避けるように背を向けた。詩月達のところへ行かなければならない。そしてそれ以上に、この息の詰まるような廃墟から一刻も早く抜け出したかった。この闇も光も淘汰した、いにしえの教会から。

一步踏み出すると、どさりと背後で音がした。
振り向くとフユが蒼白で床に膝を付いている。

「フユさん…！」

「は…、この有り様だ。やつてらんねえ…」

「大丈夫ですか！？」

「大丈夫な訳あるか。俺は彼岸の使いじやねーんだ」

「え…」

フユは息を殺すように整えながら、同時に感情も殺すように言つ。
「力をえ、ば跳ね返りがある。薬の副作用みたいなもんだ」
一つのリスクも無く世界が回る訳が無い。

「それ、……乱火さんは……」

「言うなよ」

フコはぴしゃりと朝凪の問いを遮る。

「俺が欲しくて奪つた力だ。乱火のせいじゃない」

欲しくて奪つた。

「？それって……」

「トロそくなくせに察しはいいな。そつだよ、俺は彼岸と戦つもりだつた」

自分の全部を投げ打つて、刺し違えてでも。

「だから彼岸が俺を消そうとするのは、あながち間違いじゃない。むしろ正しいくらいだ。あんたは俺を置いていつて良いんだよ」

ふと「一人の目」が合つ。

「きっとそれが一番賢明な方法だ」

彼岸には、今の自分の存在は厄介だろう。刺し違えてでも。いつまたそう思わないとも限らない。フコの思考は朝凪よりも余程冷静だ。朝凪の瞳が少し揺れて、下に逸れる。

「……すみません……。あの……」

不安げに躊躇う間があつて、それでも意を決したように朝凪は口を開いた。

「言つている事が難しくて、ちょっと意味がわかりません
絶妙の間の悪さだ。

「いや……。もういい」

俺はこんなアホに庇われたのか。

心配そうに自分を窺う朝凪を前にして、フコは切実に思つた。
でも彼岸にこんな奴がいるから、怒りじやない感情も動くのかもしれない。

彼岸に対する相反する感情が内在するのは苦痛だけれど、仕方ない。乱火のことも、今日の前にいる朝凪のことも、きっと自分は嫌いにはなれないのだろう。

朝凪が上げた目と再び視線がぶつかって、フコは苦笑した。

「と、とにかく急ぎましょーう！！」

突然至近距離で零れたフユの笑みに朝凧の頬がかあつと染まる。場を無理矢理繋げようとあたふたとフユを急き立てる。

「あー、そつだな。俺ももうあんま立てられねえ…、サイアク」すでに立っているのがやつとだが、時間が経てば経つほど辛くなる。良い加減腹をくくつて朝凧の跡を付いていくべきかもしない。重たげに体を起こすフユの前で朝凧がそわそわと聞く。

「あ、あの、手をお貸ししましょーうか！？」

手、と言いながらその待機姿勢は明らかにおんぶを想定している。

「…」

「あつ、遠慮なさいなくて良いですよ」
花のようく笑う、朝凧。姿勢は前屈み。
遠慮ではない。断じて。

「フユさん、どこからでも」

「…」

「どうぞー。」

「無い。無理。有り得ない。俺歩けるし」

四十一、小休止

境界の入り口を出てすぐのところ。

「みーちゃん」

朝凧がそう言うと強い風が吹いた。

「乱火さんとのこりに連れていってね」

ガサッと足下の雑草を荒らして姿を現した大蛇。恐らく10メートル弱。派手な黄色をベースに、深紅の模様を持つ。

「……おい、みーちゃんつて、……」

フユは嫌な予感が的中しないことを祈りながら、望みが薄いとは知りつつ、聞いた。

「あつ、この子です！みーちゃん」

「……その蛇か」

「はい！」

朝凧のからりと笑う表情に悪意はひとかけらも無い。

「……そいつが案内してくれるって？」

「はい！みーちゃんの第六感は凄まじいですよ！」

第六感か。仮に彼岸の蛇の第六感が百発百中だったとしても、だ。

「俺たちはそいつの後を付いていくのか？」

この教会は廃墟だから良いとして、まさか乱火のところへ通り着くまでに誰とも出会わないなんて保証はない。

「一応聞くが、そいつは普通の人間には見えないんだろうな？」

「えつ、あつ！」

？見えるのかよ。

「すつ……すみません！」

「見えるんだな」

「はい」

「なんでだよ……お前達の姿は誰にも見えないのに……」

フユは深い溜め息をつく。厄介なことこの上ない。

「すみません。飼い主の私の力が到らないばかりに」
しゅんとする朝凪。

「？たぐ、境目がわからねえ。さつきの奴の攻撃だつて簡単に教会を破壊したし。見えないけど殺傷能力はあるつてふざけた話だな…。お前達どこまで人間界に関われるんだよ」

「すみません。私もよく知らないんです。今までこんな風に関わったことなんてありませんでしたし…」

ますますしゅんとする朝凪。

思案しかけて、フコは匙を投げた。

「まあいいや、考えたつて仕方ない。さつさと乱火たちと会流しうぜ」

「え、でもみーちゃんは、」

怪訝そうな朝凪にフコが氣怠い一瞥を加える。

「なあ、少しほじつちの世界のルールを勉強してもいいんじゃねえ？」

そう言って、ジーンズのポケットから青い携帯を取り出した。

四十一、憂鬱の実情

「今ビニにいる」

フコが携帯に吹き込んだ第一声。朝凪にはフコの声しか聞こえないが、恐らく電話の向こうでは乱火が何事か言っているに違いない。

「…ああ当然だろ。つかお前らが迎えに寄越した女、むしろ足手まいなんだけど。…そう。朝凪。…ああ。…ん、ビニ?白羽?ふうん。わかつた。…行く。要らねえ。…はあ?…、知ってるよ馬鹿」

通話はそれで終了したが、足手まいと言われた朝凪は自覚があるだけにコメントのしようがない。

「ホテルにいるらしい。ビニに隠れたつて大して変わらないとは思うけど…呑気だな、あいは」

淡々とした調子だが、今のやりとりで戦闘直後の切羽詰まった空気が少し和らいだらしい。教会にいる間中フコを取り巻いていたピリリとした気配がふわりと消えた。

乱火はそれだけ『フコ』に近いところにいるのだ。

『彼岸』ではなく。

「ここから30分くらいだな。オイ蛇は置いていけよ」「あ、はい!ごめんねみーちゃん。彼岸に帰つててね」
がさがさつと音がして『みーちゃん』が消えた。

結局フコを迎えに来た朝凪がフコに案内される形になつて、教会を後にする。

それにしても。

フコの後ろ姿を追いながら朝凪は思う。

乱火と電話するフコは淡白で、口調も荒かつたけれど。でも親しい相手に向ける甘さが確かにこもつていた。

(たぶんフコさんは乱火さんを信用している)

「あいつ、電話切る直前にさ、」

特に振り向くでもなくフユが口を開いた。

「『俺の番号知つてたんだな』って言いやがつた。心底ホッとしたみたいに」

小さな笑いを噛殺す声。

「誰がケータイ渡したと思つてんだよ」

朝凪の心臓がどきりと跳ねた。フユは気を許した相手には、こんなに甘い声を出すのだ。

無防備で、優しくからかうような響き。

「あんたも乱火も抜けてる」

聞き逃したくない一心で朝凪は耳をします。音だけに集中していたせいで視界は油断していた。

突然振り向いたフユの表情に息が止まる。

「そういうのが、イイのに。な」

フユは困ったように笑うのだった。

白羽ホテル。特に立地条件が良い訳ではないし豪華でもないが、そこそこ小綺麗なホテルだ。教会から電車を一本乗り継いで30分強。愛想は悪くない、けれど客に対して適度に無関心なホテルマンをすり抜けて、乱火の指定した部屋を探す。

ルームナンバー307。

アイボリーのドアに控えめなプレートが付いている。

「乱火さん、朝凪です！」

ノックもせずに声を上げる。隣にいるフユは、辿り着いた安堵からか気負いが一気に降りたようで重そうに息を付いた。ガチャリと鍵が外れる音がして乱火と砂都が顔を出す。

朝凪の不安げな様子とフユの沈黙を見て乱火の表情が曇つた。

「フユ、大丈夫か？」

乱火の手がフユの額に触れる。

「……スゲー熱だな。病院行くか？」

「触んな平氣だ」

「どこがだ」

彼岸の使いには人間界の温度はわからない。朝凪は乱火にフユの温度が分かるのを不思議な気持ちで見ていた。

「もういいから寝てろ。」

「だから平氣だつて、」

ほとんど引きずられていくよなフユを見て朝凪は複雑な気分になる。

「羨ましいの？仲良し」

小声で砂都が朝凪を茶化す。

「えつ、あつ、そういうわけでは……！」

弾かれたようにこちらも小声で否定する朝凪。

「そーお？ボクはちょっと羨ましいなあ

「え……」

「フユのこと好きだもん」

砂都のくるりとした大きな目が、さも残念そうに伏せられる。

「心配したいじゃん」

大げさに溜め息を付いて朝凪を窺う。可愛らしいドールフェイスの効果か、砂都のオーバーリアクションにさほどの嫌みはない。ぱあっと顔を赤くした朝凪が小声のまま自白する。

「あの、あの……じ、じは私もフユさんのことが好きなんです……！」

バレバレだし。と砂都が思ったことなど朝凪が知る由もなく、彼女は同士を得た事実を単純に喜んでいる。

自分の容姿をフルに生かしたピュアスマイルで砂都は朝凪の手を取つた。

「そうだつたんだ！頑張つてね！応援するよー！」

「さ…砂都さん！……！」

感動に瞳を潤ませる朝凪。

「フユと乱火がどんなにラブラブでも負けちゃダメだよ！朝凪は女子なんだから、きっとフユも最後は朝凪を選んでくれるよ！でも

あのプライド高そうなフユが乱火に甘えてる時点でほんとはもう脈ないかもしねないけどね！禁断の恋は燃えるって言つしね！でも頑張つてね！応援するよ！」

二口二口捲し立てる砂都の台詞の危機感に、潤んだ瞳も一気に干上がりつて朝凪は蒼白になる。

おもしろい…。

内心で砂都はそう思つていた。

「フユ、たまには人を頼れよ」

奥の部屋で無理矢理ベッドにフユを座らせた乱火が呟く。

「うるせーよ」

「寝てろ、薬買つてくるから」

離れる乱火の服を、引き止めるようにフユが掴む。

「こんなはずじゃなかつたんだ。ごめん乱火」

「…フユ、」

「ごめん。彼岸を壊したいって、俺はずつと言つてたけど懺悔に似ていた。教会では言えなかつた。教会で言つことじやなかつた。

これは、乱火に言わなきやいけない？

「俺は間違つてた。間違つてたんだ…」

詩月の使い魔、スズが先頭を歩いていく。スズの後をナツメを抱いた詩月、そしてその後にハル。彼岸の力が働いているのか、詩月の足取りはナツメを抱きかかえている重みを一切感じさせない。まるで何も持つていらないようだ。

「ハル…こんなことに巻き込んで、本当に『めんなさい』」
抑揚のない声で詩月が言つた。その後ろ姿からは何も読み解けない。「…いえ…」

小さく返すハル。他に答えようもない。詩月が『里雪』と呼んだ、血に染まる金髪の青年の残像がハルの頭を過る。

ハルが浴びた里雪の血は、時間が経つと見えなくなつた。彼岸の痕跡は人間界にあまり長く留まることは無いのだ。

?行け。

里雪はそう言つた。それが何度も何度もハルの耳の奥で再生される。もちろん、詩月の耳の奥でも。

詩月とハルは会話のないまま進んでいく。

辿り着く場所がどこにも無いかのように二人は無言だつた。

スズは『白羽ホテル』と書かれた入り口の前で消えた。同時に自動ドアが開く。

「センパイ！」

ロビーで詩月とハルを今や遅しと待つっていた?もとい、フコと乱火の側を離れて頭を冷やそうとしていた?朝凧と出会つ。

「ハルさん！無事だつたんですね！！良かつた！」

無事を心から喜ぶ朝凧はハルに抱きつかんばかりの勢いだ。

「センパイも無事で…」

朝凧の言葉を聞いていないような、どこか上の空の詩月。

「センパイ？何かあつたんですか？」

詩月はからうじて返事をしなきやいけないと思い到了。

「ん…ちょっと、疲れたから。先に休んでいいかしら。悪いけど」

「…ええ、もちろんそれは…。あ、じゃあナツメ君は私が預かります。これ鍵、女子は308号室です。乱火さんとフコさんは隣の307号室にいるので、何かあつたらそちらへ。…私達もしばりくしたら戻ります」

「ありがとう」

詩月は力無く微笑んで部屋へ向かつた。あまりの霸氣のなさに朝凧が動搖する。

「ハルさん…何か…ありましたか」

さつと目を伏せるハル。

「何が…」

ハルは僅かに逡巡して、くつと奥歯を噛み締める。

「ハルさん…」

小さく拳を握りしめて、ハルが口を開く。

「じつは、…」

308。

そつけないルームナンバーの付いたドア。今閉めたばかりのそのドアに背を預けて、詩月はもうこれ以上一步も進めないと思つ。

電気も付けない部屋。

暗闇の中でするずるとしゃがみ込む。

？行け。

いつでも味方でいてくれた里雪は、最後まで味方だった。

「…………」

咽から漏れた声で自分が泣いていたことに気付く。

暗い。電気なんて付けたくない。暗いまま。口のまま。失いたくない物ばかり無くしていく。

里雪

里雪

里雪。

どうして。

悪い予感なら、さつとあつたはずなのに。

この暗闇を引きずつて、それでも止まることが出来ない。

? 里雪がいつか自分の為に傷付く気がしていた。だから本当は泣く資格なんてない。

それなのこびりじい。

「つ……、

嫌だよ。でも。

? なあ、知らないなんて言つなよ。

音の無い、光りも無い、たつた一枚のドアに隔てられた、ホテルの一室。

聞こえないはずの、見えないはずの里雪の残像が、詩月の胸中を埋める。

? 全てが上手くいく戦いなんて、ビリにも無い。どこにも。

甦るのは悲しいほど温かな声。

まだその声は、詩月の背を押そつとする。

立たなあや。

部屋に満たされた闇より黒い、詩月の瞳に意志が宿る。
後悔は、今じやない。

「田の前の間違いを迂回しようとして、結局袋小路に迷い込む」
艶やかな声が歌うように紡がれる。田に手にはまだ血の滴る刀。
「正しさも間違いもガラクタと一緒に埋もれてるのよ。この世界で
はね」

その女の口元には、まるで世界を高見から眺めているような微笑。

「茶番だな」

黒髪の男が言葉を挟んだ。

「ええ」

女と男の田が合づ。誘つよくな、試すよくな女の田。それをもさり
りと受け流す、飼い馴らされる」との無い男の田。

「その茶番が、全てを創つていくのよ」

その女？桜は、田の前の男？華夜にそつ言つて、瞳の色を濃くした。

四十四、知らなければ孤独

「なあフユ…」

乱火に背を向けるようにベッドに横になつたフユと、やはりフユに背を向けるようにベッドの近くの床に座り込んだ乱火。

煙草を燻らせながら、乱火が零す。

「あのさ…、どれもお前のせいじゃないから」

フユは意識の定まらない浮遊感の中でそれを聞いた。彼岸の力を使つた反動で上がつた熱は、持続性は無いが高い。

「…」

持て余す体温のそばに他者の気配。

本来は彼岸の使いであるはずの乱火が、フユの方に余分に感情移入している。

？そんなことしたって、何にもならないのに…。

「俺に情でも湧いたかよ」

マズイな…とフユは思う。

「バカだな、オマエ…」

拙い言葉。けれどそれしか口に出来ない。

返事をしないまま乱火が煙を肺に入れる。

？バカはお前の方だろ、フユ。

救いにならない優しさも、気休めにもならない慰めも、取り繕うだけなら必要ない。

儚い沈黙に、言葉にならない感情が溶けていく。

瞳を閉じて意識を手放すフユ。

？狂つてるな、俺も。

煙草の匂い。今はそれにすら安堵する。

一方、人気のないホテルのロビーのソファを占領しているハル、朝凪、砂都。

「金髪の、天使みたいな男の人が、私を庇つて……」
ハルがぽつりぽつりと言葉を選んで話す。鋭利な刀を背に受け止めた金髪の男を、記憶の中心に抱きながら。

「金髪の……天使、みたいな……？？？それって……」

朝凪の見知る中でその姿に当たるのはまだ一人。慣れ合いを好まない反面で、見て見ぬ振りが出来ない甘さを合わせ持つた、詩月の同期。ハルがその人物の名を挙げる。

「里雪、さんと」

予想と一致した名に朝凪の背筋が冷える。

「里雪……さん……。まさか……」

「詩月さんが、そう呼んでもました」

「そんな……」

里雪が、負けた。最上層衛隊に。

「砂都

聞き慣れた声にハル、朝凪、砂都が一斉に振り向いた。

「センパイ」

視界に詩月の姿を認めた朝凪が呟く。すらりと立つ詩月に懸念したようなブレはない。

「砂都。私に力を貸して」

詩月はそう言って砂都の正面に屈みこんだ。

「センパイ、あの、」

朝凪の呼びかけには応じず、詩月は射ぬくような視線で砂都を見る。

「最上層衛隊に攻撃されたわ」

ブレないかわり、他の物を寄せつけない。

「里雪はもう戦えない」

視線を合わせる砂都の目が揺れる。

「ここだって別に安全じゃないわ。一時凌ぎよ。砂都お願い。私を

風姫に会わせて」

それは故意に押し殺したような口調だった。ぎゅっと握りしめられた詩月の手を、ハルは見つめる。

「抹殺なんて間違ってる。ハルやナツメやフコが私達にどんな風に関わっていたとしても、風姫の予言がどんなに正しくても、最上層衛隊の行動が例え最善だったとしても、私達やハルやナツメやフコの未来に他に選択肢がないなんて、そんなこと絶対に有り得ない。

『誰かを犠牲にして解決』なんて逃げてるだけよ」

詩月は自らの一言一言を確かめるように紡ぐ。

「砂都、あなたに手伝って欲しい。もつと確かなものを、きっと私達は信じられる。だからお願い、力を貸して」

ハルの胸中で、押さえようの無い安堵と、小さな後悔が持ち上がる。今までずっと詩月に気遣われていることを知りながら、ハルは一つも応えようとはしなかった。自分が死んで弟が生き返る。それが体の良い作り話でも構わないと思っていた。気休めでも。それがもしもどうしようもなく馬鹿げた行いでも、一人きりで、自分を殺して、消えていく。それで償えるのだと。だから受け入れて流れに身を任せたる気でいた。

詩月はハルのそのスタンスを決して否定しなかった。けれど、別の答えを探している。

ハルやナツメやフコの、他の未来の選択肢を。

？私は、一人じゃなかつたんだ。

唐突に思い知った現実がハルの視界を滲ませる。

「風姫に会つて話を聞いて、今起こっていることをちゃんと知りたいの。じゃなきや何も出来ない。風姫の予言はきっと指針になるわ。何をすべきか考えなくちゃ」

詩月の真摯な横顔が、後ろに引くつもりが全くないことを物語つて

いた。

「フコを守れるかな」

「守りたいのよ」

砂都の問いに短く答えた詩月には、もう止まつもりなど無いのだと
ハルは思う。

詩月はきっと信じたままに進む。

？でも詩月さんは、

ハルは目を伏せる。

少し間を置いて砂都が「案内する」と呟いた。

けれどほつと微かな息を付いた詩月は誰とも目を合わさない。

？まるで、一人で戦っているみたい。

四十五、青色の未来

白を基調としたドーム状の部屋に、白のドレスを着た女が佇んでいる。入り口に背を向けた後ろ姿でも、プラチナブロンドの髪が緩くウェーブを描いて美しい。彼女の傍らに分厚い本が開かれた状態で浮遊している。白紙のそのページの上を、やはり浮遊する羽ペンが動き、青く濡らしていく。その青いインクが記す文字こそ、彼岸の未来の予言。つまりここに浮遊する本が先見の書である。

そして白いドレスの女、彼女が先見の書の番人、風姫。

「あなたは本当にそれで良いのですか、桜…」

入り口へ向き直り、透き通った声で風姫が言った。その視線の先には不敵に微笑する桜の姿がある。

「ええ勿論」

何に動じる様子も無く、桜は笑みを留めたまま続ける。

「現状に問題があるのなら、むしろ聴かせて頂きたいわ。私に取つては何もかもが順調よ。怖いくらいにね」

風姫は少しの間桜を見つめて、ただ一言静かにそうですかと呟いた。桜が苦笑する。

「風姫、あなた考え過ぎよ。訪れる前から後悔なんて馬鹿らしいわ。時は移ろうものよ。たとえ気に入らなくて、も、」

桜はゆつたりと深い息をつく。

「どんな事でも終わりがあるわ」

風姫は桜から目を逸らさなかつた。その瞳の奥がそれと氣付かないほど僅かに揺れる。目敏い桜は風姫の表情の変化を読み取りながら、敢えてそこに触れはしない。桜は風姫を真つすぐに見据えて諭すようになに言つた。

「いざれ風化するのよ。戦場も楽園も、隔てなくね」

四十六、それも歯車

最初に意識に触れたのは、肌に触れる滑らかな布の感触だった。次に嗅ぎ慣れた空気の匂い。目を開けると想像通り、潔癖な白さが暴力的に広がった。神経質なほど白で統一された、彼岸の世界だ。

？生きてる。

これが里雪の漠然とした感想だった。

歓喜も動搖もなく、ただそれだけの事実が事実として里雪の前に立ち現れる。

ゆるゆると開いた紅茶色の瞳。その紅茶は案外冷ややかに自身の生存を受け止めていた。

ハルを庇つた戦闘が現実である事は、背中から貫通したらしい刃物の傷の痛みで間違いない。体を起こすとずきりと鋭く痛みが走り、氣を失つていてる間に何者かの手で巻かれたらしい包帯に血が滲んだ。寝具に寝かされている事と、巻かれた包帯で、氣絶中の自分の体がそこそこに丁寧に扱われたのだと悟る。治療と呼ぶには荒っぽいが、彼岸の使いの治癒力を考慮に入れれば、それでも充分釣りがくる手当だった。

「上層部のイヌ相手にそのざまか。ずいぶん情け深くなつたもんだな」

ふいに記憶にある声が聞こえてはつとする。

「お優しいのは結構だが、下らん戦いで死なれちゃ困る」
いつからそうしていたのか、腕を組んで壁に寄りかかるように立っていた黒髪の男がつまらなさそうに呟いた。

「華夜！？なんで…」

そこにはいるのは、この状況下で真逆の立場に立つてはづの男だ。

この好機に里雪にとどめを刺そつとしても何の不思議もない。いわば敵と称して問題ない男。だが自分の気分次第でどうとでもなるこのチャンスに、華夜は何の興味もなさそうに佇んで、壁に預けた背中を動かす気配もない。そして、

「お前はこの戦いの最後まで頭数に入ってる。あんまり自分を安く扱うな」

手の平を返すような台詞を、やすやすと吐き出した。

「…どういう意味だよ」

予想外の華夜の態度に面食らつて里雪が聞き返す。ちらりと一瞥を投げた華夜が再び口を開いた。

「上層部は本格的に動き出したぜ。予言の書を盾に詩月を筆頭にした反対勢力も根こそぎ消そうって腹だ。露骨な軍勢を使わないのは単に詩月の戦力を嘗め切っているからにすぎない。事実今の詩月の戦力は絶望的だ。詩月自身の力を彼岸の水で回復したとして、所詮多勢に無勢。先は見えている。まして人間を守りながらだ。お前が良い例だろう。いざれは全滅だ」

里雪が無言を返すと、いつになく饒舌な華夜が続ける。

「詩月だって馬鹿じやない。遅かれ早かれ結局は無駄死にだと気付くだろう。だがもう後には戻れない。一步もな。大敗したくないなら防御は捨てて攻めに徹しな」

？忠告、か？

里雪の理解が間違つていなければ、華夜は勝負に駆け引きを持ち込むような性格ではない。頭は切れるが、どちらかと言うと特攻、正面対峙を好むタイプだ。己の恵まれた実力を自覚しているからこそ、気まぐれに戦い、不遜に勝利を手にしていく。その飄々とした華夜が、まるで地ならしをするように助言めいた言葉を吐く。

「敵には非情になれ、俺たちは死神だ」

この華夜に取つては、「く些細な一言が、里雪の神経を逆撫でした。

「ああ、俺たちは死神だ」

傷口が開く愚を冒すとわかつていても、気付いた時には里雪は華夜

に掴み掛かっていた。胸ぐらを掴んで華夜を壁に押し付ける。

「オマエだつて俺の敵だろ、だつたらどうして俺を助けた！？」

「なんだよ死にたかったのか？変わった奴だな」

手負いの里雪などハナから相手にしていないという態度で、華夜が見下すように笑う。案の定、里雪の腕の拘束はすぐに緩んだ。開いた傷口から流れる血が、里雪の体を覆つ包帯を赤く染め上げていく。「ここ」で焦つたつて何も変わらないぜ里雪。せつかく助けてやつた命だ、大事に使え

するすると華夜の足下にへたりこむ里雪に動じる様子も無く、華夜は淡々としている。

「華夜、何を考えてる…」

「さあね。教える義理は無いな」

くつと笑いを含む華夜の聲音に、里雪が先程から抱いていた疑問が頭をもたげる。

「オマエは…、敵じゃないのか」

増す痛みのせいで碌に問いつめることも出来ない。

「敵だよ。何だよその質問。今更かよ」

華夜は皮肉な笑いを声に湛えたまま、まともに答えるのも馬鹿らしいといつうようにあしらひ。

「ま、思つたより元氣そうで安心したぜ。じゃあな里雪」

そう言いながら気さくな素振りで里雪の肩をぽんと叩いて、自分の用はもう済んだとばかりに部屋を出ようと背を向ける。そして返事のない里雪を背後に、最後の一言を入り口に残していく。

「じゃあな、里雪。戦場で会おう

四十七、未来の照準

「じゃあ行くよ。手を貸して」

砂都がそう言つて、自身の右手を詩月の前に差し出した。

「い？」

「うん」

詩月がその手を重ねた瞬間、その場にふわりと薄く白い靄がかかる。詩月を風姫の元へ誘う、彼岸の無機質な白い靄。

「朝凪、ハルとナツメとフコの事、少しの間、頼むわよ」

ふと顔を上げた詩月が、朝凪に向かつて言つた。

当たり前の事のように。

「はいもちろん！」

朝凪も何の疑問もない返事をする。

「ハル、そんな顔しなくても大丈夫よ」

視線を合わさないハルに気付いて詩月が穏やかに宥める。

「いえ、あの…。そうじやないんです、詩月さん」

躊躇う一呼吸を置いて、ハルは外していた視線を真つすぐに詩月に向けた。

「私も一緒に…、連れて行つて下さい」

ハルの予想外の言葉に、詩月が固まる。

「…え」

聞き返すでもなく声を零した詩月に、ハルは続ける。

「私は今までずっと受け身で…。千秋の事も詩月さんたちの事も私が受け入れればそれで良いんだって、そう思つてました。私が受け入れれば丸く収まつて、誰も傷付かずに済むつて、でもそんなの…、

「…え」

「そんなの嘘です、詩月さん。一人でどれだけ背負つたつもりにな

つたつて、やつぱり私は一人じゃなかつた

ハルの言わんとしていることが汲み取れずに、詩月は沈黙を守る。

「私も詩月さんの力にはなれませんか。守つてもらえるのを待つて
いるだけなんて嫌です。私も何か役に立ちたい」

守るのは詩月で、守られるのはハルで。そんな一方的な関係は、き
つとどこかおかしい。

「でも、そもそもハルは私達のせいでこんな事に巻き込まれたんだ
し、だから、そんな事する必要…」

「詩月さん」

堪らず口を開いた詩月をハルが遮つた。

「もういいんです。そんな事は」

その言葉ははつきりとした強い調子だった。

「誰のせいとか何のせいとか、そんなのはもう、どうだつていいん
ですよ」

詩月ははつとする。ハルのそれは、チアキの命と引き換えに自分の
命を投げ出すと言つた、初めて出会つたあの日と同じ調子なのだ。
けれど、絶対的に違う。

今のハルの視線は死地へ向かつてはいない。

「私は何かしたいんです。私や詩月さんに訪れる未来の為に」

未来と呼ぶに相応しい光の一端が、今のハルの前には存在している。
「私が行つたつて何が変わるでもないけど、そんな事は私だつて充
分分かつていいつもりです。それでもやつぱりこれは私の問題でも
あるし、何か出来る事をしたいんです」

向こうからやつてくる結末を待つのではなく、自分の足で進む。そ
れは似ているようで決定的に違つ。

「それに私は…」

けれど自ら進むことの出来る足を持っていたとしても、向かう先が
光ばかりとは限らない。闇もひとつのか形であるのだから。
ハルは凛と立つ詩月を見て思う。

？特に、このひとは。

「詩月さん、あなたが心配です。力になれませんか」

四十八、彼にだけ見えるもの

「同じまでも続く白い建物。ここにあるどの建物も、ただ白い事だけが存在意義でもあるかのようにその色を主張している。

どの建物もフコの目にはほとんど同じに見える。白く美しく、狂気を覚えるほどに整然としている。フコはこの無数にある建物の中の一つから外の景色を見ているが、恐らくそこからではなくても、この世界の景色は同じ姿を見せるのだろう。

このままずっとこの風景を眺め続けたら、いすれはこの世界の全てが？今唯一青く色付く空さえも全て？白に侵食され、染め上げられていくのではないだろうか。

この世界は氣高くて綺麗だ。そして寂しい。他者と慣れ合つ事のできない孤独を、内包している。

？何度も？、この夢は。

フコは自問した。

これはいつも見る悪夢だと、夢の中で理解出来るほど何度も見た夢だ。

だからもう、先を見なくとも結末を知っている。

？…ここはたぶん、彼岸の世界だ。

夢でしか見た事の無いこの白い世界がきっと彼岸なのだと、フコには確信があった。

乱火の力を手にしてから見るよつになつた、酷い夢。日を重ねるごとに、同じ夢を見る回数が増えた。

？乱火。

鋭い閃光が視界を塞ぐ。

小学生の時、授業で見た原爆の映像によく似ている。フコはじっと佇んだまま、それを見ていた。

重たそうな煙が上がって行くまと。

衝撃波までが目に見えた。

？助からない。誰も。

氣高い白も空の青も、何もかもが呑み込まれて行く。陰といつ名の衝撃があらゆるもの包んで行く。

そして、思い出したよつに聞こえてくる地鳴り。

？ああやつぱり、音は光よりも遅いんだな。

そんな素つ気ない思考が、いつもこの夢の最後だった。

「つ、……」

目を覚ますとそこは、ホテルの一室。

暗がりの中で冷えきつた指先は毎回のことだが、あまりに見慣れ過ぎた悪夢に、酷く冷静に分析しようとする自分がいる。

？あれを予知夢じゃないって思おうとする方が、無茶だ。

夢を鵜呑みにするなんて、馬鹿らしい。だがあの夢はそんな風に無関心を装えるレベルを越えている。

? 亂火の力を奪つた弊害か。

? それとも。

「……罰、か」

暗闇の中、フユは諦めたように囁いた。

四十九、さよならと血の代わり

「フコ、そろそろ起き…」

乱火がそう言つてフコを呼びに来たのと、フコが床に自身の血で魔法陣を描き終わったのはほぼ同時だった。

足下の鮮血に乱火が青ざめる。

「フコ、これ…」

「ああ。丁度良かつた。そこに立てよ、乱火」

描かれた魔法陣の傍らに散らばるのは割れた花瓶の破片。べつとりとフコのシャツに染みた赤はとても鮮やかだ。フコの右の指先を生々しい血液が伝う。抵抗の痕跡の無いそれらが、彼自らの意志で傷を負つたのだと物語る。

「どうしてだフコ…、何のつもりだよ…」

流れ落ちた血の量を考えると、意外なほどしつかりとしているフコに乱火が問う。するとフコが不本意そうに眉をひそめた。

その魔法陣は、出会つたとき乱火がフコの為に描いたのと同じものだ。

つまり、力の所有権を相手に差し出す、彼岸の呪術。

「いいから立てよ。説明しなくて分かるだろ」

分からぬ訳がない。フコがこの魔法陣を描くという事は、せつかく手に入れたその彼岸の力を放棄するという事だ。本来の力の所有者、乱火に全てを返すという事。

「力を返してやる。だから早くアイツ…ナツメつていたつけ、アイツを助けてやれ。俺じゃやり方が分かんねーから。それに」

「フコ…」

乱火の視線を避けるように、床を見つめるフコ。絞り出すように咳く。

「力が、必要だろ」

あの悪夢が訪れるなら。

力を返さなければ、彼岸に戻る術を持たない乱火だけはあの悪夢を逃れることが出来るのかもしれない。力を返さなければ、乱火だけはあれに巻き込まれることはないのかもしれない。だがそれで、誤魔化せるものばかりじゃない。

「もう…、俺の前から消えてくれ。乱火」

フユは息を呑んで立ち尽くす乱火の腕を無理矢理掴んで魔法陣の上へ座らせる。

「潮時だ。この力が一瞬でも俺の手中にあつたこと自体、間違いだつたんだよ」

返さなければいけない。乱火には乱火を頼つて来た仲間と、それに応えるだけの器があるのであるのだから。

「つおい、フユ！」

「オマエ俺に対しても変な罪悪感持つてゐみたいだけど、ソレ勘違いだから」

彼岸の使いが見えたことで生まれた酷く冷めた価値観は、別に乱火のせいじゃない。

「最初は本気で、彼岸なんかぶつ壊してやろうと思つてた。あの時出会つたのがオマエでも他の奴でも、そんなの俺にはどうでも良かつた。どうせ選べる立場になかつたしな」

フユが彼岸の消失すら望んでいた頃、たまたま出会つたのが乱火だつた。

「人選なんて俺に取つちゃ贅沢な話だつたけど、結局のところオマエは最高だつた。変に同情的で、優しくて、彼岸に執着がない。俺が彼岸を消したいと思つてゐのを知つても、いつでも俺に協力的だつた。本当に嫌になるくらい、オマエは完璧な駒だつた。でも、正直オマエは完璧すぎたよ」

同情的で優しくて、自身の犠牲を辞さない。使い捨ての駒のはずが、反面それに救われていく自分がいた。

救済を自覚すればするほど、新たな傷が抉られていく。決して正義と呼べない行為を、振翳そうとした罰だ。

噛殺すように、フユは自嘲氣味に告げる。

「皮肉だな。今はもう、彼岸の消失を望んじやいないのに……」

動かす方法を知っていたのに、止め方を知らない。

？彼岸に対して嫌悪や憎悪以外の感情が生まれ得ると、今なら。知つてているのに。

俯いたフユの唇が柔らかく弧を描く。

「彼岸なんか見えなきや、俺ももつと可愛い性格してたんだけどな。本当馬鹿らしいよ、生きてくのは。笑つちまう」

「フユ、」

「じめんな乱火。俺は始めからオマエに声をかけるべきじゃなかつた。じやなきやもつと早く力を返してオマエから離れるべきだつた」
彼岸の使いだけが感じる空気の重みが乱火の肩を覆う。

それは魔法陣発動の証拠であり、乱火に力が戻りつつある証明でもある。乱火に取つて懐かしい彼岸の空気が辺りを埋めていく。一方で、フユの力が刻々と弱まる。

乱火は辛そうに息を付くフユを目の前にして、こんなに華奢な奴だつたかとはつとした。普段当たり前のように存在した揺らぐことのない強い瞳さえ、今は伏せられた瞼に隠されて見えないからかもしれない。

乱火に力を返せば、フユは無防備になる。

「フユ……。なんでだよ……」

もう答える氣力を持たないフユに乱火は問う。

「一度はお前が欲しつて言った力だ。彼岸と戦える力が欲しかつたんだろ。この力を失つたら、また見てるだけしか出来なくなるのに……。それに、今フユは……？」

わかつてゐる。そう言いたげにフユは微笑して、ざさりと床に倒れた。切れた腕の傷口は深い。乱火が労るようになその傷に触れて咳く。

「なあフユ……、今お前は狙われてる」

五十、予言と選択肢

詩月とハルが砂都に導かれて訪れたのは、彼岸の建物の小さな一室。ドーム状の天井を有するその部屋の中心に、開かれた分厚い本が浮遊している。そしてその傍らにプラチナブロンドの女性が佇んでいる。

「ただいま、風姫」

砂都が目の前の女性に向かって進み出る。

「砂都。おかえりなさい」

女性が穏やかな声を砂都に返して、詩月とハルを順に見た。好意も敵意も含まない瞳。それが静かな湖面のように見たものを受け入れる。

「詩月、あなたに会うのは初めてですね。？ハルさんも。何もないところですが、どうぞごゆっくり」

これが、風姫。この柔らかな物腰で、終焉を語るのか。詩月はそんな感想を胸中に結んで風姫に向かう。

「風姫、あなたに聴きたいことが

風姫の湖面のような瞳に詩月が映る。

「ええ。予言の書には既に彼岸の未来が記されています。あなたの聴きたいことはそれでしょう。けれど私に答えられることはあります」

ハルが不安そうに目を伏せる。

「私は終焉を心得ようと皆に伝えました。ただそれ以上は語れないのです。私は未来を知るが故に、それを故意に変えられる立場にない

のです。予言について語ることは、他に無いのです

そこで風姫はわずかに言葉を切った。

未来を知ることは、全てを掌握する事ではない。懸念と徒労から逃れる代償に、行動する希望と可能性を失う。

「詩月、あの予言は私が一人の彼岸の使いとして皆に伝えることが出来る限界なのです。予言の書の番人としてではなく、私自身の意志で伝えられる最後の問い合わせです。何を成すべきか、どうしたいのか、終焉という言葉の前で考える権利は全員にあるのです」「でもそのせいでハル達は……！」

詩月が声を荒げる。

「あなたがいるでしょう、詩月」

風姫が穏やかなまま遮る。

「え……」

二人の対照的な視線が絡まる。

「それ、どういつ……」

「あなたがいるから……、いえ……。一つ事実として言えるのは、彼岸が今までに無い急激な速さで動いていっているという事です」「不自然に言葉を濁した風姫は、真意を答えることなく続ける。

「間もなく欠けた月も満ちるでしょう。それが、最後の合図です」

五一、月が満ちる

嵌め込みのガラスの向こうに都会の夜が広がる。
雲に淡く霞む月。

見下ろせば地上には人工の灯り。立ち並ぶビル。

眠り落ちたフユを背後に、ホテルから眺める夜景はぐらぐらするほど美しい。

晴れていく空。冴えた月明かりが窓際に立つ乱火をそつと撫でる。
？満月。

乱火が手を翳せば、そこに青く透ける炎が音も無く現れる。

「使えるのか…」

剥奪されたはずの彼岸の力。フユから所有権が戻つたところで、使えるかどうかは半信半疑だつた。

乱火の唇が静かに弧を描く。

彼岸最上層衛隊にも恐れられる、強力な青い炎。乱火が存在した瞬間から手にしていた力だ。要領も悪くない。彼岸の地位に魅力があれば、乱火もそこに立つことを望んだのかもしれない。

しかし始めから能力的に勝利していた乱火には、その分彼岸の世界を冷静に見る余裕があった。

？命狩り？くだらない。

七面倒な理論は、乱火にすれば取るに足らないことだ。何にも縛られず、自身の出した結論に従う。力を持つからこそ、我慢に振舞える。人間界で命を奪つてくる仲間達を尻目に、乱火は斜めに構えて加わろうとしたなかつた。

けれど彼岸の存在意義であるはずの命の管理に一切関与しようしない乱火は、秩序を考えれば邪魔なものだ。

『乱火、おまえは彼岸に必要ない。おまえにも彼岸の力は要らないだろう』

痺れを切らした彼岸上層部がでつち上げた罪人判決で、もう顔も思い出せない誰かが告げた。

？確かに。要らないな。

ただそう思ったことだけを覚えている。

仮に周りが羨むほどの力を持っているのだとしても、使う当てが無いのなら無意味だ。

『最後のチャンスだ、選択しろ乱火。彼岸の使いとして人間の命を管理するか、それともその力も、ここに存在する権利をも失うか』上層部の最終宣告は、乱火が彼岸を見切る決定打になつた。

？何かありや人間人間つて……。馬鹿馬鹿しい。

『俺は、後者を選ぶ』

乱火の彼岸の記憶は、そこで途切れている。気付いたら人間界にて、人間界にはフユがいた。

回想を中断して、目を覚ます様子の無いフユを振り変える。ここ何回かの慣れない戦闘と、力の譲渡で疲れ切つたのだろう。熟睡しているようだ。

差し込んだ月の光によつてフユの閉じられた瞳に纖細な陰が落ちる。？綺麗な男だ。

背負つた傷の深さが、彼の纏う空気をより魅惑的にしているのだろう。静かで、孤独で、心許ないほどの真つすぐさが彼を傷付けてきたのだろう。

誘われるよう近付くと、乱火の陰がフユを覆つた。

フユの肺が規則正しく上下する。

？生きてるんだな。それでも。

だから綺麗なのだろう。きっと。ズタズタな心をひた隠して、闇を飼い馴らすように生きていく。欲しがった力も、望んだ彼岸の破壊も手放して。もしもフユが覚醒してたら、誰も寄せつけない冷め

た目で、乱火に「行け」と言うのだろう。

? コイツはこの先も、多分ずっとそうやって生きていく。

救つてやれたら良かったのに。フユが聴いたら鼻で笑いそうな台詞が乱火の脳裏をよぎった。

目を開けないフユに語りかける。

「今まで、悪かったな。彼岸は俺が止めるよ。だからお前は生きて
いけよ」

「バイバイ、フユ」

五十一、見果てぬもの

「ねえ」

幼い声が乱火の背中を追う。

「目一覚ますの、待たないの」

振り向かない乱火の後ろ髪を引くように。

「あの人きつと悲しむよ。あんなに傷だらけだつたのに、側にいてあげないの」

「…ナツメ」

乱火は背を向けたまま、口の中で自分を呼び止めた声の主の名を呼んだ。

力が戻つてから、フユが望む通りにナツメの魂を体に戻そうとした。
『戻した』のではない。文字通り『戻そと、した』のだ。彼岸の術を使って強制的に魂と体を繋ごうとした。だが意外なことに術を使う必要はなく、それは詩月が手こずつたことを疑いたくなるくらい簡単に体に戻つた。

乱火はナツメの魂をナツメの体に近付けただけ。それだけだ。

彼岸の力で無理矢理戻したのではない。

どこで気が変わったのか知れないが、ナツメは自分の意志で戻ろうとしたということだ。

「ねえ」

世界に戻ることを拒絶していたはずのナツメが、そうと信じられないほど強い声で乱火を止める。

「…傷は、治した。もう塞がつてゐる」

「そうじやなくつて！」

乱火の力が彼岸の使いだけではなく人間にも適応出来ると知つたのは、フユの傷を治したつい数分前の話だ。

砂都との戦い。朝凧を庇つたと言つ黄昏との戦い。それから力の譲渡。全てで傷を負い、疲弊したフユの衰弱はあまり楽観できるもの

ではなかつた。どさりと倒れたフユの体は酷く冷たく、床の魔法陣は一見して出血量を危ぶむくらいに、かされることも無くはつきりと描かれていた。

彼岸の為に負つた外傷だけでも治癒できたのは不幸中の幸いだ。

「血が出てなくたつて誰かに近くにいて欲しいときがあるじゃん」

思考に沈む乱火を前に、ナツメは主張を重ねる。

「ねえ大人だつてそうでしょ？！」

？まさかコイツこんなこと言つたために生き返つたわけじゃないだろうな。

乱火が苦笑して振り變える。

「ナツメ、お前に頼むよその役目は。フユは口は悪いけど根は優しいし、多分お前とも上手くやれる」

そういうことじやないのに。まっすぐに乱火を見上げるナツメの目が、否定の色を強くする。

逸らすことを知らない視線に苦笑を深くして、乱火はナツメの頭をぽんと撫でた。

「そんな心配しなくたつてフユは強い。あんな男前の美人は中々いねーよ、だから大丈夫」

ナツメの眉が不満そうにしかめらる。

「でも」

「なあナツメ。一個伝言お願ひ」

「あの人？」

「そう。フユに」

「…いいよ。なんて？」

いつでも言えたはずだつたのに、一度も言えなかつた。

フユは自分を責めるから、多分言葉の通りには伝わらない。

「お前は？」

それでも本当はずつといつも言つてやりたかつた。

フユ、お前は何も悪くない。

五十三、彼岸上層部

「罪人詩月を捕らえよ。時は一刻を争う。生死は問わない」

白髪の男が、足下に跪いた最上層衛隊に低い声で命じる。
ここは彼岸の中で一番目に高い建物の最上階。パノラマで彼岸を見渡せる展望台のような造りだ。

集まつた最上層衛隊はおよそ三十人。彼等は全て詩月の敵。

「あの女を放置しては彼岸の無駄な血が流れるのみ。表向きの人道主義などまやかしに過ぎない。そうだな。桜」

最前列、男に最も近いところに跪くのは桜。視線を上げることなく、桜は答える。

「はい。浅はかな芝居にすぎません。これ以上の考察は無益かと」

「ふん。みぐびられたものだ。恐らく詩月の真の狙いは『神の地図』。彼岸の主権を握り、この世界を創り変えようといつたのだろう」

桜は、吐き捨てるように続ける男の靴をじっと見つめる。

「愚かなことを。『神の地図』は我々の手には負えん。まして世界を創り変えるなど見知らずの極み。生かしても害が残るだけか」

靴。服。床。

？白い。どこもかしこも。

桜はふと思い、何事も無かつたように顔を上げて告げる。

「詩月は近々ここに攻め入つて来るでしょう。しかもそれなりに守りを固めるべきです」

男が冷ややかに桜を見下ろす。

「まるで詩月一人のために彼岸最上層衛隊が手こじるとでも言いたげだな桜。気になることでもあるのか」

「いえ」

桜は瞳を逸らさない。だがそれはナツメが乱火に向けたような、何か訴える温度を持つた視線とは違う。静かで揺れない、遠くを見透

かすような冷めた視線だ。

「準備をしておくに越したことないと申し上げているのです。無

傷で済む戦いで、むざむざ血を流すのは不本意ですから」

桜のそれは、表情からも声からも感情を窺えない。

「危険因子は全力で討つ。これが最速で彼岸最上層衛隊まで昇りつめた女のやり方か。男は口元に笑みを乗せて命じる。

「そうだな。桜、お前に地図の保管室の守りを任せたい」手段を選ばない桜の伶俐さは、過激だが必ず結果を出す。

「はい。勿論私も始めから、」

そしてこの残酷なほどの行動力が最大の強みだ。

「そのつもりです」

五十四、白昼夢を抜けて

? ついさっきまで都会のアスファルトを踏んでいたのに。
乱火はそろりと視線を上げる。

? 「ここに帰つてくることになるなんて。
この世界？ 彼岸では、冷ややかな白が全てを覆つていて。まるで「
我にひれ伏せ」と言わんばかりの圧迫感だ。

無数の色が脈絡無く点在する人間界もそれなりに乱火の虚無感を煽
つたが、ここも同じくらいに酷い。

「…彼岸も地上もたいして変わんねえ…」

ぽつりと声にして、そういえば、いつだつたか同じ言葉を呟いたと
思い出す。

? 変わらないんだな。結局。

どこにいても。何をしても。隣に誰がいても、? いなくとも。
ここは彼岸で、乱火の居るべき世界で、下らない命の駆け引きや意
地の張合いがあつて、今まで居た平和で悲しいあの場所は、たぶん
束の間の夢だ。

祈る者のいない教会。割れたステンドグラス。

微笑する女神像。後悔と懺悔。それらはいづれ人の記憶から抜け落
ちて行く。

フユの纏う気配はあの教会の空氣に似ていた。
自分の弱さの晒し方を知らない。

煙草にジーンズ、埃の混じつた風。

青い携帯。声。諦めていた。ごめんと。

あれは綺麗な夢だ。乱火の踏むべき地面はいつだつて「白」だつた
のだから。

目覚めたらもう怠惰に続きを見ることは許されない。

乱火は細長く伸びた柱に背中を預けて桜を待つ。

？どうせこうなつたら彼岸の向かう先は知れている。

詩月は戦うと言つていた。上層部は絶対に引かない。戦力は上層部が上。闇雲に戦つても勝ち目はない。

？勝ちに行くなら、神の地図を狙うのがせめてもの上策。

「あら。お久しぶり、乱火」

上層から降りて来た桜が意味ありげに笑う。

「ずいぶんな大役を引き受けたみたいだな」

「鍵のこと？察しが良いのね」

「皮肉か？楽しそうだな」

「あなたこそ。彼岸の力が戻つて来て楽しそうじゃない」

「ああ。今あんたが持つてる保管室の鍵が手に入ればもっと楽しいんだけど」

「そう」

桜が試すように乱火を見る。

「でも残念。渡す訳にはいかないわ」

チヤリ、と見せびらかすように挙げた桜の右手には金色の鍵が収まつている。

「第一これがあつたつて単身乗り込んでどうにかなる話じやないのよ。最低でも五人は必要。ご存じ？鍵は四つ、同時に開かなければならぬ」

桜は続ける。手の平で揺れる鍵は意外なほど簡素な見た目をしている。

「そして扉はとても重い。鍵は半回転させた状態で維持しなければ再び閉まってしまう。開けた人物が動くことは不可能よ。必然的に鍵を開ける人物のガードはその瞬間に緩む。仮に運良く鍵を手に入れ開けたとしても、最上層衛隊がそれを指を銜えて見てるかしら？ 有り得ないわ」

桜の言葉は皮肉挑発にしては説明過多とも取れる。

「つまりこういうことよ、乱火」

？教えなければ俺たちを簡単に殲滅出来るのに…それとも教えたと

「じろで何も出来ないと？」

「どんなに条件が良くても必ず四人犠牲になる」

？四人。

「だけど健闘を祈るわ。もうこの戦いは白紙に戻せないもの」
すれ違い際、桜は乱火の肩をぽんと叩き、囁く。

「犠牲は、甘んじて受け入れるしか無いのよ」

？四人？

すっと離れていく手。

「おい桜…！」

呼び止めようとする乱火の目の前で、離れかけた桜の手が人差し指
をそっと立てる。

黙つて。

？聴くなつてことか？今。どうして？

鍵を開けるのに最低でも五人。

確実に反旗を翻すと分かつてているのは詩月、朝凪。そして乱火。

一体誰をカウントしてる？桜。まさか彼岸の使い以外を？

四人犠牲になる。

？その犠牲は？

五十五、再生、それとも幻影

乱火と桜が言葉を交わしていた頃、華夜の跪くその場所には緩やかな風が吹いていた。抜けるような青空の下、途方も無く続く白い地面。まるであらゆる生命体が死んでしまったかのように、何の気配もない彼岸の片隅だ。沈黙する景色の中にただ一人、頑な白を汚すような黒い瞳を伏せて、華夜は屈んでいる。右手には身長を越すほどの剣。

静かな風が華夜の髪をさらさらと揺らす。

華夜が足下のいかにも柔らかそうな地面に剣を突き入れると、切り口からまるで血のように赤い液体が滲んだ。さらにぐつと剣を差し込むと、赤い液体が勢いを増して飛び散り、華夜の頬まで跳ねた。華夜はそれを気に止める様子も無くゅつくりと、切り口を深く広げていく。地面に見えたそれは一つの大きな繭のような塊で、覗き込めば空から差し込む光によつて内部が微かに確認できた。繭から溢れるほどの赤い液体の中に、横たわる人影がある。

華夜は切り口をさらに広げる。光が奥まで入ると、突然の眩しさを避けるように、その影が小さく身じろいだ。

少年だ。

「朝だぜ。チアキ」

華夜が少年に向かつて話しかける。

「チアキ」

呼ばれた名前に導かれるようにチアキと言う名の少年が起き上がる

と、赤い液体の中から白い肌と薄茶色の髪が露になった。

「よお。目覚めはどうだ。チアキ」

「…ぼく、寝てたの？」

「ああ」

「そつか」

そう言って、チアキは一瞬だけ思案するような仕草を見せる。

「全然覚えてないや。なんか変な感じ」

あつさりと回想を諦めたチアキは、自分を取り巻く赤い液体に目を移した。

「なんか。なんだろ、全部変」

一糸纏わぬ自分の姿。ひとりと触れる赤い液体。外界から隔絶された丁度人一人分の空間に、その二つが押し入れられていた。けれどチアキは、心の奥底で感じる違和感を上手く言語化できないでいる。鮮やかな赤い液体と、そこに放り込まれた一人の人間。華夜がその手に掲げた剣で光の道筋を作らなかつたとしたら、恐らくその二つは永遠に窮屈な暗闇に沈められていただろう。

「ほら」

華夜がチアキに向かってじく当たり前のようにな手を差し出す。

「うん」

華夜を知らない もしくは覚えていない チアキは、警戒心もなくその手を握った。華夜の手が、暗闇からチアキを引き上げる。

「あ」

ふいにチアキが声を上げる。

「なんだ」

「手、あつたかいね」

他意なく発せられた一言に華夜は答えない。

「それに良い匂いがする…。甘い」

ふわりと香る甘さと共に引き上げられたチアキは、触れ合つほど近い華夜にさらに近付く。何も言わない華夜は、拒絶するでもなくただ静かにチアキを見ていた。

そこでは、相変わらず緩やかな風だけが吹いていた。

五十六、ナツメ

「なつ……なつ……なつ……」

朝凪が頬をぱつと赤く染めて、ぱくぱくと「な」を連呼する。

「なつ……！」

朝凪の正面に、魂の戻ったナツメが立っている。

「なつ……！」

繰り返される「な」の字に、ナツメの中で物凄く嫌な予感がよぎる。予感というか確信に近い。

「ナツ……ナツメくん！……よぐ！」無事で……！」

「ぎやつ！」

朝凪ががばつと熱くナツメを抱きしめた。ナツメの不吉な確信をはるかに超える馬鹿力で。

「ちょつ、待つ、！……ギブ！……離……！」

まだ身体的に少年のナツメと、おつむはともかく外見は10代後半～20代の朝凪ではそれなりの体格差や力の差がある。だが仮にそのハンディがなかつたとしても、この状況は免れなかつたかもしれない。朝凪の女子とは思えぬ破壊力。ナツメはせっかく生き返ったが、残念ながらこのままでは圧死する可能性が高い。

「……！」

ナツメの本気の抵抗が、力ない無抵抗にすり替わった瞬間、やつと朝凪が涙の抱擁の腕を緩めた。ナツメはもはや真っ青だ。

「あれ？ナツメくん、どうしました！？まだ完全には回復してないんですか！？」

「いや……そうじやなくて

ぐつたりとしているのは抱擁という名の攻撃のせいだ。

「やつぱり無理に魂を奪うなんてことをするから！許せません！」

「あの、だからそうじや……」

「……桜さん、なんて酷いことを……！」

桜に対する怒りを露わにする朝凪。

「やつぱり絶対許せません！！！」

「…だから違うんだけど…」

「あつ、自己紹介が遅れました！ナツメくん私朝凪と申します。よろしくお願ひします。彼岸の使いです」

ナツメの弁解を置き去りにして、朝凪が突然名乗る。

「…知つてゐる。寝てたときの、聞こえてたから。なんとなく状況はわかるよ」

誤解を解くことは諦めた方が良さそうだ。

「ああ良かつたです！！戻つてきててくれて本当に！！」

ナツメの胸中など知る由もない朝凪は、華やかに捲し立てる。

「良かつたです！！今ちょっとといないんですけど、センパイもハルさんもきっと喜びます。私もすっごく嬉しいです！！」

朝凪は花のよくな笑顔で「嬉しい」と言う。ナツメはそれに戸惑う。ナツメには、知り合いでもない自分が生き返つたことを喜んでくれる相手がいるということが、上手く理解できない。

？嬉しい。嬉しいって言った。このひと。

ナツメには本当に嬉しいそに笑う朝凪の姿が、とても珍しいもののように見えた。その光景は決して不快なものではなく、心をやんわりと暖めていく。

？喜んでくれるんだ。俺が、ここに存在していくことを。

「あ……、ありがと…」

ナツメからほつと零れたお礼に、朝凪はきょとんとして首を傾げる。

「あの…、嬉しいって、思つてくれて」

ナツメはそう言いながら、おずおずと視線を逸らした。ぽかんとした表情で自分をマジマジと見つめる朝凪に、恥ずかしいよつな辯辯を感じる。

「なつ…なつ…なつ…」

デジヤヴ。反射的に身構えたナツメに朝凪が飛びかかった。

「なんですか」のカワイイ生き物はツツ……」

「うわあ……」

朝凪はぎゅうつと//クロの隙間も埋めるようにナツメを抱きしめる。
「嬉しいですよー。当たり前じゃないですかー。すぐ嬉しいですよー。
！ナツメくんラブー……」

「ぎやー……」

ナツメの悲鳴をスルーして、抱きしめる腕の力は更に強くなる。
暗くなるナツメの意識の片隅で、朝凪は危険人物にカテゴライズされた。

五十七、彼女は滅びの神

彼岸は人間によつて滅びる。その名は、ハル、ナツメ、フコ。

世界の終りを告げる先見の書。いつを捨ててしまつたら、未来を悔やまざに済むのかもしれない。

ドーム状の小さなその部屋で風姫に出来るのは、そらをひらと羽ペンが記す青い文字を静かに眺めること。

「風姫、どうにかならないのかな、他に未来は……、ねえ」
『終焉』や『滅び』以外の言葉を期待して、砂都が訴える。
そしてハルの心許ない視線を受けても、風姫は微笑するだけだ。
どうしようもない。そう答えるのと同じ。

詩月が口を開く。

「風姫、彼岸のさだめが変えられないのなら、私は彼岸の世界を風姫の穂やかな田とぶつかつて、詩月は言いかけた言葉を飲み込んだ。

それでいいと言つよつに風姫は無言を通す。

「詩月さん？どうかしましたか？」

ハルが詩月を気遣うよつに声をかける。

良くない考えに思い至つたかのように詩月は堅い表情で風姫を見ている。

「風姫……、私たちは……」

彼岸は人間によつて滅びる。その名は、ハル、ナツメ、フコ。

詩月の中で今までの状況がフラッシュバックする。

ハルの命の取り違ひがあつた。ナツメは無理矢理に魂を抜かれた。

フュは何も出来ずに、彼岸の狩りを見続けていた。

人間の命を管理しているという自負のあつた彼岸にとつて想定外のそれらは、世界のルールの狂いを意味していた。彼岸上層部は、その綻びをお粗末な辻褄合わせで繕つという。

初めの予定通りハルを死なせてチアキを生き返らせる。詩月は任を受けていないから正式なところは分からぬが、桜の行動を見る限りではナツメにも兄スバルとの取り違いが発生しているのだろう。それも入れ替える。フュに取り違いはないが、彼は彼岸に取つての不安因子だ。先見の書の言葉に後押しされて、抹消を決めたのだろう。そうしてそれが完了すれば一件落着。元通り。

ふざけている。詩月は心の中に吐き捨てる。

綻びは全て彼岸が招いたものだ。どれも発端はハルやナツメやフュが自発的に動いたものではない。そもそも彼らには、不確かな優しさや、罪の意識や、わざやかな願いがあつたに過ぎない。それを。

過ちも辻褄が合えば許されるというのか。

彼岸自身が犯した過ちに動搖していたところへ、先見の書のあの言葉。彼岸はあの言葉を盾にして、暴挙に出た。予言を掲げて自分たちを正当化している。彼岸の存続に必要な犠牲だと。必要悪が正義。それも一つの真理かもしれないが、受け入れるのは不快過ぎる。

受け入れられない。だから戦う。

「詩月さん？」

戦う。それが。

ああそだつた。最初から知っていた。じつして、戦うことこそが。

そうだ。

「大丈夫よ、ハル。覚悟決めなきやつて思つただけ」

それが彼岸の終焉を呼び込むのだとしても。

詩月の思考の中で突然腑に落ちた彼岸の終焉。

先見の書は彼岸の終焉を告げている。

詩月が負けるのなら、彼岸の終焉は訪れない。彼岸を滅ぼそうとしているのは詩月。上層部は曲がりなりにも守ろうとしている。それなのに予告された終焉。

つまりこの戦いの先には、大多数が思い描く結末とは別の未来が用意されている。

終りは訪れる。きっと。

「風姫。あなたは分かつてるのね。これから私が何をするかを」

「ええ」

「それでもあなたは私を止めないのね」

「ええ」

彼岸は変えられない。だつたら壊すしかない。

「ありがと風姫。私は、進むわ」

五十八、守りたいもの

「砂都、もう私に側近は必要ありません」

「え？」

風姫が唐突に告げた言葉に、砂都が固まる。詩月はそれを見て、初めて砂都が風姫の側近だったと実感した。砂都の動搖は、傍で見ている詩月にも明らかだった。

「あなたも行きなさい。あなたにも自分の意思で行動する権利があります」

対照的に風姫はゆったりと微笑む。

「でも、僕は……」

「あなたはよく尽くしてくれました。とても感謝しています。だからこそ、あなたには自分の意志で行動して欲しいのです。私と共に留まるのではなく」

それを聞いた詩月は、すっと視線を下げて地面の一点を見つめた。

「納得できる道を行きなさい、砂都」

「でも、風姫は行かないんでしょう？ だったら僕も、僕は、風姫とずっと一緒に」

「いいえ」

食い下がる砂都を風姫は穏やかに制す。

「私が参戦しては道義に反するでしょう？ 私には先見の書の番人としての誇りがあります。私は大丈夫」

「風姫……」

「行きなさい、砂都。守りたいものがあるのなら」

彼岸にどう口を出して良いか分からぬハルは、ただ黙つて成り行きを見守ることしかできない。

優しく砂都を諭す風姫。不安そうな目をして風姫の前に立つ砂都。

何も言わず、何かに耐えるように地面を見つめる詩月。

「守りたいもの……。僕は……」

砂都の迷いの中によぎるのは、フユの残像。

フユの涼しそうな瞳の奥にちらついていた、孤独と、優しさ。諦め。

「風姫、僕は、」

「砂都。今までりがとう」

風姫は砂都を遮るように言った。穏やかさだけは変わらず、けれど迷いは許さないといった口調。

「お行きなさい」

砂都がぎゅっと拳を握りしめる。

「僕こそ……。ありがとう、風姫。今まで、楽しかった」

風姫はその拙い言葉に優しく笑う。

砂都はそれ以上言えずに風姫に背を向けて、この部屋を出ようと扉へ向かった。けれどそのまま出でいくことが出来ずに振り返る。そして風姫の唇が密やかに動くのを見た。「さみなら。砂都」と。詩月とハルも後に続き、もう戻ることの無い時が扉と共に閉じられた。

風姫、あなたは何でも知っているけど、何にも分かってない。

閉じた扉を見つめて、砂都は心の中で語りかけた。

僕は、側近『だから』側にいたんじゃない…

「詩月、僕も彼岸と戦う」

砂都が呟く。

「守るよ。僕はフユを死なせたくない」

砂都のぐるりとした大きな瞳がハルを捕らえる。

「ハルとナツメも、守るよ」

「ねえ、あの人大丈夫かな」
ナツメが朝凪に向かってぼつりと呟く。

「え？」

「フコ」

「そうですね……。心配です」

朝凪は少し俯いて答える。

「というか……、それも心配なんですが、ナツメ君は大丈夫なんですか？」

「何が？」

「ご両親とか心配なやつてるんじや」

「ああ、それは平氣。さつき電話したから。友達のところにいるつて。俺、……」

ナツメは一瞬そこで言葉を切る。

？俺じゃなくてスバルが。

「信用されてるから大丈夫」

「そうですか。それなら良いんですけど……」

怪訝そうな朝凪を見て、ナツメはぱっと立ち上がる。

「やっぱちょっと見て来る！乱火つて人に伝言頼まれてるし」

朝凪の前をすり抜けながら、ナツメは思う。心配だから。それは嘘じゃない。けれどそれが全てでもない。

自分の置かれた環境のことを考えたくないからというのも、理由の一つだ。他のことを気にしていれば、その間は考えずにいられる。自分の名前を呼んでくれない母親のこと。仕方ないと理解することと、それを受け入れることは全然違う。居場所の無いこんな世界でもう一度目を覚ましたって、悲しいだけだということ。
もちろん母親だけがナツメの世界の全てではないけれど、そう割り切るにはまだナツメは幼過ぎる。スバルという、もうこの世にはい

ない兄の名が、いつもナツメの心に影を落とす。母親がスバルと口にする度に、存在を望まれたのは兄で、消去されたのが自分だと思い知る。始めの頃こそ自分はナツメだと否定していたが、錯乱する母親を何度も見て、だんだんと主張するのが怖くなつた。いつか母親が本当に狂つてしまふのではないか。これ以上自分の存在を否定されたら、自分も、壊れてしまうのではないか。

怖くて、そうやつていつしか諦めて、それならせめて願いを叶えてあげようとスバルのフリをするようになつた。

自分がスバルでいさえすれば、平和なのだ。スバルのフリをして振舞う。それだけ。けれどそのうちにナツメはスバルの記憶を思い出せなくなつていつた。もうどんな顔だったかさえ分からぬ。

母親があんなに溺愛するくらいだから、きっと優等生で、優しくて…。そんな風に思い出の上に理想が積もつて、ねじ曲がつていつて、そんな想像上のスバルをナツメは演じるようになつた。スバルという架空の人物は、物わかりが良くて、大人びて、本物の大人に手を焼かせない子供だつた。

そうしているうちにナツメ自身はどこか物事を達観したように見るようにになつた。同年代の子供と遊ぶには、冷静すぎるほど。同じクラスの仲間から、ある種の憧れや期待や嫉妬の目を向けられることはあっても、対等に話すのはナツメの方が疲弊した。クラスには友人もいるし、彼等を好きだと言えるけれど、あまり長時間一緒にいると、言葉に出来ないズレを感じた。遊んでいても、心に何かが引っかかる。友人が本当に楽しそうにしている横でナツメも笑つていたけれど、どんなに笑つても、必ずどこかが冷めていた。

ナツメが目覚めたくないと思った、そういう本質的な物事は解決された訳ではない。だから今は、許されるなら他のことを考えていたかった。フユを心配することを言い訳にするつもりはないけれど、フユを気遣うことで、ナツメは自分を守るひつとしているのかもしない。考えたくない。

朝凧はナツメが目を覚ましたことを嬉しいと言つた。今はそれで充

分。眠っていた間、詩月やハルが労るように守つてくれていたことも、ナツメは知つてゐる。乱火がこの世界へ引き戻してくれたことも、乱火に「ナツメを助けてやれ」と言つたのがフユだということも。誰もが碌に話をしたことも無いナツメを気にかけていたと、知つてゐる。だから今はそれで充分。今はこの瞬間の幸せの中に留まつて、他のことは考えないでいたい。

六十、スキヤンダル

？鍵、は。

どこもかしこも白いせいで、一向に進んでいる気がしない。変わらない景色に嫌気を感じながら、乱火は足早に目的地を目指す。

？一つは桜。あと三つ。可能性があるのは…

桜と同等以上の力を持つ者。それはまず間違いない。ならば鍵を持つ者は自然と限られてくる。恐らく最上層衛隊、その中でもとりわけ名が知られた者である可能性が高い。

乱火は記憶の糸にかかる名前を心の中で反芻する。

？椿。

乱火が人間界にいた間、彼岸でどのくらいの強者が現れ、どのくらいの権力者が引きずり降ろされたかは分からない。その中に乱火と面識のある者もいれば、そうでない者もいるだろう。椿は後者だ。だが名前だけは知っている。それは人間界に落ちる直前に聞いた名で、『誰もが恐れた乱火』という存在の、空いた穴を埋める者の名だった。

力があれば名は知れ渡る。

どんな世界でも先駆者は求められるもの。それが例え乱火のように『何もない』というだけのスタンスであっても、力を持つ者が貫けば意味が出てくるのだ。乱火に人間の命を狩ることを強要した上層部が、屈服させることも出来ず、その乱火との戦闘で返り討ちに合つ。それも一度だけでなく何度も。彼岸の絶対的存在である上層部に辛酸を舐めさせるような行動を平気な顔でとる乱火は、良くも悪くも目立つ存在だった。

噂が噂を呼び、乱火が初対面の相手に恐れられることも珍しくはなかった。乱火はそういったことに無頓着だったから、噂は完全に野

放し状態で、必然彼岸の話の種に乱火の名が上がるることは多かつた。人間界で有名人のスキヤンダルが流行るよう、彼岸でもスキヤンダルは恰好の暇つぶしになる。けれど乱火は人間界に落ちることを選び、巷の話題から乱火の名は薄れていった。そんな乱火がいなくなる隙間を丁度埋めるように頭角を表したのが椿だ。

乱火とは対極を成すタイプで、生まれも育ちも上層部というサラブレッド。炎を操る乱火とは違い、日本刀に似た細い刀を使い、ダイレクトに攻撃を仕掛ける。好戦的で、戦闘に迷いが無い。おまけに銀髪で、女。強く、その戦闘スタイルは無駄がなく鋭利に切り込むような華がある。そして公での戦闘を厭わない。

椿は新たなスキヤンダルの主役だつた。彼岸を去ると決まつた乱火の耳にもその名は届いた。乱火は他者の声で好き勝手に語られるその名を聞き流しながら、彼岸で繰り返されるその類の空虚さに、溜め息をついたのを覚えている。

? 椿は今も上層部の中心にいるだろ? だから向かう先は一つだ。

好戦的と謳われる椿なら、多分待つていい。戦いを。逃げも隠れもしないだろう。

戦いに適した場所で、誰かが鍵を奪いに来ることを待つていい。誰か。恐らく、過去に自身と同じように騒がれた、乱火を。

乱火は白い扉に手をかける。

? ここしかない。

ただ広いだけのその場所。この扉の先には地面以外何も無い。果てが無いほど広く、障害物は何も無い。

ギ…と重い音がした。足を一步踏み入れる。

「私の相手は貴様か。乱火」

乱火の想像通り、銀髪の女が出迎える。椿だ。椿は目を細め、満足そうに続ける。

「聞くところによると、ずいぶん強いそうだな。手合わせ願えるのは嬉しいよ」

「そりや光榮だ。でも俺は戦いたい訳じゃない」「乱火がそう返すと、椿はくくつと咽を鳴らした。

「鍵ならあるさ。私に勝つたらくれてやる」

「…勝つよ」

簡潔に勝利宣言をした乱火に、椿は笑みを滲ませる。そして言った。
「おまえは負けるよ、乱火。私にはもうストッパーが無いからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7283c/>

神話21世紀

2011年2月25日11時33分発行